

---

# そばにいて

大平麻由理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そばにいて

### 【Zコード】

N1329F

### 【作者名】

大平麻由理

### 【あらすじ】

高校一年の石水優花は、初恋の彼を密かに思い続けている。でも、その片想いはまだ誰にも知られていない。そんな一見平穀無事に見える優花の高校生活にも徐々に変化が訪れて……。

## プロローグ（前書き）

そばにいて にお越し頂きありがとうございます。パソコン・携帯のどちらでも閲覧できますので、行間をやや詰めこじつてあります。どうかご了承下さいませ。

## プロローグ

「優花、忘れ物はない?」

「うん。ないない。じゃあ、行つてきま～すー。」

わたしはサイドが少しこすれた黒のローファーを履き、心配そうに見送る母さんに笑顔を返す。

そして元気よく玄関からマンションの廊下に飛び出した。少し遅れて、パタンとドアが閉まる。

今日から一学期だ。宿題も入れたし、お茶も持ったし。準備は完璧のはず……だった。

お気に入りの夏の制服の胸元のリボンをエレベーターホールの鏡で確認する。

いい感じに結べた日は、何かいいことがありそうな気がするんだ。今日はまあまああってといろかな? 眠そうな日をした自分がちょっとひり情けないけれど。

「優花ちゃん、降りるけど?」

「あつ、おばさん、おはよひいざれこます」

はぐるりと振り向き、ペニッヒと頭を下げた。隣のおばさんだ。

片手にごみの大きな袋を持ち、もう片方の手で閉まるうつとするエレベーターの扉を押さえながらわたしを待ってくれている。ところがわたしは、手を振るだけで、一步もそこから動かない。だってわたしは……。

「わたしは階段で行くから、いいです。おばさん、ありがとうございます」

「やうかい? じゃあお先に」

おばさんは怪訝そうな顔をしながらも扉から手を離し、エレベーターの四角い箱ごと階下へ降りて行った。

わたしは毎朝登校の時、必ずエレベーター横の階段を使って下におりる。

わたしが住んでいるところは六階だから、ちょっと時間がかかるけど。だけど、平気。

足腰のトレーニングにもなるしね……。というのは家族や近所の人に訊ねられた時の建て前的な言い訳。

だって、このマンションの三階には……。

そう。三階には、あの人気が住んでいるのだから。同級生の吉永真澄君だ。

わたしの初恋の人。

階段を下りていくと三階の廊下の前で少しだけ立ち止まる。そして左手奥の通路を眺めるのだ。五つ目扉が吉永君の家になる。

いちいち扉の数を数えなくても一目で彼の家が区別できる。だって小学校一年生の時からここに住んでいるんだよ。網膜にくっきり焼き付いていて見間違いようがないんだから。

そして、ホントにホントに、たまーにだけど、吉永君がエレベーターホールに立つて待つているところにぱつたり出くわすことだつてある。

三階だと階段の方が早いかもしけないので、彼は絶対にエレベーター利用派なんだよね。

そんな時は、踊り場にいるわたしをチラッと見て、黙つてそのま

まHレベーターに乗り込む。

もしかしたらチラツとも見ていないのかもしれない。

いつも、じいつ誰？ みたいな不思議そうな顔してるんだもの。まあ、全く知らないとは言わせないけど、中学生になつた頃から、わたしたちはもう二年半も口をきいていないんだ。

それでもいい。無視されても知らんぷりされてもいい。

学校に行けばずっと同じ教室で勉強するんだし、クラスの仲間達としゃべっている頃ならいつだって聞けるんだし……。

わたしは彼にどんなに冷たくされても、階段を使うのは当分辞めないつもりだ。

吉永君が生活してゐる三階を、ちゃんと自分の足で踏みしめなきや嫌なんだもの。

わざやかなわたしの幸せタイム。これくらい許してくれるよね。

それと、もしもだよ。Hレベーターで吉永君と一人つきりになつたらどうする？

とてもじゃないけど心臓がバクバクしうきて耐えられなくなつちやうと思つんだ。

おまけに三階でドアが開いて、わたしと田が合つたとたん、彼が身体を翻してどこかに行つてしまつたなり……。もう一度と立ち直れない。

今日は、吉永君に会わなかつた。

もう一本後のバスでも余裕で学校に間に合つから、さつとそれに乗るんだ。

わたしは、バスの窓から遠ざかつていへマンショソを見上げながら、ふうふうと小さくため息をついた。



## 1・クラスメイト

「優花！　おっはよー」

わたしの前の席に座つて、ぐるりとこっちを向いたのは、本城繪里。高校に入学してすぐに仲良くなつた親友だ。

「夏休みなんて、あつという間だよね。うちの大学生のアネキなんてさ、まだ夏休み続行中なんだよ。ずるいと思わない？　タベ飲みすぎたとか言つてさ。あーーん。はやくあたしも女子大生になりたいい」

繪里はぱにぱにのほっぺを肘を突いた両手で支えながら、口を尖らせる。

夏休みにも何度か遊んだので、久しぶりというわけでもないけれど、尖がつた唇がいつもと違う感じがするのはなぜ？……あれ？なんだかきらきらしている。

「ねえねえ、繪里。グロスつけてる？」

わたしは彼女の唇を穴が開くほどじっと見つめて、そう聞いた。

「えへへへ。わかる？……内緒なんだけどさ、アネキの化粧ポーチの中からひとつ押借してきちゃつた。だって、すっごいいっぱい持つてるんだもん。ひとつくらいもらつたつてわかんないって」

繪里はそう言つて、大きな目をくじくじと動かす。

「次の休み時間に、優花にもつけてあげるね」

「ええ？ わたしは、いいよ」

「何遠慮してんのよ？ 無くなつたらまた別のを借りてくるから大丈夫だつて」

絵里はさつそくポケットをさぐつて、本田の戦利品をわたしの目の前にかざした。

透明のチューブに入った明るいピンクのそれは、どこか大人の香りがするようだつた。

「だつてさ、絵里はグロスに負けないくらい美人だし、とても似合つてるからいいけど……。わたしがつけたらきっと変になるよ。似合わないって。わたしには薬用リップがちょうどいいんだつてば」「優花つたらや、自分のことちつともわかつてないんだから……。もう一度、よーく鏡見なさいよ

「鏡？」

「そう。優花はかわいいの。磨けば光るんだから。素材としてはクラスでも一、二を争うくらいにいい線いつてるし」

「そ、そ、う、か、な……。でも、誰もそんなこと言わないよ。妹にはブスブスって言われるし、よしな……いや、近所の男の子にも、小学生時代にさんざんブサイクつていじめられたし」

危ない、危ない。わたしはまだクラスの誰にも、吉永君と同じマントショーンに住んでいいって言つてない。だつていろいろ詮索されたくないしね。

本当に同じ中学出身なの？ つて、絵里にびっくりされるくらい疎遠な関係だから、今さら昔はそれなりに仲良しだったなんて言えないよ。

あれ？ 彼女の顔が真っ赤になつて、目が吊り上つてきた。

「ひつどーい！ 誰？ 優花をいじめた奴。今から殴りこみに行つてやる」

「あ……。絵里、落ち着いて。昔のことだから、もつといいんだってば」

そうだった。わたしはつっかり忘れるところだった。絵里が誰よりも正義感溢れるヒーローだつてことを。でなきや、誰がこんなにきれいな顔立ちをした美人を放つておく？

自分のお姉さんには誰よりも辛口なくせに、一歩家を出ると友達思いで、曲がつたことが嫌いな絵里は、男子生徒からも一目置かれる存在なのだ。

その絵里がグロスをつけて来たつてこと事態が本日の大異変なわけ。わたしの過去の話は今ここでは関係ない。

怒りに震えて立ち上がった絵里の肩をなんとか押さえこみ、再び席につかせると、とにかく話題を変えるため、隣のクラスのもう一人の友人、大園麻美の話を持ち出してみた。

「そうそう、マリマリたらさ、夏休みに家族で沖縄に行つたんだよね。うらやましいな」

本当はあさみつて言つんだけど、ショッちゅう読み間違えられるので、いつのまにかみんなからマリマリと呼ばれるようになつたんだつて絵里が教えてくれた。

絵里と麻美は出身中学が一緒なので、わたしもいつの間にか仲良くなつていたんだ。

麻美んちのお父さんは開業医だ。お盆休みには、毎年家族でどこかに旅行に行くつて言つてた。きっとうちと違つてお金持ちなんだ

るつな。

沖縄のおみやげ買つてくるからねーと言つていた麻美の嬉しそうな顔が目に焼きついている。

わたしはこうやつてちゃんと話題を変えたはずなのに。  
吉永君のことはたとえどんな小さなことでも話題にしたくなかった……。だから麻美の話を持ち出したのに。

なのに、絵里つたら……。

「そうだつたね。ほーんとうりやましによ。でもさ、あたし、知ってるんだ。マミね、好きな人ができたつて言つてたでしょ？」  
「う、うん」

そういうえばこの前、三人で買い物に行つた時、麻美がそんなこと言つてたような気がする。

「その相手がこのクラスにいるつてわかつたの。誰だと思つ？」

絵里が尖らせた口の前で人差し指を立てて、ぴこぴこと左右に動かす。

誰つて……。あの時麻美は恥ずかしそうにして、まだ好きな人の名前は言えないって真っ赤になつてた。

麻美は陸上部のマネージャーをしている。ところことは、やつぱ、同じ部活の誰かつてこと？

わたしはそういうことにめっぽう疎い。誰が誰を好きとか、言われるまで気付かないことが多い。

言われても、知らない人だつたなんてこともあるくらい、世間知らずだ。

ましてや麻美は隣のクラスなんだよ。いくら仲が良くても麻美が自分から言わない限り、誰を好きかなんてわかるはずがない。

わたしはしばらく首を傾げ考えたあげく、絵里に言つた。知らな  
いってね。

「そうだと思った。優花はいつだつてのん気だもんね。へつへつへ。  
ちょつと耳貸して」

絵里はわたしの方に顔を寄せて、きらきらした唇をふるふると揺ら  
しながらクラスの男子の名をささやいた。

「え、え――――つ！」

たつた今聞いたばかりのその名前で、わたしは全身硬直状態に  
なつた。

## 2・ベストスリー

「吉永つとせ、まだ校内でそんなに騒がれてないナゾ、うちらの学年で二本の指に入ると思うんだ」

「や、二本の指？ それってモテるってこと？」

「うーん。それもあるけど、はつきりとモテだすのはまだもつ少し先だと思つ。そりじゃなくて、イケメンランクが上位ベストスリーつてこと。もしあの田で見つめられたら、あたしだってときめきすぎて息が止まっちゃうかも」

「そ、そんなあ……。絵里がときめいたら、わたしなんて到底勝ち田が無い。お願ひだから、彼を、吉永君を好きにならないで。

わたしは心の中で、絵里がライバルにならなによつひたすら祈る。

「だから、あたしはマリみて見る田あるなと想つたんだ。やうやく、優花は吉永と同じ中学生出身だよな。今度マリに情報提供してあげれば？」

「じょ、情報提供？ びつよ。困るよ、そんなの。

「何、ビクビクしてんの？ なんか優花つて、吉永に過剰反応するよね。あんたが吉永嫌いっていうのはわかってるけど、ちょっとくへこマリに暴力しなこと」

わたしつて、吉永嫌い……って思われてるんだ。しかたないよね。片想いがバレないようにするためには、まずは身近な絵里に悟られないようになるのが先決だもの。

だからと言って、麻美に協力するってのは無理な相談だ。だって、わたしの初恋の人なんだよ。いくら麻美が友人だからって、仲を取り持つようなことだけはやりたくない。

じついうことは最初にきつちり言っておかないと、後で辛い思いをすることになるのは、目に見えている。

この際、友だちがいがないと思われてもいい。

「情報つたつて、わたしは何も、し、知らないし。本当に吉永君のことは、何も知らないんだ」

そう。これでいい。ここには知らぬ存ぜぬでぐぐり抜けるしかない。

その時だった。わたしと絵里の頭上を人影が覆ったのは。

「おい……。これ」

突然わたしの横にぬつと現れたその人影の主は、目の前に見慣れた包みをぽんと置いたのだ。ピンクのバンダナで包まれた、一段重ねの弁当箱……。

なんでわたしのお弁当がこんなとこに？ もしかして、落としたのかな？ 捨ってくれたの？

わたしは恐る恐る、その親切な人物を見上げた。

よ、吉永……くん。

「吉永君。な、な、なんで？　わたしのお弁当、どこかに落ちた？」

確かに走ったのは、マンションのエントランスからバス停までの道だ。それと、学校に着いてからも廊下を小走りで駆け抜けた。そのどちらかで落としたのだろうか？　それにしても……。わたしのだつてよくわかつたよね。

わたしが不思議そうに吉永君を見上げていると、怖い顔をして案の定、ギロッと睨まれた。

「よしながくん、だと？　……まあいい。エレベーターの中で、おまえのお母さんから預かった」

それだけ言うと向事も無かつたかのよつなすました顔をして、わたしの左斜め後ろの自分の席に座る。

にしても……。吉永君って呼んだのが気に障つたのだろうか。そういえば、直接彼のことをそいやつて呼んだのは初めてだったのかもしれない。

だつて、ずっとしゃべらなかつたんだもん。苗字で呼ぶチャンスがなかつたんだから、しかたないよ。

「あ、ありがと。吉永……君」

わたしはまるでロボットのようにカクカクした動きで後ろを振り向き、小さな声で彼に向かつてそつと話した。もちろん、吉永君と言つのも忘れずに。

するとじつぱり吉永君は、いつものよつとチラシといつもを見るだけで、何も言わずに一時間目の授業の準備を始めるのだ。

吉永君、怒つてるよな。絶対怒つてる。

ああ、やっぱこよ。マジで氣まずこよ、このどよんとした空氣。よ  
りこよつて、あの吉永君に、忘れ物の遣につ走りをさせてしまつた  
んだもの。わつ、マジでどん引きをせざる。

わたしは前方から、もつひとつつの刺すよつな視線をひりひつと全  
身で感じていた。

しまつた。ここにも関門が控えていたのだ。すべてを見ていた絵  
里のとげとげしい視線。  
おつかなびつくり顔を擧げると、腕を組み、上から田線の絵里と  
ピタツと田が合つてしまつたのだ。

「優花、これはこつたことづつことへ、今日の休み、覚えてお  
きなさいよ」

怖い。絵里の顔が、一時間ドラマの女すじ腕検事になつてゐる。そ  
んなに睨まないでよ。

つていつか、口元がにやにやしてグロスが不気味に光つてゐるんだ  
つてば。

ああ……。わつと今のこと、説明しなきやいけないんだろうな。  
うちの母さんからお弁当を預かつたつて言つてたよね。それもエ  
レベーターの中で。

それつて、わたしと吉永君が同じマンションに住んでゐるの、バレ  
ひやつたつてこと?

## 2・ベストスリー（後書き）

読んでいただきありがとうございます。  
吉永君、ついに初登場！  
これからもどうぞよろしくお願いします

「母ちゃん、エリックヒルトビヒルト、お弁当を吉永……じゃなくて、真澄ちゃんに預けたのよ」

わたしは、遅めのおやつを食べながら、台所で立ち働く母ちゃんに文句をぶちまかる。

我が家では吉永君のことは真澄ちゃんで通っている。でもわたしは中学生になった時に、真澄ちゃんって人前で呼ぶのを辞めた。だってそんなの、子どもっぽいじゃない？ 友達からも馬鹿にされたりからかわれたりするしね。

それに漫画や小説で、恥らいながら好きな男の子のことを君つて言つていいるヒロインに密かに共感してるんだ。

それ以来、家以外では必ず吉永君って呼ぶことにじこる。もちろん、心の中で彼を思つ時も……ね。

「優花つたら、こつまでたつても小さこ子どもみたいだわね。何もそんなに怒ることないじやない」

母さんはちつともわたしの方なんて見ずくに、トントンとコズム良く、キヤベツを刻んでいる。わたしは見られていないのをこいことに、おもいつきり類を膨らませた。

「ほひほひ、そんなにふくれつ面をしないの」

な、なんでわかるの？ 母さんはきっと背中にも皿があるんだ。

「だって考へても『らんなさいな。優花が忘れ物をするからこんなことになつたのでしょ？ お弁当をバンダナでくるんだ後、自分の

勉強机の上に置き忘れたのは誰？ 優花に追いつくかなと思つて、エレベーターに飛び乗つたら、ちよつどいいタイミングで真澄ちゃんが乗つてきたのよ

「それで真澄ちゃんにわたしのお弁当を押し付けたつてワケだね。あ～～ん。おかげで、学校ですっごい恥ずかしかつたんだから

母さんが吉永君の手に、強引にピンクのバンダナの包みを押し付ける様子が目に浮かぶ。

吉永君も吉永君だ。なんで、断らなかつたんだろう？ 困りますつて正直に言えぱいのに。

「優花。あなた、何か勘違いしてない？ 母さんはね、無理やり押し付けたりなんかしなかつたわよ。真澄ちゃんが自分から言つてくれたの。僕が届けますってね。ちゃんとお礼言つたの？」

し、信じられない。吉永君が自分からそんなこと言つただなんて。でも、母さんが嘘つくなはずないし……。

わたしの目の前には巨大なクエスチョンマークが消える事なくさまよい続ける。

「それにしても、真澄ちゃん。男前になつたわね。惚れ惚れしちゃつたわ。ねえねえ優花。真澄ちゃんつてモテるでしょ？ どうなのよ？ カノジョとかいるの？」

やだ、母さん。鼻歌まで歌つちやつて。そ、そりやあ、モテる……わよ。今日だつて、絵里とそのことについて話したばかりだもの。だからつて、はいそうですなんて、誰が言つてやるものか。母さんはそんなこと知らないてもいいの。

それに、カノジョだなんて……。そんなの知らない。もしいたとしても、わたしが彼を好きなのは変わらないんだから。

「ねえ、優花。聞いてるの？」

「んもうー。しつこいなあ。真澄ちゃんのことなんか、わたし何も知らないってば。だってね、わたしたち、中学の時からずっと話もしてないんだよ。だから……」

わたしはそう言ったあと、重大なことに気付いた。そうだ。今日、久しぶりにしゃべったんだった。お互いにほんのちょっとだけ、会話したんだよね。

三年半ぶりの快挙！ よつしゃ！ と、膝の上で拳を作つて氣合と共に固く握り締める。

「だから……」

母さんは尚も背中を向けたまま、続きを知りたがる。

「だから、本当に、何も知らないの！ それと、ちゃんとお礼は言ったから。これから先、もしわたしが何か忘れ物をしても、絶対に真澄ちゃんに言付けないでね。真澄ちゃんに睨まれるくらいなら、先生に叱られる方がましだよ。真澄ちゃんだって母さんの困っている様子を見て、嫌々申し出たんだって。そうに決まってる」

「そりゃかなあ？ そんな風にはちつとも見えなかつたけど……。低い落ち着いた声で、ゆうちゃんの席は斜め前だからすぐに渡せます、とかなんとか言つてたわよ。にっこり笑つてね」

急に振り返つた母さんが、意地悪そうな笑みを浮かべながら、わたしに言つた。な、なんで、ゆうちゃんってところをそんなに強調するかな？ まさか吉永君がわたしのこと、やつひついたの？

ないない。ありえない。小学校四年生くらいの時を最後に、ゆうちゃんって呼んでもらった記憶はないんだもの。

だってその後は、ブサイクブッサーとかブス花としか言ってくれなかつた。

中学になつたらそれすら言わなくなつて。

何もしゃべらないまま、昨日まで過ごしてきたんだよ。

母さんつたら、絶対カマを掛けてるんだ。わたしが吉永君のネタを何か話すんじゃないかつて待つてゐるっぽい。

その手になんか乗りませんよ。

わたしは、おもいっきり不機嫌そうに顔を歪めて、母さんに言つてやつた。

「とにかく、もう一度わたしの前で真澄ちゃんの話はしないでねつ！ 今から宿題と、模試の勉強していくる」

そして、わざとスリッパの音を大きく立てて自分の部屋に向かい、力任せにバタンつて戸を閉めた。

3・真澄ひやん(後書き)

#### 4・幼なじみの定義

ついでつきまで、本当に勉強するつもりだった。だつて、あさつては全国一斉模試なんだもん。未来の夢を実現させるためにも、がんばらなきやいけないのに。でもさ、ちつとも集中出来ないんだよね。

お弁当を包んでいたピンクのバンダナは、しつかりわたしの手の中にある。吉永君が届けてくれたんだもの、すぐに洗うなんてできっこない。

結び目あたりを持つてくれたのかな？ それとも、底の部分に手を添えてくれていた？

ああ……。出来ることなら、ずっとカバンの中にでも潜ませておきたい。そんなことしたら母さんに怪しまれるだろうけどね。だからせめて今夜だけでも、こいつやって眺めていたい。

わたしはバンダナをそつと膝の上に置いて、引き出しから二つ折りになつたオレンジ色の鏡を取り出した。小さい子がするみたいに前髪をゴムでくくつて、丸い顔を映してみる。

うーん。これがクラスで一、一を争う素材だつて？ ほんとかなあ。

目はそんなに大きいわけではない。妹の愛花の方がパツチリ一重ですつと大きい。

唇も、絵里みたいにフルフルしてないし。顔の大きさだつて、これまた愛花の方が小さい。

絵里にも愛花にも敵わない。何もかもが標準的な普通の顔だ。

自分の顔の中で一番気に入つてゐるところといえば鼻かな？ 決して高くはないけれど、形はまあまあいい方だと思つ。

ふふふ。やつぱり絵里は、わたしを慰めてくれただけなんだ。お世辞にも美人とはいえないもの。ちょっとがっかり。

絵里は、一学期中にカレシを作るつて宣言したんだ。今年のクリスマスは彼とロマンチックに過ごすんだって。

そしてお姉さんにそのカッコいいカレシを頬張るのが目標って言つてた。

そのためにはもつと女の子らしくなる必要があるので、グロスをつけて、女性であることを意識するように心がけているらしい。

絵里にはすでにお田辺での先輩がいて、その人に振り向いてもらえるよう、最大限、努力するのはもちろん、最後は自分から告白するのもアリとまで言つ。

さすが絵里。わたしも見習わなくちゃいけないとは思つ。思つけど……。

吉永君に告白だなんて、逆立ちしても無理。どうせわたしのクリスマスは、愛花と一緒に家のリビングでクラッカーを鳴らして、チキンとケーキを食べて過ごすつてことになるんだろうね。

絵里がつけてあげるつて言つたあのグロス。わたしには似合わないよ、なんて言いながらも、しつかりメーカーと商品名はチェックしておいた。

今度、同じのを買ってみようかな。学校が休みの日はこつそりつけてみてもいいかも。

わたしは持つていた鏡をたたんでバンダナを手首に巻くと、ベッドの上に寝転がり、昼休みに絵里に問いただされたことをひとつひとつ思い出していた。

「優花。」の大嘘つき。すべて白状するのよ。いい？ わかつた？」

図書室の裏手にある古びたベンチでお弁当を広げながら、絵里は情け容赦なく、わたしを攻め立ててきた。

でもね、わたしにはわかつてたんだ。絵里が本気で怒つているわけじゃないって。だって、いかにも興味津々つて顔だつたもん。目は口ほどにものを言うつてアレ。さつきの母さんみたいにね。

わたしは繪里の熱意に負けて、正直に全部しゃべった。あつ、でもね、吉永君に片思い中のことだけは言わなかつた。そこまで教える必要はないでしょ？

そうは言つても、絵里のことだから、気付いたかもしれない。

わたしが、あーでこーでと吉永君との繋がりを簡単に説明し終えると、絵里がのっぴきならないことを口にする。

「それって、あんたたち、幼なじみじやん。うわー、もえーーつ！」

幼なじみ?  
わたしと吉永君が?

それは違う。絶対に違う。そりやあ小学校からずっと一緒にだけど、それなら鈴木も城山も久木も成崎も、同じマンションに住んでる同級生たち全部が、もえ〜な幼なじみになっちゃう。

幼なじみつていうのは、ほら、アレでしょ？ 朝起きたら勝手に家の中について朝ごはんを食べてたり、何だかよくわからないけど、起こしにきたりする、家族同様みたいな付き合いのあるべつたりした関係……だよね？

わたしと吉永君は、そんなに親しくないもん。

小さい頃、だつて、ちゃんとインターホン鳴らして、おじやましま  
すつて言いながら遊びに来てたし、一緒にご飯を食べたのだつて三  
回くぐりいしかない。

母さんだつて、吉永君のおばちゃんに馴れ馴れしく話しかけたり  
しないよ。この間はうちの子がお世話になりました……なんて、結  
構他人行儀にお礼なんか言い合つてるんだもの。

これはもう、幼なじみの定義から大幅に逸脱してゐる。単なる近所  
の同級生としか言いようがない。

だから絵里にはしつかりと否定しておいた。でも絵里は、わたし  
の言つことなんかおかまいなしに、もえもえ～つて、ひとり盛り上  
がつてるんだよ。変なの。

絵里は中学の時に隣の市から転校してきたから、今住んでる家の  
近所に幼なじみがないんだつて。だから余計に、わたしと吉永君  
の関係がうらやましいってそう言つてた。

そんなものなのかな？ でもひとりでにニーンマリするような胸キ  
ュンの思い出なんて何一つないんだよ。こつそのこと、もつと家が  
離れている方が、謎めいてよかつたのにつつてそう思つ。

いつから吉永君のことが好きなのかもわからぬくらい、昔から  
好きだつた。六年生の時には、もうすでにはつきり好きだと自覚し  
てたから、それ以前なんだよね。意地悪ばかりされてたのに、なん  
で好きになるかなあ？ 今もつて、不思議で仕方ない。

天井を見ながらベッドの上でニヤニヤしていたわたしを、愛花の  
けたたましい声が突如襲つた。

「お姉ちゃん… お姉さん。せやー。せやー。」

中学生三年生の愛花が、あきらかにわたくしよつこやーやしながら、ベジテから姉であるはずのわたしが、ことも簡単でござりやつむれじた。

## 5・一生の不覚

わたしが愛花と一緒に部屋から出ると、玄関で母さんと誰かがしゃべっているのが見えた。どうもありがとうと言いながら、頭をぺコリと下げる母さんの肩越しにわたしの目に映った人は……。

な、な、なんで、吉永君が、そこへ?

「あらっ、優花。ちょうどよかつたわ。真澄ちゃんがね、ぶどうを持つて来てくれたのよ。今年もおじいちゃんの家の畠でたくさん収穫できただって。毎年頂いてるでしょ? たあ、優花も真澄ちゃんにお礼を言つて」

わたしはドキドキしての話を語りながら、ようやく極めて平静を装つて、短くありがとうだけ言つた。そして、横でいたずらっぽい田をして一ヶと笑う愛花を睨みつけるのも忘れず。

いつも愛花は、わたしが教えたわけでもないのに、お姉ちゃんの好きな人は真澄ちゃんでしょ? とひやかしてくれる。

年の近い姉妹だと、お互にのことが何でもわかつちゃうのかな? 愛花にしてみれば、吉永君に会わせてあげようと気を利かせたつもりなのかもしれないけれど、今日はいくらなんでもタイミングが悪いよ。

お弁当事件があつたばかりなんだよ。こんな風に顔を合わせるのつて、やっぱり気まずい。

なのに吉永君が、どうこうわけかいつものふてぶてしい態度は微塵も見せずに、俯きながら、どうもわたしに返事をするのだ。どうして? なんか調子が狂う。

「久しぶりに一緒に夕食でもつて誘つたんだけど、真澄ちゃん、今から塾に行くんだって。誰かさんと違つて偉いわねえって、言つてたところなのよ」

一緒に夕食つて……。小さい頃とは違つんだよ。今は吉永君と仲がいいわけでもないのに、勝手に夕食に誘うだなんて。母さん、どう考へてもおかしいよ。

吉永君、いつまでもこんなところになくていいから、早く塾に行つて。

わたしは、どうしようもなく申し訳ない気持ちになつて、心の中でごめんなと誤りながら、玄関にたたずむ吉永君をそつと伺い見る。あれ？ 吉永君が笑つた。確かに今こいつを見て、口元を緩めてこいつりしたのだ。

わたしもつられてやや引き攣りながらこいつと微笑み返した。その後も、吉永君は、どこか笑いを堪えるような感じで、時折肩が震えている。

なんでそんなに機嫌がいいの？

「それじゃあ、失礼します」

吉永君が母さんに軽く会釈をする。

「お母さんにもよひじへえてね。わざわざひつも、ありがと」

母さんは吉永君を玄関先で見送り、戸を閉めた直後、わたしを見てプツとふき出した

「あら、やだ。優花のその前髪、どうしたの？」

「あははは！ ほんとだ。お姉ちゃん、ウケるー。手首のバンダナもイリフだし。怪我でもしたの？」

お腹を抱えて笑い出す一人を無視して、わたしは大急ぎで洗面所に駆け込み、上半身を鏡に映してみた。

あ、ありえない……。

そうだ、さつき鏡を見た時、前髪を束ねて頭のてっぺんに結んだんだった。それに手首にバンダナもつけたままで……。

こんな格好、小学生ですらやんない。今どきの子はもっとおしゃれだからね。

この姿を吉永君に見られたってこと？ だから彼、笑ってたんだ。わたしはその後、極度の自己嫌悪に陥り、夕食の母さん特製の串カツがほとんど喉を通らなかつた。

翌朝わたしは、ベッドの中で身体を丸めて、ため息ばかりついていた。高校に入学して初めて学校を休んだのだ。

何度も何度も携帯を手にして、今何時か確認する。なのに、さつきから三十分しか経っていない。一時間目の授業が終わつたところかな？ みんな、何してるんだろう。

吉永君も、元気に授業を受けてるのかな？

母さんはついついさつき、仕事に行つたばかりだ。学生時代の友達が経営しているインテリアショップに、週に三回、手伝いに行つてい

る。

わたしが夕べあまり食べなかつたものだから、てつくりどこか身体の具合が悪いと思い込んでいた母さんが、心配そうにわたしのところで手をやって、学校には連絡しておいたからね、と気遣いながら仕事に向かつたのだ。何かあつたらすぐに電話しなさいよと書いて。

母さん。嘘つこい、ごめんなさい。本当は、どこも悪くないんだ。ただ、今日はどうしても学校に行きたくなかった。吉永君に会いたくなかったから。

昨日のあのひどい格好を見られたんだと思うと、玄関から一步たりとも外に踏み出すことが出来ない。いつたいどんな顔をして彼に会えつていうの？

多分、明日は行けると思う。つづく、絶対に行く。だから、今日だけはわがままを許して……。

わたしは、母さんが用意してくれていたおかゆを食べて、冷蔵庫から冷えたぶどうを出してきた。黒い大粒のそれは、店で売っているのとは比べ物にならないほど甘くて、果汁がたつぱりあふれ出す。毎年、この時期になると吉永君ちからやってくる、大きなぶどう。わたしは果物の中で、このぶどうが一番好きかもしれない。

毎のバラエティー番組を見て、そのまま連續ドラマをつけっぱなしにしていたけど、ちつともおもしろくない。夏休みに母さんと燐花の三人で見た時は、あんなに感動して泣きながら見ていたのに。

学校のことばかりが気になる。やつぱり、休まずに行つた方がよかつたのかな。どちらみち吉永君とは学校では何の接点もないんだし、これから先もしゃべることなんてないに決まつてゐるのに、わしつたら何を怯えていたんだろう。

変な格好や最悪の顔なんて、とつぐの昔に全部見られてる。今さらよそ行きの姿を見せたって、過去が消えるわけでもないし。

だったら、昨日のことなんか気にせずに、堂々と学校に行けばよかったのだ。

そう思つたとたん、俄然元気が出てきた。

明日は模試だ。机の上の本棚から数学の問題集を取り出し、苦手な単元を復習する。わたしは小学生の時に、すでに将来なりたいものが決まっている。

だからそれを実現させるためには是非とも入りたい大学があるのだ。

よし！ がんばるぞ。わたしは、難しい数式と悪戦苦闘しながらも、なんとか集中して勉強に取り組んだ。

携帯からメールの受信を知らせるメロディーが鳴ったのは四時。絵里からだつた。

身体、大丈夫？ 帰りにマリと一緒に優花んちに寄るね。

しばらく画面を眺めた後、ふと我に返つたように脳が超高速で回転し始める。

大変だ。こんなことじつる場合じゃない。

わたしは机の上の問題集を慌てて片付けると、する休みがバレないように再びベッドにもぐり込み、タオルケットをおでこまで引つ張り上げた。

## 6・友の見舞い

「意外と元気そうじゃん。安心したよ」  
「ほーんと。いつも元気な優花が学校休むんだもの。びっくりしちゃつた」

ベッドの上に並んで座った絵里と麻美が、まん中に座るわたしの顔を心配そうに覗きながら言った。

「一人とも、わざわざこんなところまで来ててくれて、ありがとうございます」

絵里と麻美の家は、学校をはさんでうちとは反対方向にある。通学定期のないバス路線を使ってここまで来てくれたのだ。なんだか胸がジンとする。

本当はずの休みだったの、なんて口が裂けても言えない。ごめんね、絵里、麻美。

「いつもの優花でよかつた。熱出してうとうと寝つてるのかと思つてた。だって、昨日いろいろ聞いたらやつたじゃない? 吉永のこと、根掘り葉掘りさ。優花はあいつのこと、あまり良く思つてないのに、あたしつたら調子にのつて、幼なじみもえーとか言つたし……。そのことにして寝込んだやつたのかなあなんて思つて、责任感じてたの」

そ、そなんだ。ということは、まだわたしが吉永君を好きだつてことはバレてないんだね。

「でさあ、あたし気がついたんだけど……」

今度は何？わたしは心持ちドキドキしながら絵里と麻美の顔を交互に見る。えつ？ 麻美……。顔が赤いよ？ さつきから口数が少ないとは思っていたけど。

「昨日優花が言つてたじやん？ 小学生の時、いろいろ言われていじめられたって」

わたしの左横で赤い顔のまま下を向いている麻美をよそに、右隣の絵里が真剣な眼差しをわたしに向ける。昨日、今から殴りこみに行つてやるつて怒りを露わにしていたあの話だ。

「そいつって、吉永のことじやない？」

わたしの心臓が、ドクッと大きく鳴つた。すると麻美も同時に顔を上げたのがわかつた。麻美もわたしと同じで、もつすでに吉永君に関することに過剰に反応する体质になつてしまつたのだろうか？ わたしは言い当てた絵里にしぶしぶうんと頷いてみせる。だって話が嫌な方向に行きそうな気がするんだもの。

「やつぱりね。じゃあそのことがトラウマになつて、優花は吉永のことが許せないんだね」

絵里は一人勝手に納得して、話を片づけていく。別に、トラウマじゃないんだけど……。いじめるつたつて、ただ、変な呼び方をされただけで、叩かれたりとか陰湿ないじめを受けたわけじゃない。いや、逆にその頃が今まで一番仲が良かつたんじゃないかつて思つくらいだ。

ある日、学校から家に帰つたら、どつちの親もいなくて、ランドセルを玄関前に置いたまま、一人で隣街の大きな公園に行つたこともあつたし、雨の日に階段の踊り場で、集めていたカードの取替え

つこもした。

でも、ここには麻美もいる。吉永君のことが好きだと聞かされている以上、彼との過去の出来事を必要以上に言わない方がいいよね。ここは絵里の思い込みに同意するのが賢明な選択なのかもしない。

「う、うん。まあね。でもね、トラウマになるほどこじめられたつてわけでもないんだ。わたしだって結構ひどいことを言い返してたからね。だから今はなんとも思ってないよ」

「ふうん。それならいいんだけど。でね、優花にちょっと頼みがあるんだ」

絵里はそう言つて、麻美に何か口配せをした。それでもなかなか口を開けようとしない麻美に絵里がいら立ち始める。

「マリ、はやく言こなさこよ。ほり、もたもたしないで!..」

「わかった。言つからり……」

麻美はカールした長めのまつ毛をふるつと震わせて、よがよがわたしの方に向き直つた。

「ねえ、優花。その……。昨日あたしの好きな人のこと、絵里から聞いたよね?」

「……うん」

なんでだろう。突然胸が締め付けられるような圧迫感に襲われる。声も掠れる。

きっとのことだ。麻美も吉永君が好きだつてこと。出来ることならば、この先ずっとそれだけは聞きたくなかった。

でも親友である以上、遅かれ早かれこの状況に直面せざるを得な

いのはわかつていた。でも……。その日が今日だというの？

「あたしね、吉永が……好きになっちゃったみたいなの。夏休みに入つてすぐの地区の陸上競技大会で、カレ、二百メートルで大会新記録出したでしょ。あの時、ビビビって来たの。マジでカッコよかつたんだから」

記録のことは母さんから聞いた。まるで自分の子どもが快挙を成し遂げたみたいに喜んでわたしと愛花に半分自慢げに知らせてくれたのだ。

わたしも母さんに負けないくらい嬉しかつたんだから。

次の日、朝刊の地域スポーツコーナーの小さい一角を、こつそり切り抜いて宝箱に保存しているのは家族の誰にも内緒なんだ。

確かに、吉永君の走りつぶりは凄まじくカッコいい。中学の時、体育祭は、別名吉永祭りつて言われるくらい彼の活躍はすごかつた。そんな彼の姿に麻美が心を奪われるのも仕方ない。

「優花が吉永と同じ中学出身なのは知つてたけど、まさか住んでるところまで一緒だなんて今朝まで知らなかつたんだから。優花つたら黙つてるんだもの。もつと早く言つてよ」

「だつて、別に言つ必要なんてないでしょ？」それに、マミが吉永君のことを好きだつて知つたのは昨日だよ

「それもそうだね。ふふふ。でもさ、今日絵里に聞いて、ひつくり返りそつになるくらいびっくりしたんだから。最近は部員の住所録もコピーしちゃダメって言われるでしょ？ 電話番号しか知らないんだもの。いきなり住所とか聞けないし。でね、優花の知つてる範囲でいいから、カレのこと、いろいろ教えて欲しいの。カレがどんな食べ物が好みだとか、好きなアーティストが誰だとか。あまり聞きたくないけど、カノジョがいるのかどうなのか……とか。もし、昔の辛いことを思い出すようなら無理は言わないけど……」

田を潤ませながら、切実に訴える麻美。いくら無理は言わないって言つても、このままはいそうですかって、田の前の麻美の願いを退けるわけにはいかない。

「まさか優花。優花も吉永が好きってことはないよね？ もしそうならあたし、優花にとてもひどいこと……言つちやつたかも」

「麻美……。どうしよう。本当のこと言つた方がいいのかな？ わたしも吉永君が好きだって。でも、もしそんなこと言つたら、わたしたち、これからどうなるの？ もう親友でいられないよね。」

## 7・泣かない

「ま、マミーたら。なに言ひてるのよ。そんなわけないじゃん。吉永君はね、わたしなんか全く眼中にないんだから。だって、カレとはもう三年半もしゃべっていないんだよ。あ、昨日のお弁当事件は別ね。だからそんなのありえないって。わたしに遠慮することなんてないんだってば」

わたしはありつたけの笑顔を振りまいて、哀しそうな目をした麻美を元気付ける。

「そうかもしれないけど……。あたしが聞いてるのは吉永の態度じやなくて、優花の気持ちだよ。本当にいいんだね？　あたしが吉永を好きになつても」

「うん。もちろん。わたしはこれから未知なる出会いに胸ときめかせてるんだから。マミを応援……するよ」

「わかった。ありがとう、優花。あたし、一生懸命がんばる。カレにあたしのこと好きになつてもらえるようにがんばつてみる」

麻美がきつぱつとそう言い切った。これでいいんだ。もしかしたら吉永君も、マネージャーとしての麻美ではなく、ひとりの女の子として意識し始めるかもしれない。

そうなつたら……。

吉永君は麻美と付き合つことになるのかな。

彼のあの真つ直ぐな視線が麻美だけに注がれる日が……来るんだ。

「マミ。そうでなくちやーーー。あたしも先輩へのアタック、ますますがんばっちゃうーーー。優花も早くいい人見つけなきやね。三人して、おもいつきりロマンチックなクリスマスを迎えるの。いいと思わな

い？」

絵里が腕をのばしてわたしと麻美の両方を引き寄せるように抱え込む。わたしは鼻の奥がツンとするのをなんとか我慢すると、両手を広げて、絵里と麻美の肩を抱き寄せた。

麻美は優しくて、控えめで、それでいてとっても頭のいい女の子なんだ。

数学のわからないところも先生よりわかりやすく教えてくれるし、忘れ物をしたら体操服だつてためらうことなくすつと貸してくれる。将来はお父さんの後を継いで、医者になるつて言つてた。だから今やつてる陸上部のマネージャーも高一の間だけつて約束なんだつて。

そんな麻美の頼みを即座に却下するなんて出来るわけがない。

それに、わたしだつて吉永君にただ片想いしてるだけなんだもの。吉永君はわたしのカレシでもなんでもないのだから、麻美の彼への想いを咎める理由はどこにもない。

わたしは、本棚から中学の卒業アルバムを出してきて麻美に渡した。そして吉永君のクラスのページをめくつて開く。

「写真は卒業アルバムくらいしかないけど……」

麻美が目を輝かせて写真に見入つている。絵里もどれどれと書いて身を乗り出して覗き込む。

「きやあー。かわいい。この写真撮つたときつて、去年の秋くらいだよね。一年くらいしか経つてないのになんか幼く見える。カレつてハーフっぽいよね」

「マジで？ めっちゃかわいいじゃん。あたしも吉永に乗り換えよ

うかなー」

「もう、やめてよ。絵里は津久田先輩でしょ？ 吉永はあたしのものなんだから。絵里には渡さないー」

わたしはそんな一人のやりとりを聞きながら、小学校の卒業アルバムもあちこち引っ張り出して探していた。そこにはもつとかわいい吉永君が写っている。麻美にも見せてあげたい。

だつて麻美があんなにも嬉しそうに笑つてゐるんだもの。吉永はあたしのものだつて。

ああ、苦しい……。胸だけじゃなくて、腹も腸も、内蔵全部がギュッてなつて、息すらも出来なくなるぐらうに苦しくて痛い。やだ。田の前が霞んでくる。泣きそつ。

「な、なんか、食べる物、持つて来るね」

わたしはやつとの思いでそれだけ言って、顔を見られないようにして部屋を出た。何も知らない二人の明るい笑い声が、妙にクリアにわたしの耳に届く。

絶対に泣かない。わたしは天井を仰ぎ見て歯を食いしばった。そして洗面所の鏡に映る自分に向かつてもう一度、泣かないと宣言する。

水でバシャバシャと顔を洗い、溢れそうになる涙を押し戻すことにどうにか成功した。

台所で冷蔵庫からジュースを取り出す。すると昨日吉永君が届けてくれたあのぶどうが、目の前にでんと姿を現すのだ。これだけはわたしのもの。麻美には悪いけど、あげたくない。わたしは見なかつたことにしてそつと冷蔵庫を閉じた。

なのに次の瞬間、また冷蔵庫を開けていた。一瞬ためらつたけれど、実が外れないようこそこそと両手で抱えてボールに入れ、水道水で洗い流す。

大きめの皿に盛り付けて、ジュースとクッキーも一緒にみんなの待っている部屋に運んだ。

「お待たせ」

「わあっ！ 優花、ありがと。おいしそうだね？」このぶどう

絵里が即座に手を出す。

「絵里！ ちょっと待った！ まずはマリから。実はこれね、吉永君たちのぶどうなんだ。昨日、母さんがお裾分けしてもらつて……」

吉永君が自ら届けてくれたとは、さすがにこの場では言つていい。こんな言い方になつたけど嘘は言つてないよね。

これで最後の房になるけど、わたしはまた来年だって食べられる。毎年食べられるんだからと言い聞かせて目の前の一人に差し出した。今日は麻美が全部食べていいいからね。甘いんだよ。とつてもおいしいの。

麻美が一粒食べた後、絵里も待つてましたとばかりにピンポン玉くらい大きい実を頬張つた。

「おいしい。これ、最高！ そつか、吉永のおじいちゃんのぶどうなんだね。マリ、良かつたね」

「うん。優花、ホントにありがと。優花も食べて」

「ううん、わたしはいいんだ。さつきも食べたからね。マリに喜んでもらえて嬉しい……」

また田の奥が熱くなってきた。ダメだよ。絶対泣いちゃダメ。今ここで泣いたりしたらすべてが水の泡になる。唇を噛み締めて不自然に瞬きを繰り返す。

その時だった。玄関で騒がしい声がしたのは。

ほら、早く入つてよ。お姉ちゃんなら、部屋で寝てるから。  
お、おい！ やめろよ。あいちゃん。  
なに言つてんのよ。自分の田でお姉ちゃんが元気かどうか確かめなさいよ。真澄ちゃんの意気地なし！

絵里も麻美も、そしてわたしも。互いに顔を見合させたまま、ドアの向こうの会話に黙つて聞き入つていた。

「お姉ちゃん。ただこまー！ 具合まだいい？」

愛花がわたしの部屋のドアをノックもせずに、いきなり入って来た。

「あっ……。えっと、絵里あとと、マリちゃん。来てたんだ。こんなに

ちば。こりこりしゃー

愛花。いらっしゃいなんて言つてる場合じゃないでしょ？ なんで愛花の後ろに、吉永君が突つ立つてゐるわけ？

マリなんて、ポカソントロを開けたまま、完全に固まつてゐる。

「ほりほり。真澄ちゃん。そんなとこで早くこつわに来て。あのね、お姉ちゃん。つこわつか、Hレベーターで真澄ちゃんと一緒になつたんだ。真澄ちゃんつたり、ゆうけちゃん、大丈夫？ なんてマジで心配そつに聞くんだよ。そんなに気になるんだつたら自分の田で確かめなさいつて、こままで連れて來たの。大変だつたー。それじゃあ、こまつ……」

やう言つて部屋を出て行つたはずの愛花がまたもやすぐに舞い戻つて来て、ドアの隙間から顔だけ覗かせる。そしてとんでもないことを口走るのだ。

「絵里さん、マリさん。真澄ちゃんとお姉ちゃんつて、周りがイライラするくじこむじかしいの。うつとくつつけなきつてください。よしへー。」

愛花はそれだけ言つと、瞬時にそこから立ち去る。なんという逃げ足の速さ。でもこのまま見逃すわけにはいかない。なんで、麻美の前でそれを言つて、麻美の表情がみるみる曇つていいくのがわかる。

「あ、愛花っ！ 待つて！」

「あいちゃんっ！ ひひ、待て！」

わたしと吉永君が愛花を捕まえようとした部屋を出たのはほぼ同時にわたしたちも…

「愛花！ 待ちなさい。わたしの友達に何でそんない加減なこと言つの？ いますぐ謝つて。真澄ちゃんにも、絵里にも。そして、ママ

愛花の腕をひつ捕まえて、大きく息をしながらなんとかそれだけ言つた。

あ……。わたし今、真澄ちゃんつて言つた？ ビ、ビリじよ。ひ。絵里と麻美にも聞こえたよね？

でもそんなことを気にしてる場合ではない。とつととくつつけちやつてくださいって……。なんでそんな突拍子もないことを言つんだろ？ 麻美が……。麻美がなんて思ったか。

「お姉ちゃん。なんでそんなにムキになつてるの？ 別にいいじゃん。あたし、嘘言つてないよ。あたしは真澄ちゃんが本当のお兄ちゃんになつてくれたらいいのになつて、小さい頃からずっとそう思つてたの。一人がくつつけばあたしの夢が叶うし……」

最後まで言い終わらないうち、わたしの右手が愛花の左頬を打つていた。ハツとしたように愛花がわたしを見た。

「おい、何するんだ！」

わたしの後ろにいた吉永君が打つた右手を掴んで、わたしを愛花から引き離した。

その時、玄関のドアがパタンと閉る音が聞こえた。

「マミー！ 待って！」

絵里が玄関に向かつて叫ぶ。

「た、大変。優花。マミが外に飛び出しちゃった。あたし、追いかけるね。そ、それじゃあ、今日はこれで。優花。お大事に。吉永。優花のこと、よろしくね」

絵里が顔面蒼白になりながらも慌てて靴を履き、麻美を追つて外に駆け出す。

「お姉ちゃんのバカ！ お姉ちゃんなんか大ッキライ！」

次は目の前で左頬を押さえていた愛花が大声でわめきながら、玄関を飛び出した。

いつたい何が起こったの？ わたしの目の前から、次々と人が消えていく。わたしはとたんに足の力が抜けて、その場にへなへなと座り込んだ。

その瞬間、わたしの右手を掴んでいた手がそつと離れた。リビングへと続く廊下にへたりこんだわたしを見下ろすのは、吉永……君？

「おい、大丈夫か？」

わたしの頭上に注がれる声の源は、間違いない吉永君だった。わたしは力なく、遙彼方にある彼の顔を見上げる。

「吉永君……。『めんね。愛花のこと、許してくれる?』

「許すも許さないもないよ。あいつ、俺達のことかなり誤解してるみたいだな。それとも、おまえ……。何か言ったのか? あいちゃんに何か吹き込んだ?」

それって……。どういうこと? わたしが愛花に、吉永君との関係を誇張して言つたとでもいうの? そんなわけないじゃない。

「何も言わないわよ。だって、わたしたち。その……。昨日まで、何もしゃべらなかつたんだし、一緒にいることだつてなかつた。それなのに、いつたいて何を吹き込むつて言つの?」

「それもそうだな。おまえがそう言つなら、信じてやるか。あいちやんの思い込みも、あそこまでいくと、たいしたもんだ。で、マネージャーも飛び出したわけだけど。どうなつてるんだ? おまえのダチは

「うだ。こんなことしてられない。わたしも追いかけなきゃ。愛花もどこに行つたんだろ?」

「わたし、行かなきゃ。愛花だつて、捜さないと」

わたしは立ち上がり、玄関に向かおうとした。なのに。吉永君の手が、再びわたしの腕を掴んだ。

「マネージャーは本城に任せさせておけばいいんじゃない? あいつなうつまくやつてくれるよ。それにあいちゃんだって、もつ中二だろ? 迷子になるような年じやない。好きにさせてやれば。今おま

えの顔を見たら、また反抗するや」

「で、でも」

「おまえ、具合が悪いんだろ？ そんなに心配なら、俺が捜してこようつか？」

「いいよ。そんなの悪いし。そつだ！ もしかしたら、母さんの仕事場に行つたのかもしれない。商店街のはずれのインテリアショッピなんだ」

前にも留守番中にケンカをして、愛花が母さんの所に駆け込んだことがあった。

学校を休んだわたしが外を走り回るのも、おかしい話だ。ここには吉永君の血つとおり、様子を見たほうがいいのかもしれない。

「あとで、母さんに電話してみる。愛花だつて無茶はしないよ。きっと

わたしは自分自身に言ひ聞かせるよつにして、じくじくと頷いた。その時、自然と腕に視線が行つて、まだ吉永君の手が添えられたままであることに気付く。

そのまま吉永君に視線を移す。すると彼もそのことに気が付いたのだろう。あわてて手を離し、少し頬を赤らめながら、参つたなあと頭を搔いている。

久しぶりに見る、彼の照れた顔。なんだかかわいい。昔を思い出す。

「明日模試だろ？ おまえ、学校行けるのか？」

わたしと関係ない方向を見ながら、吉永君が突然そんな話を振つてくる。

「う、うん。行くよ」

「身体は大丈夫？ 熱は？」

「……ない」

吉永君がわたしの方を見たかと思つと、だんだんいつものように意地悪な顔つきになつていく。

「する休み……か？」

「やだ。バレた？」

「もしかして……。昨日、俺が見たから？」

「わっ。完全にバレてる。でも、認めたくない。そんなの悔しいじゃない。」

「ち、ちがうもん。吉永君が何を見たのか、し、知らないけど……。ホントに身体の調子が悪かつたんだもん。でも、絵里とマミの顔を見たら、元気になつて、それで……」

「わかった。俺は、何も見なかつた。それでいいのか？」

「も、もちろん。わたしは、何も気にしてませんから。おでこくらいい見られたつて、平氣だもん」

わたしは廊下の壁にもたれながら、プライと顔を横にそむ向ける。

「それと……」

な、なんなの？ わたしのすぐ横に並ぶよつて壁にもたれたまま、首だけ曲げて顔を寄せてくる。吉永君……。近すぎるよ。恥ずかしいつてば。



9  
・今日だけは

「俺のこと、よしながくんって呼ぶのがおまえのマイブームなのか?  
? じゃあ俺も、いしみずさんって呼んだ方がいい?」

「そ、それは……。別に、どっちでも」

わたしの右頬の数センチ先まで近付いた吉永君の顔なんて、到底

•

石水さんか……。そう呼ばれたいような呼ばれたくないような、でも、学校でやひけいやそつて呼ばれるのはもつと恥ずかしい。

「じゃあ、ひしょひ。学校では石水って呼ぶ。帰ってきたら今まで  
どおりひしょひでどう。だからおまえも、家ではそのよしながく  
んつての、やめりや。どうかに別人のよしながとやらがいるみたい  
で落ち着かない」

ようやく吉永君の顔が離れていった。彼に気付かれないようにそつと深呼吸をする。

それにも……。なんて不思議な光景なんだろう。今日は朝から学校を休んで、絵里と麻美がお見舞いに来てくれて……。愛花の暴走に振り回されたあげく、今こいつやって、わたしの家の廊下で吉永君と話している。どう考へても夢の中の出来事のようだ。

これが現実に起こっていることだなんて信じられない。

さつき愛花が言つてたけど、吉永君がわたしのこと心配してくれてたつてことも、もちろん、本當だなんて思つてない。

わたしのことがなんかちつとも見てなかつたんだよ。ほんのちょっと  
りも。

吉永君つたら、いつのまにかこんなに大きくなつて、わたしの背  
もとつくて追い越して。わたしの知つてゐる吉永君じゃないみたいだ。  
でも、今日が終われば、またいつものようにお互ひの気持ちが交  
わることなるて一切なくて、それぞの高校生活を過ごしていくの  
だと思つて、今このひと時がとても大切に思えてくる。

「ずっと聞きたかったんだけど……」

「何? ゆし……いや、真澄ちゃん」

たつた今決めたばかりなのに、また吉永君つて言つてしまひやう  
になる。だつて、彼に直接呼びかけることはなくとも、心の中で、  
毎日吉永君つて言い続けてきたんだよ。

慣れるまで、少し時間がかかりそうだ。  
で、何を聞きたかったのかな? ちょっと氣になる。

「おまえさあ、俺のことずっと避けてただろ? エレベーターも乗  
らないし。俺、かなり嫌われてるつて思つてた。いや、まだそう思  
つてる。昔、いろいろいじめたりもしたし、やっぱ根に持つてゐるの  
かなつてな。その辺は、どうなんだ?」

「どうつて……」

「なんですかなるの? わたしが吉永君を避けてたつて? そんな  
のありえない。それを言ひなう、全く逆だよ。

「今もこいつやって俺というのが、実はうざいとか思つてない?」

「何言つてゐの? それは違う。わたしは真澄ちゃんのこと、そん  
な風に思つてないよ。真澄ちゃんこそ、わたしを避けてたじやない。  
わたしは、絶対真澄ちゃんに嫌われてるつて、ずっとそう思つてた。

エレベーターに乗らないのだって、その……。運動のためだよ。わたし運動部じゃないしさ、身体がなまつねやつでしょ？」

またか吉永君の住んでる三階を自分の足で踏みしめたいからだなんて、本人の前で言えるわけないしね。

「それ、ホントなのか？」

吉永君。何もそこまで目を見開かなくとも。つてことせ、わたしたち、お互に勘違にしてたってこと？

「なーんだ。そうだったのか。俺はてつきつ……。まあいいや。じやあ、仲直りつてことで」

吉永君が手を出してきた。もしかして握手？ 吉永君つて、こんなキャラだったっけ？ もうとこひ、やんけやな感じで、口下手で……。

三年半という間口が、こんなにも人を成長させるのだらつか？

わたしはためらうがちに手を出し、そつと彼の手を握った。一秒くらい握り合つて、手を離す。

なんか心がほつこりしてきた。そうか。思い過ごしだったんだ。わたしのこと無視してたわけじゃなかつたんだ。

頬の緊張が取れて、顔がにんまりしてしまう。照れ隠しにえへへと笑つて、向かい合つてる吉永君を見上げた。

あれ？ どうしたの？ 今、仲直り……したよね？ またいつもみたいに怖い顔になつてる。

「俺、そろそろ帰る。そつだ。ゆつの携帯」

携帯？ こいつたいびつあるつもじ？ わたしはジャージのポケットから白い携帯を取り出す。  
そして……。

固まつた。

今、ゆうひて言つたよね？ あれれ？ ゆうひをさじやなくて、ゆうなんだ……。吉永君が初めてわたしのこと、ゆうひて呼び捨てにした。

「ちよつと。いや、かなり嬉しいかも。

「どうした？ 僕、変なこと言つた？」

しまつた！ あんまりびっくりしたものだから、吉永君の顔、じつと見つめやつたよ。

「い、い、いや、別に。なんでも……ないよ。携帯、だよね？」

なんか、わざわざお前のことを聞き返すのも恥ずかしくて、そのまま知らないうつをして携帯を差し出した。

「……もう俺達、ちゃんと付けで呼ぶような年でもないだろ？ なんならおまえも俺のこと呼び捨てでいいけど？」

えつ……。わたしの心中、見透かされてる。やだ。恥ずかしすぎるよ。吉永君って、確信犯だよね。このわたしのが吉永君のこと、ますみなんて呼べるわけがないのも知ってる田だ。

「あ、いや、その……。わたしは眞澄ちゃんでいいよ。えつと、も

しかして、赤外線？』

なんなの？』の甘つたるい空氣は、わたし一人が舞い上がりつてる。完全に。

わたしは早くこの話題から遠ざかりたくて、携帯に意識を集中する。

「ああ。おまえのメールアド知らないしな。あいりやんを見つけたら連絡する。おまえもあいつと連絡取れたら、俺に知らせて」

「うん。わかった」

そうだった。わたしたち、お互いの携帯アドレスを知らないんだ。と云うが、クラスの女子は多分全員吉永君のアドレスを知らないはずだ。

男子にも滅多に教えないって、これは結構有名な話だつたりする。一つの携帯をつき合わせて操作をした後、ちゃんと表示されるか確認して、じゃあと書いて家を出て行つた。

わたしはまだ雲の上を歩いていたようなふわふわした感覚を引きずつっていた。

昨日のピンクのバンダナの騒ぎではない。

ついでつき、吉永君の手を握つたのだ。たとえそれが握手という挨拶の一種であつたとしても、大きくて温かい吉永君の手が、わたしの手を握り返してくれたのは夢でも幻でもない。

麻美、ごめんね。あれは仲直りの握手だからね。わたしは麻美の恋を応援するつて決めたんだから、今日を限りに吉永君のことは忘れるよう努力する。

あきらめの人は無理かもしけないにナビ、 麻美を悲しませむよつた  
態度だけは絶対に取らないって誓つ。

だから……。

今日だけは、 吉永君のことを想ひ気持ちを許して欲しい。 彼のア  
ドレスも愛花のことが落ち着いたり、 消去する。

わたしは心の中で麻美に謝ると、 愛花の居所を確かめるため、 仕  
事中の母さんに電話をかけた。

朝から一度も田を合わせずにブイと横を向いたまま家を出た愛花を、じつそりリビングの陰から見送ったわたしは、忘れ物がないか何度もカバンの中を確かめて、いつものように母さんに行って来ますと声をかけた。

今日は学校に行くつて決めた。麻美の誤解を解くためにも。

昨日愛花は、やっぱり母さんの仕事場に駆け込んでいた。負けず嫌いな愛花はわたしにぶたれたことは一言も言わずに、ただ悔しそうに泣き続けていたらしい。

でも、すぐに姉妹げんかだと察した母さんは、夜寝る前にじつそりわたしの部屋に入つてきて、けんかの理由を尋ねた。

だからといつて、いくら母さんでも、吉永君のことが原因で愛花をぶつただなんと言えるわけもなく。

どうでもいいことで言い合いになつて、つい手が出てしまつたと話したら、明日から一週間、夕食の支度を手伝つよつて罰を言い渡された。

ここで反抗して、今田あつたことを全部話すことになつたらもつと大変だ。わたしはしおらしく、わかつたと返事をして、なんとか許してもらつたのだ。

ちよつと不本意だつたけど、しかたないよね。

ぶつたのは本当だし、愛花も悪気があつたわけじゃないんだし。

わたしは、昨日のことをいろいろ思い出しながら、とぼとぼとマジックの階段を下りて行つた。そして三階の踊り場に着いた時、左手の廊下を見るのを……やめた。

今日は麻美に昨日のことを謝る予定だ。タベ絵里から電話があり、麻美に事情を説明する段取りもすでに決めている。

愛花の早合点でショックを受けた麻美にせめてもの償いだと思つて、吉永君の家を見ないようにしたのだ。なのに……。

それは、わたしが三階から一階に下りかけた時に起つた。

「ゆう」

遠くで誰かがそう呼んだような気がした。まさかそんなはずはないと思つてそのまま下りようとしたが、またもや聞こえるのだ。「ゆう」つて。

階段のまん中で立ち止まつたわたしは、ゆっくりと後ろを振り返つた。そこにいたのは。

吉永君……だった。

「ピッタリだな。俺の予測どおりのタイミングでおまえが下りてきた」

意味不明なことを言いながらも、やたら機嫌のいい吉永君。いつたいどうしたの？ わたしが不思議そうに彼を見ていると、彼もまた同じようにわたしを覗き見る。

「何でそんなに驚いてるんだよ。別に待ち伏せしてたわけじゃないから。わかるんだよ。おまえの下りて来るタイミングが」

いや。別に待ち伏せしてたとか、そんな風に思つたわけじゃない。だから。そうじゃなくて、そんな真つ直ぐな目をしてわたし

を見ないでよ。

せっかく今日から吉永君のことが、これ以上好きにならないように努力しようって決めたのに。

……だめだ。

絶対、昨日より好きになつてる。

「よかつたな」

「……」

よかつた？ いつたい何がよかつたんだろう。吉永君の言つてことは謎めいている。わたしが母さんにあまりきつく叱られずに済んだこと？ でもそのことはまだ彼には言つてない。

「おまえ、鈍くない？ だから、あいちゃんが見つかってよかつたなって言つてるんだろ？」

「あつ。やつか。そうだよね。なーんだ、そのことか」

昨日愛花が見つかつたと吉永君にメールで知らせたら、「そうか」ってたつた一言返事が返つてきたんだつた。

吉永君との初めてのメールはその一言だけ。そりやあそつだ。付き合つてるわけでもなんでもないんだもの。用件さえ伝え合えれば、それ以上は必要ない。

本当ならこのたつた一言のメールも宝物にしておきたいんだけど、今夜で消去するつもりだ。もちろん、アドレスも一緒に。

「おまえさ。やつぱ、昔と全然変わってないな

「えへぐ。みんなにもよく言われる」

幽さんにも父さんにも。愛花にまで言われてる。進歩がないって。

つこに吉永君にまで言われてしまった。これって、さすがにヤバイよね。

「なあ、ゆう……」

「な、何？ 真澄ちゃん」

ゆうひて呼ばれるたびに心が震えて、なんか、涙が出そうになる。

「俺、空白を埋めたいんだけど……」

また……。そんな難しいこと。

わかんないよ。何なの？ 空白ひて。

吉永君が横に並んで一緒に階段を下りてるひてだけでも、緊張のあまり心臓が口から飛び出しそうなのに、なんか、わけのわからないうことを言われて、拳句、頭の中が真っ白になつて……。あらうひとか、階段から足を踏み外し、身体が大きく揺らいだ。

「おい。しつかりしろよ」

「ごめん……ありがと」

突然差し伸べられた手にしがみつくと、その反動で吉永君に抱きかかえられるような格好になる。慌てて体勢を立て直し、瞬時に彼から離れた。

心臓が早鐘を打ち、息をするのも苦しくなる。何やつてるんだろ、わたし。

「おまえ、相当ふりつこっているだ。本当に具合が悪かつたのか？ 無理するなよ。昨日はする休みだなんて言つてごめん。そつだ。力バン、こつこつせ。持つてやる」

昨日麻美からもらつた沖縄土産の「一ツ屋」のマスク Gottをぶら下げたカバンを、ひょいと持ち上げて、瞬く間にわたしの手から奪つていいく。

瞬間、何が起つたのか、全くわからなかつた。  
何も持つていらない自分の手を見てようやく状況を理解したわたしは、片手に二つのカバンを重ねて持つた吉永君に先導されて、そのまま一緒にバスに乗り込んだ。

## 11・わたしのカバン

バスはいつの間にか学生で満員になつていて。そして同じ学年の顔見知りの何人かがこつちを見ている。

先にバスに乗り込んだ吉永君が窓際で、わたしは通路側。もちろん一人掛けのシートに並んで座っているわけで。

初め、隣に座るのを少しためらつたのだけど、わたしのカバンを持つている彼と離れるわけにもいかないしね。

わたしは、座つてもいい？ と了解を取るようすに吉永君の顔を見て、なるべく身体がくつつかないよう、端っこにそつと腰を下ろした。

だからと書いて、何を話すでもなく、お互ひ黙り込んだまま前を見て座つていたんだけど。それまでは誰の視線もわたし達に注がれてなかつた。たまたま偶然、吉永君と並んで座つたくらいにしか見えなかつたのかな？

わたしが吉永君の膝の上にあるカバンに手を伸ばして定期入れを取り出そうとした時だつた。

カバンの外側のファスナーを半分くらいまで開けると、急に吉永君の手が伸びてきて中に手を入れてわたしの定期入れを探り当てる。そしてわたしにそれを手渡してくれたのだ。

「あ、ありがと」

わたしはそれだけ言うのが精一杯で、受け取つた定期入れをしつかり握り締めて再び黙り込む。すると、すぐ横に立つていた男子生徒が腰をかがめ、聞き覚えのある声でわたしたちにささやいた。

「おまえら、いつから……」

「いつからって……。えつ？ それって、アレだよね。いつから付  
き合つてるんだって意味だよね。どうしよう。勇人君が誤解して  
るよ。

「勇人。おまえの予想がはずれて悪いが、こいつ、病み上がり。フ  
ラフラして階段ずつこけそうになつて。放つておけないだろ？」

間にわたしが座つていることなどおかまいなしに、吉永君と勇人  
君が顔を寄せてこそそ話している。

「ふーん。そういうわけか。いやな、俺はてっきり……  
「んなわけないだろ。こいつはただの……」

そこまではつきり否定しなくとも。あの、わたし。ここにいるん  
ですけど。途中で運転手さんのアナウンスが入つて、吉永君の言葉  
が聞き取れなかつたけど、ただの同級生つて言つたのかな？  
真実だけど、そこまできつぱり言い切られるとちょっと寂しい気  
がする。

この吉永君に勝るとも劣らないイケメン君、絵里が言つところの  
イケメン度ベストスリーの一人でもある成崎勇人君も同じマンショ  
ンに住む同級生だ。確か、麻美と同じクラスだつたはず。

わたしの住んでいる地域は、高校受験がわりと穏やかなところな  
んだ。成績がクラスで中程度以上だと、好きな高校を選択できる。  
総合選抜制度つてやつ。

わたしはもうすでにバレバレだけど、公立受験組ギリギリライン

の悲惨な成績で、奇跡的に吉永君と同じ高校に滑り込めたクチ。特に希望がなければ、家から近い高校に振り分けられるので、中学でトップの成績だった勇人君もわたしと同じ高校……なんて不思議な現象が起こる。

同じマンションの同級生の八割くらいが一緒に高校に通つてゐる。隣の市みたいに、単独選抜のシステムだつたら、わたしは絶対に吉永君と勇人君の行く高校に通えなかつたはずだ。

でも残念なことに愛花の学年の受験から、単独選抜に変わるんだよね。

なのでわたしは、最後のラッキーガールってわけ。

バスがアイドリングストップして、車内が一瞬静かになつた。高校前に着いたのだ。乗つてゐる客のほとんどが我先にと降りていく。わたしが先に立たないと吉永君がシートから出られない。その前にカバンを受け取らなくちゃともたついていると、吉永君が早く行けといつ。でも、カバンが……。

「教室までもつて行つてやるから、さつさと行け。このグズ！」

そう言つて、カバンで少し乱暴に背中を押される。ついに吉永君の本性が姿を現したのだ。でもまあ、つい数日前まで、一言もしゃべらなかつたんだもの。

それに比べたら、これくらい平氣。照れ隠しにわざとそんな態度をとつてゐるのかもしれないしね。

わたしは口元を緩ませながら、定期を機械に通し、取り出し口から引き抜く。そして、バス停に降り立つた。

「優花！ おはよー」

反対車線にある向かいのバス停から手を振りながら絵里と麻美が駆けてくる。

「あー、絵里、マミー、おはよ。昨日は……」めんね

わたしは自分のおかげでいるとんでもなく非常的な状況など、どこかに忘れ去ってしまい、すっかり絵里と麻美に気を取られてしまっている。

「ううん。ちっとも。ほら、マミ。あんたも謝らなきや。何も言わずに勝手に優花の家を飛び出したりしたんだもの。優花もマミのことが、すっごく心配してたんだよ」

絵里に諭された麻美がゆっくり顔を上げて、やがてやがてしない様子を残しながらも微笑みながりごめんねと言った。

よかつた。麻美が笑ってる。絵里から話を聞いたのだろう。少しは誤解が解けたみたいだ。

「今日はわたしのおじりで、放課後いつものバーガーショップに行こうよー。マミの部活が終わるの、待ってるからね」

わたしはまかしといてとばかりに、パンと胸を叩く。もちろん、満面の笑みを振りまくことも忘れずに。

なのに……。麻美？ 絵里？ 急に黙り込んでどうしたの？ 何か……あつた？

「おい、石水……。行くぞ

わたしの後ろから聞こえるその声は……。

そう。吉永君だ。完全に彼の存在を忘れていた。

わたしが振り返った時、彼が肩に抱げようとして持っているカバンから、ゴーヤのマスクットがゆらゆらと大きく左右に揺れた。

## 12・何も言わなくていい

「ねえ絵里。マミ、来るかな……」

「どうだろ。五分五分ってところかな？　だつて今日一田、廊下で会つても田も合わさないんだよ。体育の時だつて、あの調子だもの」あと三十分ある。

わたしと絵里は、授業が終わるとすぐに学校を飛び出して、いつものバー「ガーリッシュ」に来ていた。麻美との約束の時間は五時半。せつかく麻美が昨日のことを許してくれたと思ったのも束の間、わたしが吉永君と一緒に登校して来たのがバレた瞬間、振り出しに戻つてしまつた。

今日の体育の授業は、バスケ。麻美のチームと対戦した時、必要以上に麻美に体当たりされたような気がするのだ。絵里もそれに気が付いていた。

「にしても優花。あんた、タイミング悪すぎ。なんでも、昨日の今日で、あんなに堂々と吉永と登校してくんの？」

「だから……。さつきも言つたでしょ？　吉永君が、勝手にわたしのカバンを持つちゃつたからって」

「それがわかんないのよね……。いくらなんでもそれじゃあ、あいつ。泥棒と一緒にじゃん。ひつたくりつてことだよ。違う？」

「あつ……。そ、そつだよね。わたしの言い方だと、そつとられても仕方ないよね。

「うー、ごめん。言い方が悪かったみたい。その……。わたしがマンションの階段から落つこちそうになつて……。それで吉永君が、ま

だわたしの体調が悪いと思つて、カバンを持つてくれたの。わたし  
が持つて言つても無視されて」

「なるほど。……優花？」

「は、はいっ！」

「これでも説明不足なのかな？ 怖いよ。絵里のその不気味な笑い  
顔。

「優花が階段から落つこちそくなつた時、吉永がまるでスーパー  
マンのようになどこから飛んでき、カバンを持ちましようつて言  
つたんだよね？ それつておかしくない？ あたしは騙されないわ  
よ。少なくとも、優花が落つこちる前に吉永と一緒にいたつてこと  
でしょ？ ねえ、優花。もしかしてあんたさあ……。ママに気兼ね  
して、とっても大切なこと、内緒にしてない？」

「大切なこと？ な、ないよ。そんなもの」

わたしは大慌てで否定する。多分絵里は、わたしが吉永君が好き  
だつてことに気付き始めたんだ。今それがバレたら、絵里はわたし  
と麻美の間に入つて、辛い思いをすることになる。そんなの、ダメ  
に決まつてる。絵里にこれ以上迷惑はかけられないよ。

「マリが来る前に、すべて洗いざらい、ぶちまけてもらひますから  
ね。おつと、黙秘権行使ですか？」

絵里はわたしが口をつぐんだのを見逃さない。絵里、お願い。こ  
れ以上、何も聞かないで。

「では仕方ありませんね。じゃあ、あたしの口から言つから  
「ダメだつてば。ねえ、絵里。何も言わないで。ね？ お願  
「やつぱり、怪しい……。優花、付き合つてゐるでしょ？」

「えつ？」

今、なんて？

「んーんもうつ！ 何度も言わせないでよ。あなたさあ、実は吉永と付き合つてんでしょ？ つて言つたの。違つとは言わせない！」

わたしが？ 吉永君と？

ありえない。なんですぐに話がそななるのだう。朝の勇人君といい、絵里といい。あきれ物も言えない。

「絵里。話が飛躍しそぎだよ。それ、絶対に違つから。だつて今日の朝、吉永君が言つたんだ。わたしのことはただの同級生だつて。だから付き合つとか、ありえないって……。ショックだつたけどね」「ふーん……つて。ちよつと、待つた！ それつて、いつたいどういうこと？ 優花が告つたの？ 吉永に？」

「違つてば。告つたりなんかしないつて。だつて吉永君は、わたしのことなんて、何とも思つてないもの。想いが叶つことなんて、この先、一生ないよ……」

あれ？ わたし、絵里に何言つてるんだろ。

「優花？ あんた……」

「え、絵里……。わたし、違うんだ。あの……。だから……」

絵里は何も言わずに、ただわたしをじつと見つめている。そしてわたしの手を握ってくれた。

「優花。もう、何も言わなくていいよ。そうだよね。普段の優花を

見てればすぐにわかることなのに……。あたしつたら、優花の言つことをそのまま鵜呑みにして。なんてバカなんだろ。優花、もう今日はいいからさ。早く帰つた方がいいよ」

「絵里……。わたしは、別に、吉永君のこと……」

「もういいつて。優花の気持ちはわかつたから。後のこととはあたしにまかせて。マミにはつまること言つておくからさ」

とつとう絵里にバレてしまつた。ああ、どうしてあんなこと、言つてしまつたのかな。

絵里はちつともバカなんかじゃない。わたしが最後まで隠し通せなかつたのがすべての間違いのもとなのに。

「たとえ一人が同じ人を好きになつたとしても、あたしこいつは、優花もマミもこれまでと変わらず大事な親友なんだし。あつといい方法が見つかるつて。……つてことば、もしかしたら……」

「もしかしたら? 何? まだ何があるの?」

「吉永も優花のこと……」

「吉永君が、あたしのこと?」

「そう。えへへへ……。まあいいか。そのうちわかるよね……」

「絵里?」

絵里が何か言いかけて、途中でやめる。氣になるよ。でも、その後に続く言葉が何かつてことくらい、わたしにもなんとなくわかる。吉永君もわたしを好きつて言いたいんだよね。

絵里、ありがと。それが本当なら、どれだけ嬉しいか。でもね、残念ながら違うんだ。吉永君が、わたしのことなんて何とも思つてないのは、今日の朝の様子でよくわかつた。

本当に好きな女の子の前で、あんなに平静を装えるはずないもの。

勇人君にもほつきつと言つてたしね。

「さあ優花、早く帰つて。夕食のお手伝いがあるんでしょう？ また今夜電話するから」

「絵里、ありがと。それと今まで、ごめんね。嘘つくつもりはなかつたんだけど、吉永君のこと、なかなか言い出せなくて……」

「いいつて。じゃあね、バイバイ！ 気をつけてね！」

絵里が元気良く手を振る。わたしも胸のあたりで小さく振り返した。そしてジュースの紙コップを出口近くの棚の下のダストボックスに捨てて、トレーを重ねた時だつた。

「ゆづか……。帰る気？」

わたしの目の前には無表情な麻美が、見たことも無いような冷たい目をして立ちはだかっていた。

### 13・お願い。信じて。

「マリ……。部活、早く終わつたんだ……」「行つてない……。部活なんか、行けるわけない……。あたしは優花のこと、ずっと親友だと思ってたのに。なんで? どうして嘘なんかついたの?」

麻美がわたしの方に一步詰め寄るたびに、自動ドアが開閉を繰り返す。

「ちよ、ちよっと、あんたたち。そんなとこで何やつてるのよ。店に入つてくるお客様さんの邪魔だよ」

絵里が血相を変えて、わたしと麻美のところひざで來た。

「とにかく……。 irgendで言つ合にしてでもらちが明かない。外に出よ」

絵里が麻美の腕を掴んで、店を出る。 『うなることを予感していだ絵里が、せつかくわたしを先に帰らせようとしてくれてたのに、とうとうその心遣いさえ台無しにしてしまった。

仕方なく、わたしも一人の後をついて行く。

ここは、大きな複合型ショッピングセンター内だ。各所に休憩コーナーがある。自動販売機がある一角のベンチにカバンを置き、わたしは麻美と向き合つた。

「マリ。わたしは、その……。嘘つくつもりなんてなくて。たまたま、朝、マンションで吉永君と一緒になつただけなんだ」

- 1 -

「ねえ、マリ。お願い。信じて。マリを困らねやうとか、こいつ

「マリ。ねえ、なんとか言って。わたし、わたし……。どうしたら

「わかつてもひんのんがわたくし!!!」

麻美は黙つたまま、わたしをじっと見ていた。時折、瞳が揺れるのがわかる。怒つているような、それでいてどこか寂しそうな目。わたしがわざとやつたことじゃないにしても、こんなにも彼女を傷つけてしまったのは、紛れもない事実だ。どうしたらしいの？

「優花……」

麻美がようやく、その重い口を開いた。

「あたしね、昨日あいちゃんが言つてたことは、何の根拠もない口からでまかせだつて、自分にもそう言い聞かせたの。絵里も彼と優花は何でもないつて代弁してくれたし。あたしの早合点だつた、優花に謝ろうつて、そう思つてた。なのに……。彼にカバンまで持たせて、いつたい何様のつもりなの？　あたしに一人の仲のいいところ、見せつけるつもりだつたとしか言いようがないよね。それで親友だつて言えるの？　信じられない……」

「友だちで言えるの? 信じられない……」「そんなん。見せつけるだなんて……」

「マリ!!」  
優花がそんな子じやないって、マリも知つてゐるでしょ?

信じてあげてよ」

わたしが言葉に詰まつたのを咄嗟に察知した絵里が、助け舟を出してくれる。

「優花が病みあがりだから、吉永がカバンを持つてあげただけだつて。そんな親切な吉永だからこそ、マミも彼のこと、好きになつたんでしょう？」

「でも……」

「マミの気持ちもわかるよ。好きな相手が、違う女の子の世話を焼いてるの見るのは相当辛いと思つ。ただ、優花がわざとやつたんじゃないことだけ、信じてあげてよ。でないと、優花が、優花だつて……」

「え、絵里っ！ 言っちゃダメ！ わたしが吉永君を好きつてことだけは、絶対に麻美に言わないで。

「え、絵里。ありがと。わたしは平氣だから。だつて、麻美が怒つて当然なことをしたんだもの。配慮が足りなかつたよね。いくら同級生で、家が近所だからつて、吉永君に今朝みたいに甘えるのはよくないよね。わたしがはつきりとした態度を取つていれば、マミを嫌な気分にさせることもなかつた。これから気をつけろ。だから、お願ひ。もづ、機嫌を直して。これからもずっと親友だつて、そう言つて」

「ゆづか……。そ、そりやあ、あたしだつて、優花がそこまで言つなら……信じる。だつて、もし吉永が、体調の悪い子を見て見ぬフリするような冷たい人間だつたら、それこそヤバイよね。……じゃあ、最後に一つだけ確認するけど」

少しだけ頬に赤みが戻ってきた麻美が、念を押すようにわたしに言った。

「本当に、いいんだよね。あたしが、吉永を好きになつても。あたし、彼に気持ちを伝えるつもりなの。もちろん、すぐにうまくいくなんて思つてない。ずっと両思いになれないかもしね。それで

もいいの。思いを伝えないことには、何も始まらないし……ね。だつて、あたしには、もう時間がないんだもの……」

「時間？」

わたしも絵里も初めて聞く麻美のその言葉におもわず顔を見合わせた。

「どうこうこと？ なんで時間がないの？」

絵里が麻美の首根っこを掴まんばかりに詰め寄り、問いただす。

「あっ、それは……」

「なんなのよ。言になさいよ。あんただつて人のこと言えないわよ。隠し事するのなら、吉永のこと応援してやらないからー。」

「絵里！ ちょっと、落ち着いて」

わたしはムキになる絵里を、麻美から引き離した。

「絵里、優花、あたし……。来年、転校するかもしれないの。いや、転校させられそうなの」

「えつ……」

あまりの衝撃的な告白に、わたしは絶句する。

「今までは、パパの出た医大に現役合格が難しいかもって言われてて。今日の模試の結果と一学期の成績が思わしくなければ、来年から私学の医科歯科大特別進学コースのある高校に行けって。だからなんとしても今のうちに、彼に気持ちを伝えなきゃならないの

……」「マリ……

絵里も田を見開いて、呆然としている。

なんでそんなことになるの？ 麻美は今でも充分に成績がいいんだよ。しつかり学年で十番以内に入ってるしね。

それとも麻美のお父さんの出身大学が、恐ろしく偏差値の高い学校なんだろうか。医学部のことはよくわからないけど、きっとどんななく大変な道のりなんだろうなって、おぼろげにう思つ。

「マリ、わかった。わたし……。吉永君マリエのことで、お願いしてみる

麻美がはっとしたようにわたしを見る。

「な、何言つの？ 優花、あんた何言つてるかわかってるの？」

今度はわたしに絵里が噛み付いてくる。

……わかってるよ、絵里。わたしに出来ることはまだひとつ。自分が言つたことに後悔はない。

絵里の驚きの声が、その後、わたしの耳に何度も繰り返しこだました。

絵里、ありがと。わたしのこと心配してくれてるんだよね。  
…わかつてゐるよ。自分の言つたことくらい。

でもわたしの苦しみなんて、麻美とは比べものにならないくらい、  
日常茶飯なちつぽけなこと。だつて転校なんだよ？ 吉永君と同じ  
高校じゃなくなるんだよ？ 好きな人とも会えなくなるんだよ……。  
麻美のためなら、言える。吉永君に麻美の気持ちを伝えることく  
らい、簡単だ。

「優花……。いいの？ 本当に？」

麻美の目から涙が零れ落ちた。

「あたりまえじゃん！ 今夜家に帰つたら吉永君に言つよ。それと  
もママが自分で言つた方がいいのかな？」  
「ううん。せつとき告白するなんて言つたけど、彼を目の前にしたら、  
きっと恥ずかしくて何も言えないと思つ。だから、優花に言つても  
らえたら、助かる……」

麻美が涙を拭いながらわたしに言つた。

「優花、ちょっと……」

怪訝そうな顔をした絵里がわたしの肩を後ろから押すよつこして、  
麻美から少し離れたところへ尋ねる。

「優花、あんたの言つたこと、とても本氣だとは思えない……」

絵里がわたしの耳元でボソッとつぶやいた後、麻美にちょっと待つてねと言って、彼女を休憩コーナーに残したまま、無理やり手を引かれて、トイレに連れて行かれた。

「優花、いったいどうこいつもり？ 自分のことほっこいの？ 吉永だつていい気はしないよ、きっと……」

化粧室の鏡の前で絵里が顔をしかめる。

「もう決めたんだ。だつて麻美は転校するかもしれないんだよ。あま放つておけないでしょ？ わたしはね、もう脈がないってわかつてゐるから、いいの。麻美の想いが吉永君に伝わるようがんばつてみる」

「優花つたら……。わかつた。そこまで言うなら、好きにしたらいい。じつにしろ後は、吉永の気持ち次第つてことだから。もしもだよ、吉永がマジやなくて、優花が好きだつて言つたら、ちゃんとその気持ちに応えるんだよ。いい？ わかつた？ 遠慮はなしだよ。そんなニセモノの優しさの押し売りは、マジだつて嬉しいわけないし……」

「絵里……。わかつた。そうする。でもね、絶対にそんなことありえないから。1パーセントだつて可能性はないよ。そうと決まつたら、早く帰んなきや」

絵里つたら、わたしが落ち込まないよつて気を遣つてくれてるんだ。なんでもわかつてくれる親友がいると心強い。もつともつと麻美のためにがんばろうつて、素直にそう思える。

その後、すぐに麻美のところにもどり、それぞれの家の方向のバスに乗り込んで、ショッピングセンターを後にした。

帰つてくるの遅かつたわねと母さんことをざん厭味を言われながら、食後の洗い物を手伝つて、台所から解放されたのが八時頃。わたしは、自分の部屋のベッドに座つて、カバンから取り出した携帯を手にする。

吉永君に、あのことを告げるために。

あれこれ文面を考えた末に、結局送ったメールはとてもシンプルなものだった。

今から、一階エレベータ横の階段の踊り場に出て来れますか？ 話したいことがあります。ゆうか。

最後の名前は、「ゆう」で切ろうとして、やつぱり後から「か」を付け足した。だって吉永君に、これからもゆうって呼んでもらうのを期待してるみたいだもの。

もし麻美との話がうまくいったら、吉永君がわたしの「ゆう」って呼ばなくなるのも時間の問題だつてわかってるしね。

すると、すぐに着信を知らせるメロディーが鳴る。わたしは一呼吸おいて、そつと画面を開いた。

わかった。すぐ行く。

やつぱり短い。これが一回目の吉永君のメール。わたしはじつとその画面を見つめた後、昨日のと一緒に削除した。そして、登録していた彼のメールアドも……きれいにぱり消し去った。

わたしは母さんがお風呂に入っているのを確認して、そつと玄関

に向かつた。愛花は塾に行つてゐる。仕事の忙しい父さんは、いつも十時を過ぎないと帰つてこない。

わたしはこの願つてもないチャンスに、心の中でこいつそりと感謝した。

静かな階段をゆづくづく下りて行く。わたしの靴音だけがやけにはつきりと聞こえてくる。そして二階の踊り場でいつものように立ち止まり、吉永君の家の方角を見た。

今夜で見るのは最後にしようと思つた。明日からは、エレベーターを使おうとも。

吉永君とはちあわせしなこうとに、早めに家を出ればいい。そうだ、そうじよひ……。

わたしは、決意も新たに待ち合わせ場所に向かつて、残りの階段を一気に駆け下りた。

## 15 「」めんね、呼び出したつじ

「何?」

階段横の壁にもたれるようにして吉永君が立っていた。わたしを見つけるなり、不思議そうに尋ねる。

袖のところが黒く切り替えてあるスポーツメーカーの田口Tシャツにハーフパンツ姿の吉永君は、いつもより少しだけ、子どもっぽく見えた。

お風呂に入つたばかりなのかな? 髪も学校で見ると違つて、パサパサと無造作にいろんな方向を向いている。

「あつ。」「」めんね。急にこんなとこで呼び出したりして……。あの……。そうだ、今朝は、ありがと」「ん?」

きょとんとした顔でじつとこっちを見る。そうだよね。そんなこと書つためだけに呼び出したわけじゃない。吉永君もきつと困つてゐるよ。

「あつ、いや、今朝はいろいろお世話になつちやつて……。もうこれから、氣を遣わなくていいよ。わたしも子供もじゃないんだし、一人でも大丈夫だから……」

やだ。どうしよう。ちゃんと麻美の「と言わないといけないのに。関係ない」とばかりしゃべつてしまつ。吉永君もきっと変に思つてゐるよ。早く言わなきや。

「何か話があるんだじゃないのか? 用がないなら、俺、もつ帰るナ

べ。明日から部活の朝練始まるから、とひととと勉強して寝よつと寝ついた。

つてる

「ま、待つて……」

もたれていた身体を壁から離して、階段を上へがむつと歩く吉永君を引き止めた。

「あの、あのね……。マリのことがまだかばい  
「まみっ。」

上りかけた階段の途中で止まって、吉永君が振り返った。

「うん  
「誰?  
「それ……」

えつ? 誰つて……。もしかして知らない? でも陸上部のマネージャーだよ? あそこでもみんなからマリって呼ばれてるはず。同じ部活の吉永君が知らないはずない。

「四組の……。うそ、勇人君と同じクラスの大園さん……なんだけど」

「ああ、大園か。あいつがどうかしたのか?」

「うん。そ、その……。真澄ちゃんのことが……す、好きだつて。だから、真澄ちゃんも、マリのこと、どう思つてるのかなつて、そう思つて……」

吉永君がそれを聞いた瞬間、はつと息を呑んだのがわかった。そして開きかけた口をそのまま閉じてしまった。

こんなこと突然言われたら誰だつてびっくりするよね。でも、どっちなんだる。嫌だつたのかな? それとも……。

「ねえ、真澄ちゃん。気を悪くしないでね。わたし、でしゃばりす  
ぎたかも……」「…………

こんなことして、麻美の印象が悪くなつたらどうよ。わたし  
のせいだ。

「こんな話、迷惑だつたのかな？ ホントじめんね。忘れて……。  
今言つたこと、全部。ね？ 真澄ちゃん……」「…………

吉永君はじつとわたしを睨むように見つめた後、天を仰ぎ、大き  
くため息をつく。そして同じ段のところまで追いついたわたしを真  
つ直ぐに見て、おもむろに話し始めた。

「話つて、そのこと？ それで、俺はどうしたらいいんだ？ 大園  
と付き合えればいいのか？」

「真澄ちゃん……。無理にとは言わないよ。ただわたしは、マミの  
願いを叶えてあげたくて」

「友情の証か？」

「そんなんじゃないよ……。もし真澄ちゃんもマミのことが、少しでも  
興味持つてくれたらいいなって、わうわう……」「…………

吉永君が、ずっとわたしを見つめている。何かを探るような、強い眼  
光が……怖い。

わたしと吉永君の間に長い沈黙が横たわる。居たたまれない。こ  
れ以上彼を見ていられなくて、視線を逸らした。

「あ、あの……。乗り気じゃないなら別にいいんだ。マミだつて、片想いでもいいって、そう言つてたし」

「つむきながら、やつとのこと、それだけ言えた。

「おまえはどうなんだ?」

「へ? どうして?」

急に吉永君の声がわたしの頭上に降りかかる。なんでわたしなの? そんなこと聞いてどうなるの?

「大園のために、いい返事を持つて帰らなきやならないんだ?」「えつ? ベ、別に、そんなことない……と思つ。ダメならちゃんとやう伝える……。でも」「でも?」

「マミはいい子だし、それに、真澄ちゃんのことが、大好きで、それに、スタイル抜群でかわいいし……。それに、勉強だって、できる。わたしなんか比べ物にならないくらい、すべて揃つて、それに、それに……」

「ああ、ダメ。なんだか泣いてしまつやう。我慢しなきや。わたしのせいで、麻美が吉永君に嫌われることにでもなつたら一大事だ。ここはなんとしても踏ん張らなきや。

「それに、真澄ちゃんのこと……。誰よりも大切にすると思つ」

「言えた。声が震えてしまつたけど、わたしの言つたことは伝わつたよね? 吉永君、それでも、ダメかな……。」

「わかった。付き合つよ」

え。

付き合つただ……。

「後で、大園のアドレス、俺の携帯に転送しどこで。ゆう。聞いてるのか？」

「あつ、う、うん……」

「じゃあ。おやすみ、ゆう」

吉永君が階段の上まで上りかけた時、わたしの心臓が凍りついた。吉永君のアドレス……さつき……消した。

「真澄ちゃん、『めん！ 転送……できないつ！』

わたしは吉永君の背中にに向かつて大きな声で叫んだ。

「なんで？」

「真澄ちゃんのアドレス、わたし、その……。消しちやつて」

「はあ？ 消した？ なんで？」

「それは……」

吉永君。あなたの「」とを忘れるためだよ、なんて、言えるわけなくて。

「わかったよ。もうおまえには頼まない。勇人にでも聞くよ。おまえとせつかく仲直りできて元の鞘に收まつたと思ってたの、俺だけ

だつたつてわけだな。そんなに大園のことが大事なら、おまえの言うとおりにしてやる。俺は、俺は……」

「真澄ちゃん……。ごめんなさい。わたし、そんなつもりじゃなくて

「言い訳はもういい。おまえにとつて俺は、所詮それくらいの取るに足らない存在なんだよ。もう、俺の前をうろつくな。俺も一度とおまえには話しかけない。いいな！」

吉永君が、階段を駆け上がりしていく。そして瞬く間にわたしの視界から、彼の後ろ姿が消えていった。

わたしは吉永君がいなくなつた後も、しばらくそこにたたずんでいた。足が前に進まないのだ。今夜もまだ熱帯夜だと天気予報で言つてたのに、ロビーから吹き抜けてくる風が冷たく感じ、ぶるつと身体を震わせた。

Tシャツのそでから覗く腕をさすりながら、ゆっくりと階段を上り始めた。二階に着いてそのまま三階に向かおうとしたけど、ふと思いつつ、エレベーターのボタンを押していた。

わたしはその日から、もう階段を使うのを……やめた。

次の日学校に着くや否や、待ち伏せしていた絵里に校門のところで捕まえられる。

「ゆ、優花！ まさかと思つたけど、そのまさかなんだよね？」

教室に行かず、そのまま図書室裏手のベンチに無理やり座らされ、尋問が始まつた。

「優花、本当に実行したんだ。吉永も吉永だよ。マジでオッケーするなんて……。信じらんない」

「タベ遅くにマミから電話もらつて、ありがとつひて……。す、ぐく喜んでた。これでいいの。うん……」

「優花。あんたよくそんなに平然としていられるね？ このままでいいの？ 優花の気持ちはどうなるの？」

「正直、辛い……。でもね、これでよかつたんだ。吉永君、ちつと

も嫌がつてなかつたし。わたしが彼のアドレスを消しちゃつたことは怒つてたけど、きつぱり言つたんだもの。マミと付き合つて。どうせわたしのことなんて、彼の眼中にはなかつたつてことだよね

絵里が口をへの字にしてあきれたようにため息をつく。吉永君もわたしもどつちもどつちだつて不服そつに文句を並べるけど、もつ元にはもどれない。わたしはすでに彼から、絶交状も叩き付けられているのだから。

その日、吉永君とはもちろん一言も口をきかなかつたし、目を合わすこともなかつた。でも、一学期と同じ状態にもどつたまでのこと。この数日の出来事は夢だつたと思えばいい。

なんとか気持ちを切り替えて明るく振舞つてみた。絵里にこれ以上心配をかけるわけにいかないしね。

授業が終わると、部活にちょっとだけ顔を出し、今週の予定だけ確認して部室を出た。

すると、誰かがけたたましく追つてくる。

「おい、待てよ！ なんでそんなに急いでるんだよ。俺も帰るから、ストーリップ！」

わたしを呼び止めて、カバンを取りに教室にもどつたのは、学校イチの秀才ともてはやされている勇人君はやとだった。

「お待たせ」

廊下を教室二つ分くらい進んだところで、カバンを持った勇人君がわたしに追いついた。メガネをかけているけれど決してがり勉には見えないその爽やかな顔つきは、絵里がイケメンランク一位だというだけあって、惚れ惚れするほどかつこいいともはや認めざるを

得ない。

「どうしたの？ 勇人君。部活は？」

いつも部活熱心な勇人君がこんな時間に帰るなんて珍しい。

「それを言つなら、おまえも部活はどうしたんだよ」「わたしは……。今日は早く帰ろうと思つて」

わたしの所属しているボランティア部は、サークルみたいなもので、活動そのものは週に一回しかない。土曜か日曜に介護施設を訪問したり、夏休みや冬休みに保育園や児童館に行って、本の読み聞かせや、遊び相手になつたりするのが主な活動内容だ。

同じくそこに籍を置いている勇人君は、わたしと違つて毎日のよう

うに部室に足を運び、運営の中心的役割を担つている。  
その責任感を買われて、次期生徒会執行部への立候補をも打診さ

れているらしく。

「今日ははつて……。二学期になつて、全然来てないくせによく言つ  
よ。まあいいけどな。ちょっとゆづりやんに尋ねたいことがあって  
「なに？」

「真澄のこと……」

わたしはその名前を聞いたとたん、さつと血が引いていくのがわ  
かつた。なんで勇人君が吉永君のことを聞くのだろう?  
タベのことと、何か関係があるのであらうか。

下校途中の他の生徒もたくさんいたので、お互に口をつぐんだままバスに乗り、わたし達の住んでるマンションの裏手にある公園に向かつた。

「吉永君が……どうかしたの？」

錆び付いたブランコに腰を下ろし、ゆっくり揺らしながら隣の勇人君に尋ねる。

「タベ、あいつが家に来てさ。俺のクラス……大園のアドレス教えてくれって言うんだ。一学期に俺が委員長で大園が副委員長だから、もちろんアドレスは知っていたよ。で、その理由を聞いて、マジかよって、あいつを聞いただしたら、ゆうちゃんのためだって言うんだ。なあ、いつたいどういうことなんだ？ 俺にわかるように説明してくれよ。おまえ、大園と……確か、親友だよな？」

「そうだけど。でも、わたしのためって、そんなこと……。確かに、マミに代わって彼女の気持ちを吉永君に伝えたのだけど。でもね、吉永君もマミのこと、悪く思っていないみたいだつたし。付き合いつて言つてくれたから、よかつたなあって、そう思つてた」

勇人君があまりにもすがるような目をして訴えかけるので、わたしもありのまま答える。

「そりか……。大園は、やつぱり真澄が好きなのか……。陸上部のマネージャーだもんな。そんな気はしてたけど……。なあ、ゆうちゃん。新学期早々に進路希望調査出しただろ？ 俺、なんて書いたと思う？」

「わかんないよ、そんなこと。でも勇人君は昔、研究者になりたいつて言つてたよね？」

「ああ。そんなことも言つてたな。でも、もうはつきりと決めたんだ。医者になるつてな。大園が行くつて決めてる大学の医学部を俺も書いて出した

「は、勇人君……」

「俺な、大園麻美が好きなんだよ」

## 16・好きな人（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

このたび優花を応援してくださる温かいメッセージを頂きましたとても嬉しかったです。

アドレスが記載されていませんでしたので、こちらでお返事させていただきますね。Aさん、ありがとうございます！これからもよろしくお願いします。

皆様の評価・感想、お待ちしてま～す。

メッセージは、右下にあります作者紹介ページというところをクリックしていただきますとメッセージを送るというリンクがあります。何か気がついたこととかありましたら是非お声を聞かせてくださいね。

勇人君が麻美を好きだなんて……。このことは麻美もきっと知らないのだ。わたしだって、今、初めて聞いた。

「勇人君。吉永君はそのこと知ってるの？」

「知らない……と思う。あいつとはあまりそういう話はしないんだ。向こうは陸上のことしか頭に無いし、俺も自分の部活のことしか話さない。男同士なんて、大概そんなもんさ。女子は好きな男の話とかいつもやってそうだもんな」

「そうだね。そういう話をしてる子は多いかも……。でも、わたしはあまりしないよ」

そうだ。わたしは吉永君への想いを、誰にも話していない。もちろん絵里に知られるまでは……だけだね。

「ふうん。そりゃ、でも俺、ゆうちゃんは真澄のことが好きだとばかり思ってたよ。真澄だっておまえが好きで、両思いなんだとずつとそう思つてたんだぜ」

「は、勇人君！ そんなわけ、な、ないじゃん！」

何てこと言つの？ セツカく静まつた心臓がまた暴れ出したじゃない。言つとくけど、わたしと吉永君は仲が良かつたためしがないのに、どうしてそんな風に思われるんだる。誰にもこの想いがバレないよ。ひた隠してきたつもりだったのに。

「そりゃ、真澄のことは何とも思つてないから大園の想いを伝えてやつたんだもんな。でも真澄は絶対におまえが好きだと思

う。これ、俺の勘。結構当たるんだけどな

「残念だけど今日は当たらなかつたみたいだね、勇人君。もしそれが本当なら、タベみたいにひどいこと、言われたりしないよ。

「昨日おまえらさ、バスで仲良く並んで座つてただろ？ やつとくつついたか……ってほつとしたのによ。真澄の奴、夜には違う女と付き合つて言い出すし……」

「そのことだけど……。勇人君から見れば、わたしつて、相当ひどい人間だよね……」

「まあな。でも、おまえは何も知らなかつたんだし、仕方ないよ」

「知らなかつたとはい、勇人君にとつてわたしは面白くない存在に決まつてる。好きな女の子を彼の親友の彼女になるようにしむけたのは、紛れもなくこのわたしだというのに。なのに責めるでもなく……。

「本当にごめんね、勇人君」

「部活でも自分のことは二の次で、みんなのために地味な裏方を一手に引き受けているのも知つていて。そんな彼に常に甘えている自分が恥ずかしくなる。謝つて済まされることではない。

「もたもたしてた俺も悪かつたんだし。振られたらどうしようつて弱気になつてて、告白できなかつたんだ。それに、大園が俺を見てないつてのも薄々気付いてたしな。ああ。俺。人生初の挫折だよ」

「そうだよね。今は文化部だけど、中学時代はサッカーもやつてて、運動神経も抜群な勇人君は、よくもててた。当時、付き合つていた子もいたはずだ。挫折なんて言葉とは無縁の人生。

なのに、麻美に告白できないくらい弱気になつてただなんて、到底信じられない。わたしが勇人君だつたら、その持つてるものを最大限に生かして、もつと自信に満ち溢れた人生を送るだろうな。そしてわたしが女版勇人君だつたら絶対に吉永君に告白してるとと思う。吉永君だつて、そんな生き生きした明るい性格のわたしだつたら、本当に好きになつてくれてたかもしれない。

「でもさ、勇人君は偉いよ」

肩を落としてしょぼくれている勇人君に向かつて言つた。

「なんで？ こんな煮え切らない男なのに？」

「だつて、頭も良くて見た目もかっこよくて、みんなから一目おかれてる立場なのに、それをちつとも鼻にかけなくて……。それに自分に嘘ついてないし」

「えらい褒め言葉だな。ゆうちゃん。あまり関心のない男に向かつてそんなこと言つもんじやないよ。俺は昔からおまえのこと良く知つてるからそれなりに受け止められるけど、そうじやなければ自分に気があるのかなつて誤解されるだ」

「ええつ？ そうなの？ でも、ホントのことなのになあ……。わたくしつていろんな面で案外誤解されやすいんだよね。勇人君、ありがと。これから気をつける」

男女のことなんてよくわからぬことばかりだ。思つたことを軽々しく口にしてはいけないつてことだよね。なんかいろいろと勉強になるなあ。

「で、ゆうちゃんは自分に嘘ついてるのか？」

「へ？ なんでそうなる？ でも……。確かに、わたしが吉永君を

好きなことは勇人君には内緒のままだ。勇人君が吉永君の親友であれば尚更知られたくない。それに、まだこんなにも吉永君のことが好きなのに、気にならないふりをして強がっている自分がいるのも事実だ。

「いや、そういうわけじゃ……」

「ホントに？ なんか無理してない？ やつぱ、真澄のこと、気になるんだろう？」

ダメだ。やっぱりバレてる。だからって、はいそうですなんて、言えるわけないしね。ここは否定し続けるしか残された道はない。

「違つて。ホントに違つんだってば！」

わたしの嘘なんてとっくに見抜いているだろうけど。

「わかったよ。もういいって。それにしても意味不明だよな。おまえも真澄も……」

勇人君はブランコから降りると、ショルダー・タイプのスポーツバッソクを背中側に回して腕を組みあきれたように首を横に振る。

勇人君だって失恋したばかりで辛いはずなのに、わたしのことを気遣つてくれてばかりだ。彼が男女問わず人気者の理由が少しわかつたような気がした。

「さあ、日も暮れてきたし、俺達もそろそろ帰らうか

「うん」

砂場で遊んでいる小さい子が、黄色いバケツにスコップやカッピを入れて片づけ始める。すでに西の空には夕焼けが広がっていた。

「おひるちゃん。いろいろありがとな。でも俺、まだあきらめないぞ。いつかはきっと彼女を振り向かせて見せる。だからおまえもがんばれ！」

「ええっ？ だから、わたしはそんなんじゃないって……」

「くらがんばれって肩を叩かれても、もうどうでもなこと。わたしが少しふくれて口を尖らせてこと、勇人君がお腹を抱えて笑い出す。

そうだった。昔からこの人は笑い上戸だったんだ。吉永君にからかわれて、ふくれたわたしを見て笑いこけるのはいつも勇人君だった。

「あははは……。おひるちゃん、昔と変わらないな。おもしれえ」

## 17・夕焼け空（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

なんか優花と勇人がいい感じなのですが、どうなりますやら……。

嵐の前の静けさということで、許してやってくださいね。次回、またまた修羅場？ です。

勇人君<sup>はやと</sup>つたら、ホント、失礼しちやう。  
でも……。まだ笑い続ける勇人君の少し後ろを歩くわたしまで、  
なんだかおかしくなつてきた。

ブツて吹き出すと、いっきに笑いがこみ上げてきて、それを見て  
また勇人君が笑い、わたしも笑う。失恋した者同士、こうやつて笑  
つているのもどうかと思うけれど。おかしさが収まらないままマン  
ションのエントランス前で部屋番号<sup>番号</sup>を表示させ、家の中には母さ  
んにロックを解除してもらつた。

最上階に住む勇人君もわたしに便乗して横をすり抜けるようにし  
て中に入つていく。

「ああ、勇人君。ずるいっ！」  
「へへへ。ラツキー。こうやつて人が開けてくれたところを通り抜  
けるのがオートロックの醍醐味なんだよな」  
「なに、それ。小学生の頃とちつとも変わつてないじやん」  
「だろ？ お互い成長してなつてことで」  
「やだ。わたしまで一緒にしないでよ……あつ」

わたしが勇人君とじやれ合つようにエレベーターホールになだれ  
込むと、その先に見知つた一人の目がこちらに注がれているのがわ  
かつた。

「ま、真澄！ 大園……」

勇人君が突如視界に入つてきた目の前の二人に驚いたように立ち  
止まる。わたしだつてびっくりした。なんで、麻美がここにいるの？

「優花？ 優花じゃない。それに、成崎も！」

「マリ……」

吉永君の横でこぼれんばかりの笑顔を見せる麻美が、わたしと勇人君の名を呼んだ。

「優花、昨日は……ありがと。あたしさ、真澄君にくつ付いてこんなところまで来ちゃった」

真澄……君？ そう言って麻美がほんのりと頬を赤らめながら吉永君の腕にしがみついた。わたしの心臓が、止まるかと思つた。

「おい、大園。やめろよ……」

吉永君が怒つたような顔になり、突如、麻美の手を荒々しく振りほどく。

「真澄君……。『ごめんなさい』。あたし……」

麻美が行き場を失つた手をもう一方の手で支えながら、怯えるような目をして吉永君を見た。

「あつ、いや。別にそんなつもりじゃ……」

吉永君が幾分申し訳なさそうにそう言つと、突然勇人君が彼の前に立ちはだかつて、吉永君の腕を捻り上げた。

「おまえ、彼女に乱暴するなよー 付き合つてるんなら、もっと優しくしてやれ」

田を疑つよつうな光景にわたしも麻美もその場に立ち竦むことしか出来ない。

「勇人……。おまえ何言つてるんだ？ 僕、そんなに乱暴なことはしてないつもりだけ? その手、離せよ」

「あつ、ああ……」

勇人君は吉永君に言われて、初めて自分の取つた行動に気がついたのか、慌てて捻り上げていた手を離した。

「勇人。おまえこそ、やけに楽しそうじやないか」

捻られていた方の腕を回しながら今度は吉永君が皮肉っぽくそんなことを言つ。

「はあ？ 僕のどじが楽しそうに見える?」

「そいつと、よろしくやつてるんじやないのか？ おまえらわしき公園にいたら？ なあ、勇人」

そいつって、わたしのこと? 吉永君がほんの一瞬だけわたしを見てそいつ言つた。よろしくやつてるだなんて、そんな……。

「おまえ、何を見てそんなこと言つてるんだ? 僕とゆうちゃんがどうじうなるわけなんかないだろ? おまえこそ、そんなにゆうちゃんのことが気になるんなら、しつかり手元に繫ざとめておけよ」

「こいつ、言わせておけば……」

「何をつ……」

「やめて——つ——。一人とも——。なんでマリの前でそんなけんかなんかするの? マリが、マリが……かわいそつだよ」

わたしは今にも掴みかかるうとしている吉永君と、挑発的な態度ではむかう勇人君の間に入つて、なんとか一人の暴走を止めることに成功した。

マミが青白い顔をして、がたがた震えている。  
それに気付いた勇人君が先に吉永君のそばを離れて、マミの前に立つた。

「ごめん。大園。俺、なんてひどいこと言つたんだろ。今言つたことは忘れて……。俺が一人で勝手に思い込んでいただけだ。真澄とゆうちゃんは何も関係ないよ。その証拠に、真澄が選んだのは間違いない大園なんだから」

それだけ言つと、勇人君は力なくエレベーターに向かつて歩いて行つた。彼は、マミを傷つけないために、自分の言つたことを完全に否定したのだ。

「吉永君。マミのこと……頼むね。お願ひだから、マミに優しくしてあげて……」

わたしは残された勇気をふりしぼつてそれだけ言つと、勇人君を追いかけて同じエレベーターに乗り込んだ。

ドアの窓越しに、ホールにたたずむ吉永君と目が合つ。最後まで吉永君の視線が、わたしから逸れることはなかつた。

今日から中間テスト一週間前だ。部活動は一応基本的に活動休止になる。試合前の運動部はそんなことも言つてられないのか、マミも、……吉永君も普段と変わらずグラウンドに姿を見せている。

わたしはこの一ヶ月間、信じられないくらい熱心に部活に打ち込んだ。それは勇人君も同じだ。エレベーターホールでのあの出来事にはお互い全く触れないけれど、何も言わなくてもわかる。全てを忘れるためには、部活に没頭するしかないのだから。

わたしがボランティア部に入ったのにははつきりとした理由があった。それは、絵本の読み聞かせと朗読のボランティアがあつたから……だ。

わたしは将来、アナウンサーになりたいと思つてゐる。いわゆる女子アナつてやつだ。容姿端麗でない分、実力でその地位を獲得しなくてはいけないので、前途多難なのは言つまでもない。本当なら放送部に入つてバリバリ活動したかったのだけれど、残念なことにうちの高校には放送部なるものは存在しない。その代わりに放送委員会があるにはあるけれど……。

学期ごとにメンバーが変わるし、なりたくないのに無理やり推薦されたり、くじ引きで適当に決めるクラスもあつたりで、必ずしもやる気のある人ばかりではない。

そこで、ボランティア部に迷わず入部を決めた……というわけだ。

勇人君は、これまた変わった動機で、ボランティア部に在籍している。この部は、設立されたきっかけが生徒会の発案だったということもあって、部長、副部長とともに、生徒会の執行部の人々が兼任し

ている。

なので中学で生徒会長をしていた勇人君が、どうも入学と同時に、リーダーシップを買われて引き抜かれたみたいなんだ。

つまり、生徒会執行部予備軍としてボランティア部にいるということ。もともと彼はボランティアにも興味があつたらしくて、その手腕は誰もが認めるところだ。

テストが終わった後の施設訪問に間に合うように、訪問先の介護施設で使う紙芝居を手作りしたり、誕生日カードを作ったりと、昨日までは目が回るほどの忙しさだった。

がんばったかいがあつて、今日からテスト最終日の前日まで部活動お休みだ。あとは個人個人が家で自分の担当を練習しておくことになつていて。

わたしは家に帰る前に、朗読のための夏目漱石の本を取りに行こうと、部室に向かつた。

「よつ！ なんか用か？」

勇人君が何か書き物をしながら軽く左手を上げ、ちらつとわたしを見てそう言った。

「本を取りに来ただけだよ。勇人君は今日も部活？」

「いや、あと一行書いたら帰る。今度の介護施設の誕生会は企画もすべてまかされただろ？ その時の進行予定計画を立ててたんだ。えつと、こうして……。おお！ 出来た！ 後はこれを副部長に見てもらつたらパソコンに打ち込んで印刷して完成だ」

わたしは勇人君の肩越しに、紙に書かれた計画表を覗き込んだ。時系列にそつて、細かく内容が書き込まれている。勇人君ならではの見事な仕事ぶりだ。

そこにはわたしの名前もある。ちゅうじプログラムのまん中あたりで朗読が割り当てられていた。

「ゆうちゃん、一緒に帰ろうか？ 誰かと約束してんの？」

「つづん。マミは部活だし、絵里は先輩と図書館」「絵里つて、めちゃくちゃ美人な本城さんだよな？」

「ねつだよ」

絵里はお田端での先輩にテスト範囲のわからないところを教えてもらつんだつて。そつやつて少しずつ仲良くなつて、十一月までには気持ちを伝えるつもりだつて言つてた。

一緒に図書館に行こうつて、わたしも誘つてくれたけど、それはさすがにね……。いくらなんでも、のこのこついて行くなんてKYなまねは、出来ないよ。

美人な本城さんとして学年中にその名を轟かせているけど、これが絵里の初口マンスだから大切にしてあげたいんだ。

「じゃあ、寂しい者同士、そろそろ帰りますか」

メガネの奥の目を細めて、勇人君が立ち上がつた。  
別に一緒に帰るのは構わないんだけど……。周りの視線が痛いのが少々辛かつたりするんだよね。

部員は、わたしたちが付き合つてるわけでもなんでもない、ただの同級生だつて知つてるから何も言わないけれど、そうじゃない人に時々ギロリと睨まれる。

校門に、卒業した中学の後輩が待ち伏せしていたこともあつた。  
同じ高校の先輩からも誘わされて困つていても言つてた。

そんな勇人君の現状を考えれば、本当なら学校で並んで歩いたりしない方がいいんだけどね。

まあテスト前だし、もうあまり生徒たちも残つていなかつた。

ら大丈夫かなといついつい気を緩めてしました。

わたしはちょうどチャンスだとばかりにバス停までの道のりを使って、化学のわからないところを勇人君に尋ねようと思いついた。ロビーで靴を履き替える時、カバンから教科書を出して、勇人君にじり寄る。

「ねえねえ、勇人君。お願いがあるんだけど。ここのは、この化学式なんだけど……」

「何？ ああ、これ？ これはね……」

さすが勇人君だ。わたしのわからないところをすぐに察知して、噛み砕いて説明してくれる。なるほどね。やっぱり化学式はある程度暗記しなくちゃ始まらないんだ。

とつても基本的なことなんだけど、嫌な顔ひとつせずに丁寧に教えてくれる。

そりゃあ、学年トップだもん。特に化学と物理は先生より勇人君の方が詳しいって噂もある。部室で、入試レベルの問題を三年生の先輩に混じってすらすら解いているのを見た時は、腰を抜かすほどびっくりしたもんね。だから、ちょっとやそつとのことで、もう驚かない。

「教科書に出てるくらいは全部暗記した方がいいよ。それから問題集をやつて、応用問題を押さえておけば九十点は確実だから」

へえ、なんだ。でもね、多分応用問題までは手が回らないよ。取りあえず平均点を目指してがんばるね。こんなこと恥ずかしくてとても勇人君には言えないけど……。

次は日本史。全部覚えてたら寝る時間がなくなっちゃうので、ヤマをかけてもらおうと、カバンの中にある教科書を「こそそ」と探す。

すると勇人君がきょろきょろと辺りを見回して、ポケットからシリバーの携帯を取り出した。

一応学校内では携帯の使用は禁止ってなってるの、先生が近くにいないかどうか確認したんだと思う。

「ゆうちゃん。ごめん！」

携帯の画面を見た勇人君が突然謝る。急用かな？

「一緒に帰れなくなつた。副部長に呼び出されたよ……。俺、部室に戻るわ。また何かわからないところがあつたら夜にでも電話して来て。じゃあ」

そう言つて、勇人君は、瞬く間にわたしの視界から消え去る。バイバイって言う間も無いほど、あつという間にいなくなつた。

いつまでもじっとここに立つていても仕方ない。わたしは教科書をカバンにしまうと、ふつと息を吐き、バス停に向かって歩き始めた。

「いしみず……さん」

誰かが後ろからわたしの名前を呼んだ。誰だろ？ 振り返つて口ビーを見渡したけど誰もいない。

「石水優花。こつち。いっただけど。あははは。やだ。マジ、気付いてない」「ちょっとー、いっただってばー」

靴箱の陰からどこかで見たことのある二人組みの女子が現れて、わたしの顔を見ながらけたけた笑つていて。いつたい、何なの？



「あたしたちさあ、鳴崎と同じクラスのマイヒヤ。あんた、ウチのクラスのオ女マミと友達だよね?」

「そうだ……けど」

「あははは。やっぱそなんだ。で、そのマミが吉永と付き合つてるつて尊じやん? あんたが鳴崎に馴れ馴れしいのは、マミに対抗するためなんじょ? だつて所詮女の友情なんて見せ掛けのものなんだからさ。吉永の上を行く男なら後は鳴崎くらうしかこの学校にはいないし」

いつたいこの人たちは何が言いたいんだろ。わたしが勇人君と親しいのはそんなんじやない。なんで麻美に対抗しなきゃならないの?

「何とか言つたらどうなの? それともあたしの言つたことが図星すぎて、何も反論できないとか……」

「わたしは……。あなたたちが何を言つてるのかさっぱりわからなさい。いつたいどうことなの?」

「どういうこと、だつて。ねえ、サリ、聞いた? この子、とぼけてる。あのね、あんたが抜け駆けするから、こつちは迷惑してんの。サリはね、どういうわけかあのおぼっちゃん鳴崎が気に入っちゃってさ。あたしは正直、苦手なタイプなんだけどね。やだ、ホントのこと言つちやつた。サリ、ゴメン……」

背が高くてショートカットのマイヒヤという人が両手を合せて謝つた後、ペロッと舌を出す。

「マイヒタラヒトイよ。あとで覚えておきなさいよー。でも、この女の方がもつと性質たちが悪い。何が勉強教えてよ。鳴崎君が誰にでも

優しいからっていい気になるんじゃないわよー。」

「ミイを押しのけるようにして、マスカラをたっぷり付けたまつ毛を揺らしながらありえないほど大きな目をしたサリという人が迫つてくる。怖い。わたしがいつたい何をしたって言つの？」

「だ、か、ら……。石水さん、あたしたちの言いたいこと、わかるでしょ？」

今度はミイがわたしを威嚇するよつにして迫つてくる。

「わ、わからない」

「あんた、バカじやない？ わつきから何度も言つてるでしょ？」

鳴崎に近寄るなつて！ そんなこともわからないなんて、相当重症だわ。サリ、どうする？」

「ミイ、このはちゃんと言つてやんないとわからないクチよ。今まで、黙つて泳がせてたけど、もう我慢ならない。なにさ、そのやぼつたい顔。かわいいかどうか知らないけど、そんなんで彼に取り入られたんじや、こっちだって黙つちゃいられない。一度と鳴崎君にベタベタ話しかけないで。いいわね！」

サリがとがつたあごを突き出し、わたしを蔑むよつに言つて捨てる。

「わ、サリさん……。誤解だよ。わたし、その……。鳴崎君とはそんなんじやない。同じ部活だし中学も同じだったから他の男子よりは、ちょっとだけ、仲がいいだけ。取り入ろうだなんて、そんなこと考えたこともない。ホントなの。信じて」

鳴崎君、だつて……。我ながらよく言えたと思つ。勇人君なんて言つたら、ますますこの人たちを怒らせてしまうものね。

「サリ。この子がいつ話してるけど……」

「フン。そんなの信じられるわけないじゃん。ちょっとだけ仲がいいだけだって？ はあ？ よくもそんなことが言えたわね。あんたのその甘えたような態度が、鳴崎君の気を惹こうとしてるって、見え見えなんだってば」

「サリさん。じゃあどうすれば、わたしが鳴崎君をそんな風に思つてないって信じてもらえるの？ 鳴崎君とは帰る方向が同じだから、たまに一緒に帰つてるだけだし。他の部員の人も一緒だよ。それに、それに、鳴崎君は……」

「麻美が好きなんだよ……と言いかけて、慌てて口をつぐむ。これを言つてしまふと、ますます大変なことになりそうだ。じゃあ、どうすればわかつてもらえるの？」

「何よ、はつきり言ひなさいよ。ほら、見なさい。それ以上、言えなこじやない。やつぱりあんた、鳴崎君のことが好きなんでしょう？」

「違う。本当にそんなんじゃないって。わたしが好きなのは鳴崎君じゃなくて……」

「ねえ、サリ。あたしにいい考えがあるんだけど……」

わたしが最後まで言い終わらないうちに、ミイが話に割り込んできた。そして急に声を潜めて、サリの耳元で何か話している。

「ねえ、いいと思わない？ それなら、この子が鳴崎のこと好きじゃないって証明できるし、もし好きだったとしても、こっちで監視できるじゃん？」

「うへん。まあね。でも、ヒロがいって言つかな？ あいつの趣味とは違うような気がするけど……」

「大丈夫だって。この子だってちょっと化粧すりや、あたしたちよ

りずっと上物だしさ」

次第に一人の会話がはつきりと聞き取れるようになり……。わたしがとんでもないことに巻き込まれそうになつてているのは、もうすでに明らかだつた。

「これからちよつと寄るといひがあるんだけど……。石水さん、あんたも来てくれる？」

ミイがニヤリと笑いながら、わたしの腕を掴んだ。

「わたし。その……。テスト勉強しなくちゃならないし。母さんが働いてるから、夕食の準備もしないと……」

「テスト勉強？ まだ一週間も先だよ？ 誰も勉強なんかしてないつて。ちょっとだけだから、一緒に行こうよ。あんたに会わせたい人がいるんだ。鳴崎と何でもないんなら、別にいいじゃん。その人と会つても……」

ミイの手がわたりよりきつくわたしの腕を締め付ける。彼女の目には怪しい光が宿り、それは、もうここから逃げられないとわたしに悟らせるのに充分なほどだつた。

「わかった。そこに行くから……。だからお願ひ。この手、離して……」

わたしあはいとサリに両脇を囲まれるよひにして、バス停とは反対の繁華街の方向に向かいつと歩き始めた。



夕方の繁華街は学校帰りの高校生達が何をするでもなく、あちこちに仲間同士のかたまりを作つておしゃべりに夢中だ。制服はどこも似ているけれど、よく見れば学校によつて微妙にデザインが違うのがわかる。合服の人もいれば冬服の人もいる。

わたしの学校は今は移行期間中なのでどつちを着てもいい。でも冬服の方がかわいいので、ほとんどの人がすでにブレザーを着ている。中にはニットのグレーのベスト。胸元に覗くリボンがキュートだと評判だつたりする。

ミイとサリはこの界隈で顔が利くのか、すれ違いざまに次々と声を掛けられる。遊び人風の人もいれば、普通の高校生もいる。フリーатьсяっぽい人もいた。

この二人は一見遊び人風なんだけど、そんなにスレているようには思えない。サリは長いカールした髪の間から小さなピアスが見え隠れしているけど、ショートカットのミイには見当たらない。

ミイのスカートの丈はかなり短めで長い足がすらりと伸びているけど、サリはわたしと同じくらいの長さだ。カバンだつて、一人とも同じようなボストン型のもの。取り立てて言うほどの物でもない。ただ、一人の携帯のデコレーションが派手目だったのには度肝を抜いたけどね。スワロフスキーがところ狭しどぎつしり並んでいた。ちなみにわたしの携帯はハートのラインストーンが一つ貼つてあるだけ。だつて全面に貼つて剥がれ落ちたりしたら絶対に後悔しそうだもん。

大通りを曲がつて、路地に入ったところにコンビニがある。そこ の店の前で立ち止まり、ミイが例のキラキラした派手なデコ電を取 り出した。

「サリ、この子見張つて。あたしが中に入つてヒロを呼んで来る」

ミイがそう言つて、ローファーのかかとを踏んだまま、携帯を片手に店の中に入つて行つた。会つて欲しい人つていうのは、きっとそのヒロつて人だ。多分、男の子だと思う。さつきの一人の話してる様子で、なんとなくそうじやないかつてわかつた。

わたしに会わせてどうするのだろう。まさか、紹介……とか？でもわたしには自信がある。そんなことになつても、わたしなんか絶対に相手にされないつて。

ミイにサリ。悪いけど、あなたたち……。根本的に人の選び方、間違つてるよ。

「よお、サリ。今日は、はえーのな。何、さつきのメール」

ミイと連れ立つて知らない男の子が店から出てきた。どこの制服だろ。うちに似てないこともないけど、ネクタイの色が違う。もしかして、付属？ ここからそう遠くないところに、私大付属の男子高がある。その人かな？ わたしはこつそりその人の顔を覗き見た。

えつ？ うそ！ 吉永君に……そつくり。なんで？ あつ、でもよく見ると違う。あのラインとか、口元の形とか。声もこの人の方が少し高めだ。髪だつて吉永君よりずっと長い。

「メールのとおりだけど。ミイがせ、この子、あんたにどうかって言つから」

サリが面倒くさそうに答えながら、わたしを彼の前に突き出す。やつぱり思つたとおりだ。この人に紹介されてる。

すると、上から下まで舐められるようにその人に見られた。わたしは意味もなくブレザーの裾を引っ張つて、膝をくつ付ける。その人のじつとつとした目がどこか気持ち悪い。

「ふ～ん。誰？ この子」

「同じ高校の同級生。あんたの彼女にどう？ 今、フリーなんだつて」

「あ～、そう。別にいいけど。ねえ、カノジョ。名前は？」

吉永君に似てると思ったけど、やっぱり違う。しゃべり方がとてもなく……軽い。

「ちょっと、あんた。名前くらい言いなさいよ」

突然サリに背中を突っかれた。それも、おもいつきり強く。えつ？ そ、そうか、目の前のこの人が、わたしに質問してるんだよね。

「あ～、ごめんなさい。わたしは、石水……です」

「石水さん？ ふ～ん。俺、ヒロ。広川太郎って言うんだけどね。その付属の。太郎じゃシャレになんねえからヒロって呼んで。で、石水さん。ホントにカレシ募集中？」

「い、いえ。別に」

やだ……。またじつと見てる。おまけに薄ら笑いまで浮かべて。

「俺、メンドくせえの嫌だけど……。でもまあ、今までにないタイプだし。石水ちゃん、よろしくな」

その人が急に横に来て、わたしの肩を……抱いた。なんで？ そんなんの……困る。

わたしが身体をすぼめて固まっていると、耳元に生暖かい息が吹きかけられた。

「ひ、ひやあ……。や、やめてください！ 何するんですか？」

いたたまれなくなったわたしは、身体をよじよじに捻つて、なんとかその人から離れた。

「何、慌ててんの？ おもしれえな、石水ちゃん」

その人は肩を小刻みに揺らしてクッククと笑いをこぼす。

「ヒロ、悪ふざけはやめなよ。この子、まだそういうの、慣れてないみたいだし」

サリがわたしの腕を掴んで、自分の方に引き寄せた。あれ？ もしかしてわたしを庇つてくれたの？

「なんだよ。おまえがこいつを俺にへつつけよつとしたんじゃねえか。イミわかんねえ」

「一応、この子も今日からあたしたちの友達なんだし、少しは優しくしてやりなよね」

「わかったよ。つたへつるせえな。でもな、石水ちゃんつて、よく見ると結構かわえーし。おまえらみたいにケバくないのが新鮮つつか。俺のダチもきっとびっくりするぜ。で、これからどうする？ ゲーセン？ それともカラオケ？」

「あたし、のど渴いたし……」

黙つて成り行きを見ていたミイが「電をいじりながら言つた。

「ならカラオケで。いつものところじょうか。俺、他のやつも呼ぶわ」

ヒロ……いや、広川君も携帯を取り出し、メールを打ち始めた。これからこの人たちはカラオケに行くんだ。わたしはどうなるんだろ。もう帰してもらえるのかな？

その時サリがわたしをちらりと見た。そして決まり悪そうに視線を逸らし、つぶやいた。

「言つとくけど……あたし。あんたを許したつもりはないから。鳴崎君のこと……好きじゃないって証拠にヒロと付き合つてよ。あいつ、軽そうだけど、根はいいやつだから。あたしが保証する」「で、でも……。わたしは付き合つとか、そういうのは……」

「もつつーーなにうじうじしてるのよー。とにかくあんたと鳴崎君を遠ざけるためにはこうするしかないんだから。つべこべ言わずに言つとおりにして」

「わたし、ヒロさんのこと今日初めて知つたばかりだし……」

「なら、ここの後もつと知ればいいでしょ。さ、一緒に行くのよ、あんたもカラオケに」

「さ、サリさん！」

無理やり腕を組まれて、まるで連行されるかのように大通りを歩いて行く。今どき高校生風な三人と地味なわたしという妙な取り合わせの四人組は、誰の目にも異様に映るのだろう。何人もの人が不思議そうに振り返る。

わたしは下を向いたまま、なんとかサリの歩調に合せて、しぶしぶ歩みを進める。今、五時だ。行きたくないけれど、仕方ない。一

時間だけ我慢しようと腹をくくった。

そして、はつきりと広川君にこの交際を断ろうと決心した。勇人君を好きじゃないって証明は他の方法でも出来るはず。それを見つけて、サリにも納得してもらおう。

サリだつて、本当はいい子なのかもしれない。さつきも広川君の行動を諫めてわたしを庇つてくれたしね。

そう思つたとたん、急に心が軽くなり、幾分身体の緊張感が取れたような気がした。

さつき広川君に肩を抱き寄せられた時はどうなるかと思った。苦しくて息が止まりそうだったけど、もう大丈夫。勇気を出して顔を上げて、真っ直ぐに前を見た。

「ゆうか？ 優花だよね？ 優花！」

誰かがわたしの名前を呼びながらこちらに向かって来る……。 麻美だ。 麻美の横には、もう一人、よく知つた人がいる。今、この場を一番見られたくない……人。

吉永君は、目を見開いて驚いたようにわたしを見た後、すぐにその目を向こう側に逸らした。

「あつ、マリちゃん。ふーん……。やつぱりマリと吉永の噂は本当だつたんだ」

ミイがわたしの前に立つて、今出くわしたばかりの一人を好奇心旺盛な目でじろじろ見る。

「ミイ……。どうして優花が一緒なの？　あなたたち、仲よかつたつけ？」

麻美がチラツと横に立つ吉永君を確認するように見た後、またこちへ向いた。

「まあね。今日はこれから石永さんとヒロの記念パーティーなんだ」「記念パーティー？　何、それ。優花、どうこうこと？」

麻美がミイを横に押しのけるようにして歩み出て、わたしに直接訊いてくる。

「そ、それは……」

「つまり、俺と……えっと、なんだっけ。そそう、ゆうかちゃんの、記念すべき初デートのパーティーってこと。あんた、ゆうかちゃんの友達？　なら全然オツケー。一緒にカラオケ行かねー？　なんならそこのカレシも一緒に」

広川君が話に割り込んできた挙句、まるで一人に見せ付けるようにわたしを横から抱き寄せようとす。

「は、離して！ 広川君、やめて、お願ひだから……」

わたしは彼から離れようと必死にもがいたのだけど、今度はびくともしなくて……。動けば動くほど、背中から回された広川君の手がわたしの右腕の方を、がつしつと捉えて離さないのだ。

吉永君が……見てる。とても冷ややかな目で、じつといつを観てる。

ああ、お願ひ。麻美も吉永君も、早くここから消えて。わたしの前からいなくなつて。もうこれ以上、こんなみじめなところ、見られたくない。広川君は、違うの。彼氏でも何でもないの。だから、だから……。

「なんでそんなにいやがるんだよ。なあ、別にこれくらい、いいじやねえか。俺とゆうかちゃんの仲だろ？」

広川君の顔が、わたしの目の前数センチのところまで迫つてくる。

「や、やめてー！」とわたしが叫んだのとほぼ同時だった。

「俺、もう行くよ。大園、それじゃあ……」と吉永君が言ったのは。麻美に向かつてそれだけ言い残し、吉永君がその場から走り去つてしまつたのだ。麻美も彼の後ろ姿を見ながら呆然と立ちすくんでいる。

よひよひ広川君から逃れ、身体が自由になつたわたしは、麻美に歩み寄り小さい声で伝える。

「お願ひ。」ことは絵里には言わないで……。それに、あの広川君は、わたしとは何の関係もないの。ふざけてるだけ。ね、信じて

「わかるてる。あの人人が優花の好きになるタイプじゃないってことくらい、見ればわかるよ。でもどうして優花がサリたうどこのの？」

「それは……」

「なら、あたしと一緒に帰る。その方がいいんでしょう？ ね、優花？」

わたしの歯切れの悪さを不審に思ったのか、麻美がこの場からわたしを救い出そうと走るみつて帰ろうと叫びてくれる。でも……。

「ダメなの。」のあとひょっとだけ一緒に遊ぼうって、約束したから……。それよつマリマリの？ 吉永君、行ひやつたよ？  
「う、うん……」  
「デート中だつたのでしょ？」  
「あ、まあね……」

今度は麻美が元気がない。デート中なのになぜ？ 麻美を置き去りにして行つてしまつた吉永君の態度も不可解だ。

麻美にしてみれば、ここでわたしに時間を取られたことを吉永君に申し訳ないと思つてこるんだよね。『めんね、麻美……』。

「早く吉永君のところに行つた方がいいよ。マリ、ありがと。わたしは心配いらないから」

「優花……」

「あんたたち、向ひもひまつてゐるのよ。マリ。あんたも一緒に来るので、どうするのよ？」

サリが言葉を投げつかるマリ。

「あ、あたしは……」

「あつそつ。なら、また明日ね。バイバイ……。石水さん、マミは帰るつて言つてるんだから。もたもたしないで早く行こ！」

サリはまるで麻美を追い払うようにそつけなく手を振り、再びわたしの腕を引き寄せた。出来る限り明るい笑顔を作つて麻美を見る。と、口をきゅつと堅く結んだまま、バイバイと手を振つてくれる。麻美の顔は今にも泣き出しそうに……見えた。

五分くらい歩き、雑居ビルの下で立ち止まつた。ここは五、六階にあるカラオケルームがお目当ての場所らしい。

エレベーター前に私服姿の知らない男の人が立つていた。ミイとヒロが形相を崩しながらその人に近付いていく。

「えへへ……。タカシ。昨日は「ゴメン」……」

ミイがタカシという背の高い大人っぽい人に謝りながら、突然しな垂れかかる。それを当然のように受け止めた彼が、ミイの頭を腕で抱え込むようにして、彼女の額のあたりに……き、キスをした。わたしは目の前で繰り広げられる生々しい二人の姿に、目のやり場を失つた。

「ヒロ、せつかく誘つてもらつたけど……。わりいな。俺ら、これから別行動つてことで」

「いいけどよ。おもしろくねえな、全く……」

広川君が少しだけくされたようにして足元のプラスティック片を蹴る。

時折、上目遣いでタカシを見上げるミイも、サリに向かつてゴメンねとしおりしく頭を下げる。ついさっきまでのミイとは別人みたいだ。

「サリ、あんたもこの後、用があつたんじゃないの？ 駅まで一緒に行こ」

ミイがタカシの腰に手を回し寄り添うようにしながらサリに田配せする。ど、どういふこと？ 一人ともいなくなつたら、わたしは、広川君と一人つきりだよ？

なんとか一人のどちらかをひき止めようと横にいたサリの腕にしがみつくる。

「そんなんあ……。わたしを一人にしないで。お願ひだから帰るなんて言わないで。それならわたしも……帰る」

「おいおい、ゆうかちやん……。そりやあないつしょ？ 僕を一人にする気？ ジャあ、カラオケやめて、どつか違つと」

広川君がにじり寄り、わたしの背後に張り付いた。

「石水さん。そんなこと言わずにさ。ヒロだつてもうその気なんだし。ね？ ためしに付き合つてみてよ。二人だけの方がお互いのこど、もつとよく知れるしさ。さて、あたしもそろそろ帰ろつかな。連日の夜遊びで、さすがに親がキレちゃつてさ。今夜くらい機嫌どつとかないと、試験中、遊べないしね。じゃあミイ。あたしもそこまで一緒にいく」

三人の姿が瞬く間に人ごみに呑まれて見えなくなる。エレベーターの前に、わたしと広川君が残された。

「つたくタカシの野郎、昨日はあれほどミイのこと、ボロクソに言つておきながらよ。ミイの顔を見たとたんアレだぜ。やつてらんねーな。さあ、邪魔者はいなくなつたことだし、俺達は一人で楽し

くやるとしますか。なあ、ゆうかちゅん？」

「わたし、広川君とは付き合えません。あの……。好きな人がいるんです」

わたしはそう言しながら、肩に回りかけた広川君の手をやんわりと払いのける。

「へ？ 今「いろいろなんだよ。おまえ、ちょっとおかしい感じやねーの？ でもそいつとは付き合つてるわけじゃねえんだろ？ それとも、フリーってのも実は嘘だつたり？」

「い、いえ。嘘じゃないです。本当に誰とも付き合つてません」

「なら、いいんじゃん。実らない恋なんか、ひとつと見切りをつけ

て俺と楽しもうよ。な、ゆうかちゅん？」

周りには通勤帰りの人の波が途絶えることなく続く。やつわたしには広川君の声は聞こえていなかつた。

今ならこの人ごみに紛れて、広川君から離れられるかもしない。彼が油断した隙にここから逃げればいいんだ。

わたしは雑居ビルのすぐ前にある横断歩道の信号が青になつた瞬間、その場から走り出した。

後ろを見てはいけない。そのまま前だけを見て、バスター・ミナルを田指すんだ。そして……。ドラッグストアの前で試供品を配つているお姉さんに進路を妨げられた瞬間、誰かにぐいっと手を引かれた。

「ゆう……」

「どこかなつかしいその声に導かれるよつて、わたしはゆくべつと後ろを振り向いた。



## 23・何をした

「「」……。心配せいやがつて  
「真澄ちやん……」

わたしの「」とをゆうと呼ぶのは吉永君だけ。それはわかっているのだけれど、まさか本当に吉永君がここにいるなんて到底信じられない。

吉永君もきっと走つてわたしを追いかけて来たにちがいないので、少しも息が上がつていない。いつものように平然とした面持ちでそこに立つている。

そして、たつた今氣付いたのか、あつと言つて、<sup>つか</sup>掴まえていたわたしの手をゆつくりと離した。

わたしも、とたんに恥ずかしさが込み上げてきて、顔を上げることは愚か、声すら出せないまま立ちすくむ。どれくらいそうしていつのだらう。あるいはほんの数秒だったのかもしれない。それはわたしには永遠の時に思えるほどだった。

周りの喧騒もすべて消え去り、そこは吉永君とわたしの二人だけの世界のようだ。聞こえるのは自分の胸の鼓動だけ。トクトクと規則正しく、でもいつもより早く打つている。

わたしは胸を押さえながらゆつくりと顔を上げた。

その時、吉永君の左腕の後ろあたりに重なるようにしてわたしの目に映つたのは、身体を前かがみにしながら肩で息をしている……

広川君、だった。

「やつと、追いついた。ゆうかちゃん、それはないだろ？ 結構、逃げ足、速いし……ハア、ハア。あれ？ あんた……。さつき、マ

「いつて人と一緒にいた人じゃん。んん?」

広川君が息を切らせながら、途切れ途切れにしゃべる。そしてすでに後ろを振り返っていた吉永君が、広川君ににじり寄つた。

「おまえ、ゆうに句をした……」

こつにも増して吉永君の低くて鋭い声が容赦なく広川君に突き刺さる。

「お、おい。あんた、何マジになつてんの?」

広川君が吉永君の気迫に押されるような形で、じりじりと後退していぐ。

「ゆうに句をしたか言つてみる……」

大声で怒鳴つているわけでもないのに、吉永君の声は、周りの空気でも凍らせるように冷ややかに振動する。

「お、俺はただ、ゆ、ゆうかちゃんをさりたちに紹介してもらつて。そんで、今日、初めて会つて……。それだけなのによ。なんであんたにケンカ売られなきゃなんねえんだよ? つたくメンドくせえな……」

……

広川君が吉永君から田を逸らし、開き直つたかのように捨て台詞を吐く。

「用がないなら、一度とここの前に現れるな。今度、ゆうの嫌がるよつなことをやつてみる。無傷で家に帰れると思つなよ……」

「わ、わかつたよ。お、俺は、そういういた血の氣の多い奴らとは違うんだ。ケンカはしねえんだよ。ただ、彼女募集中だつただけなんだ。ゆうかちゃん、めちゃかわえーし、放つておけねーだろ? はつ、ははは……」

広川君が顔を引き攣らせながらも、必死になつてへらへらと笑つているけれど、吉永君の目は全く笑つてなんかいない。

大通りで吉永君にバッタリと出会つた時、わたしが広川君に絡まれて怯えていたのをちゃんと見てたんだ。

突然真顔になつた広川君と田が合つた。

「ゆうかちゃん、今日は、わ、悪かつたな。あんまり気にするなよな。でも俺、あんたに本気になりかけてたかも。遊び半分じゃねえよ。それと……。ゆうかちゃんがさつき言つてた話。誰のことかわかつたよ」

広川君がそう言つて、吉永君をチラリと見た。さつき言つてた話つて……。もしかして、好きな人がいるつて言つたことかな? わたしの好きな相手が吉永君だつてわかつたの?

ど、どうしよう。サリにバレちゃうよ。そしてサリから麻美に伝わつたら……おしまいだ。

わたしは出来るだけそ知らぬ顔をして、広川君の話を無視しようとして試みる。

「まあ、ゆうかちゃんの名前にかけて、公言はしねーよ。なるほどな……。ちょっと、話はややこしそうだ。けどそうだとしたり、どう考へても俺には勝ち田はねえし。これから先、もつ余つこともないだらうけど、もしこの辺で見かけたら、声くらひはかけてよ」

「広川君……」

「俺、行くわ。じゃあな」

わたしが会つた瞬間、吉永君に似てると思った笑顔を最後に浮かべて、広川君がそこから立ち去つて行つた。

遠巻きに見ていた他校の高校生も、期待した場面にならなかつたからなのか、少し落胆したようにして各所に散つていく。

広川君が去つていいくのをじつと見廻けるようにして眺めている吉永君の背中に向かつて「ありがと、真澄ちゃん」って言つてみた。

吉永君の肩が一瞬ピクッと動いたような気がしたけど、わたしがそう言つた後もしばらくの間、黙つて向こう側を向いたままだつた。

「帰るのか？」

急にじつを向いた吉永君が唐突にそんなことを言つ。こつも吉永君の行動は予測不可能だ。

「あ、う、うん。もう帰るよ。真澄ちゃん、あの……。マニア?」

バスター＝ナルに向かつて歩きながら、今一番気がかりなことを尋ねてみる。デート中だつたはずなのに、麻美はいつたいどうしたのだろう。

「ああ……。もう帰つたんじゃないのか?」

さあ……つて。あれから合流できなかつたのかな? なんだか責任感じるんだけれど。

「 ゆうが何を考えてるのか知らないが、俺は塾に行ってたんだけどな……。大園が部活が終わったら本屋に行くと言つから、塾まで一緒に歩いていただけだ。そしたらあそこでおまえに会つた。初め、おまえも同意でいいつらと付き合つてるのかと思つたりもしたけどな。どうみてもおまえの目、俺に訴えてたろ? 」

「 そんなん。訴えてただなんて……。途中から田舎を合わせないよつてしていたはずだけど。確かにあの時は怖かつた。広川君に抱きつかれて、身体中が震えていたはずだ。わたしは観念して、吉永君に向かつて小さく「コクリ」と頷いた。

「 あの後、もう勉強どころじゃなかつたんだぞ。塾長に腹の調子が悪いつて嘘ついて、抜け出してきた。なんでかわからないけど、ゆうのことが気になつて、心配で心配で。おまえとは距離をおこうと決めたはずなのにな……。そして、おまえらが行きそうなカラオケ屋をピックアップして、あの雑居ビルのそばに行つたら、ちょうどおまえが走り出したところだつた。あの男、マヌケな顔しやがつて、オロオロしてたぞ。俺は、おまえと並行に反対側の歩道を走つた。まさかこの足が、こんなところで役に立つとは思わなかつたよ。ゆうも昔から速かつたけど、今は俺の方が完全に勝つてるからな。先読みしてドラッグストアの交差点を渡つて、ちょうどどいいタイミングで捕まえることができたんだ」

「 そうだつたんだ。『めんね、吉永君。わたしなんかのために、塾の勉強まで投げ出してしまつて。おまえちゃんに叱られないかな?』

「 真澄ちゃん。本当に助かつた。今日はありがとう。もし、今夜の塾のする休みがバレておばけやんに叱られたら、わたしのせいだつて言つてね」

わたしはいたつて真面目に、真剣に、そして誠心誠意、心の底から感謝の気持ちを込めてそう言ったのに。

吉永君が笑い出した。それも、お腹を抱えて大笑いをしている。な、なんで？

「クックク……あはははっ！ おまえなあ……小学生のおけいことはワケが違つんだぞ。誰が塾を休んだくらいで叱られるんだ？」

そつか。吉永君は常日頃から真面目だから、誰も疑つたりしないんだ。心配して損した。笑いすぎだよ、吉永君。

わたしは気を取り直して、吉永君と肩を並べて再び歩き始めた。

「それよりおまえ。その考えのない浅はかな行動、なんとかしなよな。あのままあいつといれば、どうなつたかくらい、おまえにもわかるだろ？」

「うん。自分だけは大丈夫つて、そう思つてた……」

「ゆう、おまえ……。頼むから、本当に好きな相手以外に簡単に気を許したりするな。いいな？」

「わ、わかってるつて。これから気をつける」

もちろん、そつするつもりだ。吉永君を越えるよつな、素敵な人が現れる日まで。その日まで、自分のことは大事にするつもりなんだから。

「勇人はどうしたんだ。おまえら一緒に帰つてたんじやなかつたのか？」

えつ？ なんでそのこと知つてるの？ 吉永君の声が瞬時に不機嫌になり、薄暗くなつた街路樹の下で立ち止まつた。



## 23・何をした（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

昨日の小説家になろう内のアクセスが、恋愛部門でランギング1位になりました。

初めてのことでの、まだ、ドキドキしています。

お越しいただいたみなさまのおかげです。ネット小説ランギングへの投票も併せて、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

「勇人君は、途中で先輩に呼び出されて……。ねえ、真澄ちゃん。どうしてわたしが勇人君と一緒にたつて知ってるの？」

ふうーつて疲れきったような大きなため息をつき、吉永君はしぶしぶ説明を始めた。

「トラックを何周かランニングした後、足にテーピングをしようと思つて、ロビー前のベンチに戻つたら……。おまえらが、見えた」「そ、そうだつたんだ。あのね、わたしが部室に本を取りに行つたら、たまたま勇人君がいて、一緒に帰ろうつてなつて、それで……」

わたしがしゃべつている途中で吉永君がさつさと前を歩き出す。

「なんか言い訳みたいに聞こえるけど。別におまえが誰と一緒に帰ろうが俺の知つたことじゃない。ただ……」

「ただ？」

歩みを止めた吉永君が、わたしに背中を向けたまま何か言いかけた。そして夕焼けの残り空を見上げながら話を続ける。

「秋の日暮れは早い。中間テストが終わつて、部活で遅くなる日は……。あいつと帰れ。あいつがダメなら必ず仲のいい誰かと一緒に帰れ。いいな」

「真澄ちゃん……」

「今日みたいなことは、もう一度どぎめんだからな。どうせ一人で帰るところを、さつきいたあの女たちに呼び止められたんだろ？ ゆう、そうなんだろ？」

「う、うん」

「こいつたい何を言わされてあこいつらのこいついて行ったのか……。俺は部外者だから詳しぐは訊かないが。それって、おまえらしぐないよな。……なあ、うひ

首だけこいつらに向けて彼が言った。わたしは、はこでもうつんでもなく、曖昧に「うなずく」としか出来ない。

「俺……」

なんだか吉永君の様子がこいつもと違つ。わたしは慌てて彼の横に並び、顔を覗きこんだ。

「何？ 真澄ちやん。どうしたの？」

「あのな。あつ……。別にいいよ。何でもない」「やだ。なんで言こかけてやめるの？ 教えてよ。何？ 何があつたの？」

「そんなんに知りたいのか？ 変なやつだな、まつたく。おまえこほん関係ないことなんだけな……」

わたしは、口クソンと唾を飲み込んで、その時を待つた。

「実は、俺のじいちゃんが……」

「おじいさん？ 真澄ちやんのおじいさんって、長野の？ ぶぶつを作つてゐるおじいさんのことへ。」

信号待ちをしている間、彼の返事を待つたけど、何も答えは返つてこなかつた。

「おじいさんが、どうかしたの？」

もう一度訊いてみる。信号が青に変わり、吉永君の歩調に合せて横断歩道を渡つていく間も、彼は無言のままだつた。渡り終えて、バスター・ミナルの一角に足を踏み入れた時、ようやく吉永君が重い口を開いたのだ。

「じいちゃん、夏から体調を崩してて、親が向ひよしうちゅう通つてるんだ」

「そ、そなんだ。わたし、知らなかつた……。母さんも何も言つてなかつたし」

「だから……ぶどうも。今年のが最後になるかもしれない。父さんはぶどう園を継ぐ気はないみたいだしな。多分、だけど……」

吉永君の表情が硬い。もちろん、おじいさんのことが心配なんだろつけど。でも、それではなくて、何か違うことが言いたいんじやないかと、なんとなくそう思った。

「何だよ。なんでおまえまでそんな暗い顔になるんだよ」

吉永君の本心が知りたくて、ついつい気難しい顔になつてたのかな？ 無理やり笑顔を作ろうとしたけど、うまくいかない。こんな時こそ吉永君を励ましてあげないといけないのに、なぜかわたしまで悲しい顔になつている。

だつて、毎年もつてたあの立派なぶどうが、今年で最後になるかもしれないんだよ。会つたこともないおじいさんだけど、なんとなく胸の辺りがぎゅっと締め付けられるような切ない気持ちになつた。

「おじいさん、大丈夫かなつて。そう思つたら、なんだか悲しくなつちゃつて。毎年おいしいぶどうを分けてもらつてたでしょ？ わ

たし、あのぶどう、日本中の果物の中で一番好きだったんだもん。

今年のは特に甘くて大粒だつたし」

「あ、ああ」

吉永君の顔が徐々に和らいでいく。頬に赤みが差し、少し照れた  
ように笑っている。

「真澄ちゃんのおじさんもおばさんも、大変だね」

「まあな。今は母さんが向こうに行つてゐるよ。だから、塾のことば  
心配いらない」

「へ？」

なんでここで塾の話？

「おまえ、ホントに鈍いなあ。父さんは仕事が忙しくて帰つてくる  
のは夜中だし……。つまり塾をサボつても、誰にも叱られないって  
ことだよ」

なーんだ。そういうことか。やつと意味を理解したわたしは、や  
つぱり吉永君の言つとおり、かなり鈍い思考回路の持ち主であると、  
改めて自覚し直す。

でも言いたかったのは、本当にそのことだけなの？ 鈍いはずの  
わたしの脳裏に、解けずに残つたクロスワードパズルの空欄が、ぼ  
んやりと映し出されていた。

まだ誰も乗つていないバスがロータリーを回つて、乗り場に到着  
した。わたしはカバンを肩に掛けなおして、列の最後部に並ぶ。す  
ると吉永君がすっと列から離れた。

「真澄ちゃん、どうしたの？ 乗らないの？」

「ああ。塾の授業があとひとコマあるから、それだけ受けて帰る。いいか、ゆう。バスを降りたらマンションのエントランスまでダッシュするんだぞ。いいな？」

わたしは吉永君の目を見て「コクリと頷く。すると彼が白い歯を覗かせて、少しだけ微笑んでくれた。

とうとうわたしの乗る番だ。吉永君と一緒に帰れると思って、密かにわくわくしていたのに……。しょんぼりしながらも、吉永君から目が離せなくともたもたしていると、続けて「乗車下り」とつて、運転手さんにマイクで注意された。

バスに乗り込み、吉永君が立っているところに一番近い席に座る。窓に顔を寄せて、彼に向かって手を振った。

その瞬間、吉永君がふわっとした笑顔を浮かべ、恥ずかしそうに横を向く。わたしと目を合わさないまま徐に右手を挙げて、その手を振り返してくれた。

エンジンがかかり、静かにバスが発車した。

わたしは、吉永君の姿が見えなくなるまで、ずっと窓に顔をくつ付けたまま、手を振り続けた。

「でも、先輩つたらや、わからなこといろいろがあつたら、いつでも電話してきてつて。えへへ……。番号もメアドも難なくゲット！」

絵里がわたしと麻美の前で大きくペースサインをしてみせる。昨日あこがれの先輩と図書館で勉強をした絵里は、終始「機嫌だ。

「それで、電話したの？」

絵里はきつとこのことを真つ先に聞いて欲しいはず。もちろん電話したよ……って返ってくるのはわかっているけれど、一応訊ねてみる。やり取りしたメールだって見せてくれそうな勢いだ。わたしと麻美は身を乗り出して、絵里の右手の中の携帯を覗き込んだ……が。

「するわけないじゃん」

絵里は澄ました顔をして即答する。するわけないって……。な、なんで？ どうしてしなかったの？ 予想外の回答に騒然とする。麻美も同じだ。

「ちょっと、あんたたち。何もそこまでびっくりしなくても……。あのね、これは恋愛のテクニックのひとつなの。うちのアネキの常套手段なんだけども。ある一時期、すーっと彼から遠ざかるの」「遠ざかる？？」

麻美とほぼ同時に声を挿える。

「そう。アタックをやめるの。するとね、今度は向こうが焦り出すんだって。自分は何もしなくても相手が勝手に言い寄つてくるんだって、のうのうと胡坐あぐらをかいているところに、突然、魔の静寂が訪れるつてわけ。待てど暮らせど、彼女からは何の音沙汰もなし。これって、どう? 効き田ありそつじやない? この作戦で、一定期間、先輩のリアクションを待つてみよつと思つんだ。今こそ我慢の時よ」

相変わらず絵里の唇のグロスは、濡れたよつにツヤツヤと光つている。あれからもう三回も色が変わつた。お姉さんのポーチから次々と押借しているのに、まだ絵里のお姉さんは気付いてないんだって。お姉さんつていつたい、いくつグロスを持つているのだろう。わたしは女子大生になるのがちょっと恐ろしくなつた。

学校が終わつた後、テスト勉強といつもわたしの部屋に三人で集まつてゐる。愛花は一人に合わせる顔がないのか、自分の部屋に閉じこもつたままだ。吉永君が麻美と付き合つてゐることはすでに愛花にも言つてある。最初はブツブツと不満を口にしていたけど、あきらめたのか、今はもう何も言わない。

わたしの部屋の真ん中のミニテーブルに、一応教科書が置いてあるけれど、まだ誰もそれを手にしていない。絵里の恋愛談義が佳境に入り、今はそれどころではないんだよね。

絵里の大好きな人が、わざわざ時間を作つて勉強を教えてくれたんだよ。それつて先輩も絵里に気があるつてことだよね。それなら何も心配はいらないはずなのに、どうして電話もメールもしないのかな? いくら作戦だからって、そこまで我慢する必要なんてないのに。今夜あたり心配になつた先輩から連絡があるんじやないかと思う。だって、絵里みたいな美人な女の子が彼女になるかもしれないよ。先輩だって嬉しいに決まつてるよね。

さつきわたしが台所におやつを取りに行つた時、麻美が手伝つと言つて、一緒についてきた。そして、絵里に聞こえなによつにそつと昨日のことを見ねるのだ。

きっと麻美にそのことを聞かれるだろつて思つてたから、昨日の夜から考え抜いて答えを用意しておいた。吉永君は絶対麻美にわたしを助けたなんて言わないはずだ。だからわたしも麻美には知らせないほうがいいと思つた。

いくら近所のよしみだからつて、自分の彼氏が親友と関わつたことがわかつたらいい気がしないもんね。

隙を見てダッシュで逃げ帰つたと言つておいた。嘘じやないもん。本当のことだもの……。

わたしがにつこり笑つてそう言つたものだから、麻美もそれを聞いてほつとしたのか、よかつたと涙を流さんばかりに喜んでくれた。優花はかわいいんだから、変な人に言い寄られないように気をつけ、なんて、お世辞まで付け加える始末。麻美つたら無理しなくてもいいのに。

麻美は相変わらず控えめだ。絵里が先輩の話を次々と披露してくれるのに、麻美は吉永君のことは何も話さない。

絵里は多分、わたしに気を遣つているんだろうね。いつもの絵里は今日みたいに自分のことばかり自慢するタイプじやない。わたしが吉永君を好きだつてことを知つているから、麻美に彼の話をふらないようにしてゐるんだと思う。わたしが麻美と吉永君のラブラブ話を聞けば傷つくと思つてゐるんだ。

そりやあ少しは寂しい思いをすると思つ。でもね、大丈夫だよ。タベ吉永君とは、なんとなく一度目の仲直りもしたし、もう何も思ひ残すことはないと思つたから。何か言いたげな彼の様子は気になつたけど、それを心配するのは彼女である麻美の役目だ。わたしが口出しうることじやない。

「ねえマリ。 吉永君は優しい？」

おもいきつて麻美に訊ねてみた。その時の絵里の驚いた顔つたらなかつた。麻美も一瞬びっくりしたようにわたしを見ていたけれど、みるみる頬を染めて、下を向いてしまつた。

「……優しいよ」

消え入りそうな声で、麻美がつぶやく。麻美、どうしてそんなに恥ずかしがるの？ 麻美こそわたしなんかよりずっとかわいいし、魅力的なんだからさ。もつと自信を持つて。

「マリ。 じいだと吉永君ちも近いんだし、わたし達に遠慮しなくてもいいからさ。カレのところに行つてもいいんだよ」

わたしは、出来るだけ自然にさりげなくそう言つた。同意を求めるように絵里の顔を見る。

「そ、そうだね。マリがそうしたいんなら、吉永のところに行けばいいよ」

絵里もわたしに合せて言つてくれた。絵里がわたしを見る目がどこか悲しそうだ。ところが麻美は顔を上げると、首を横に振る。行かないよつて。

「あのね、テスト期間中は、それぞれが自分のペースで勉強しようつて、そう決めたの。だから、真澄君のところには行かない。みんなも気にしないでね」

「そう、なんだ……」

絵里が麻美の顔をじっと見ながら頷く。麻美は絵里から慌てて田を逸りし、突然、日本史の教科書を手にした。

「あ、あたしも、今回、日本史が一番やばいの。戦国時代つて、武将の名前がいろいろ出てくるし。こくわ戦もいろいろあるでしょ？ そういうも、数学と化学はみんなの力になれると思つから、なんでも書いてね」

「ちよつと待つた！」

絵里が麻美の教科書を、スッポッと上から取り上げる。

「マハ。あんたさあ、なんかおかしくない？ 田の動きが変だよ。あたし達に何か隠してるでしょ？ 違うとは言わせない」

絵里は麻美のどんな些細な変化をも見逃はしなかった。さつきから麻美の田が泳いでいるように見えたのは、気のせいなんかじやなかつたんだ。

「え、絵里つたら、どうしたの？ あたしはこつもどおりなの。ちつともおかしくなんかない」

「じゃあ聞くけどさ……。吉永とは、その……。ど、どこまでいつてるの？ はぐらかさないで、ちゃんとあたしの田をみて言ってー。」

絵里……。それって、あ、あれだよね。付き合この進行度合いを聞いているんだよね。でも絵里の田は真剣そのものだ。興味本位で言つてるとは思えなかつた。

わたしは唇を噛み締めて麻美の答えを待つた。

「そ、それは……。どうしてそんなこと聞くの？ 絵里や優花には関係ないでしょ」

「そんなことない。ねえ、今すぐ言つてよ。いいじゃない、それくらい教えてくれたつて。あたしたちが、マリの「」とこんなに応援してるんだよ。ねえ、言つてよ。やっぱ、キスくらいは……したよね？」

「あ、キス……。麻美と吉永君がそんなことしてるなんて、考えたくないし、聞きたくもない。手で耳を塞ぎたい衝動をなんとか抑える。

「えつ？ あ、ああ……。した……かも」

麻美がしじらもびらになる。言いたくなれば言わなくてもいいのに。絵里はいつたい何を考えているの？ なんだか麻美がかわいそうだ。

「かも？ カもつて何よ。したか、しないかの、どちらかしかないでしょ？ 気を失つてわからなかつたなんて言い訳は聞きたくないし、信じないから」

「絵里……。わかった。言えばいいんでしょ、言えば……。キス……した。したわ。ちゃんとキスした。だつて、あたしたち付き合つてるんだもん。したつて誰も文句言わないよね？」

「麻美……。わたしだつてもう十六だ。恋人同士になれば、そういうこともするんだろうなって……なんなくイメージできる。麻美と吉永君は付き合つているんだもの。不思議でもなんでもない。」

でも、頭ではそうとわかつていても、いつもやつて麻美の口から直接聞かされると、胸が痛い。鼻の奥がツンとしてくる。いやだ。本当は「こんなこと聞きたくないよ。吉永君が誰か他の人とそんなことをしてるなんて、想像するのもいやだ。口の中に苦い血の味が広がる。唇を強く噛みすぎたせいだ。

とつとつ絵里も最後の麻美の気迫に負けたのか、問い合わせるのをやめた。

「マミ、じめん。『こんなこと無理やり言わせちゃって……。あたしつてひどいよね。悪かったと思つてる。でも、最後にひとつだけ。お願い。正直に答えて。吉永とは、本当に付き合つてるんだよね？』

絵里。なんでそんなこと聞くの？　たつた今、キスしてたつて麻美が言つたばかりだよ。聞くまでもない」とでしょ。それなのに……。

「……付き合つてる。テストが終わつたら、遊園地に行こうつて約束してゐる」

麻美が抑揚のない声で自分の手の指をじつと見つめながら答えた。

「そつ……。わかつた。マミ、疑つよつなこと言つたりして悪かつた。でも……。もし何か困つたことや悩んだことがあつたら、何でも言つてよね。あたしも優花も、相談にのるからさ」

絵里が麻美の視線の先にある震えている彼女の手に自分の手を重ねながら言つた。

「絵里。ありがと。その時は、よろしく……ね。今は、大丈夫だか

ら

ようやく顔を上げた麻美が、精一杯の笑みを浮かべて言つ。

「そつか……。マミはわたし達より、一足早く大人に近付いたんだね。なんだかわたしも早くカレシが欲しくなっちゃつた。いいな、マミがうらやましい……」

わたしは本当に心からそう思つた。早くわたしも、みんなに胸を張つて言えるような大切な人にめぐり会いたい。

「やだ。優花にはピッタリな人がいるじゃない

麻美が険しかつた表情を緩めて言つ。わたしにピッタリな人？ 誰のことだる。そんな人、いたつけ？

「鳴崎勇人。最近、優花とよく一緒にいるよね。彼ならわたしの才ススメ物件だよ。クラスでも人気あるし、いい奴だしね。優花だって、まんざらでもないんじやない？」

わたしは麻美の言葉をしつかりと受け止め決意を新たにした。昨日のミイとサリといい、そして今日の麻美といい。勇人君との仲をこれほどまでに疑われるのは、やっぱりわたしにも原因があるんだ。明日からは疑われないよう気をつけなきやつてそう思つた。

それにしても今麻美が言つたことを勇人君が聞いたらなんて思うかな。いやいや、絶対に聞かせられないよね。勇人君が氣の毒すぎる。

麻美の言つとおり、勇人君はいい人だと思う。優しいし、頭もいいし、おまけにイケメンだ。でも、だからって好きになるとは限らない。いじわるで、冷たくて、たまに怖い顔をする人を好きになる

ことだつてある。人生つてそんなものだ。

「マリ。わたしね、鳴崎君のことは、ただの部活仲間としか考えられないの。好きとか、付き合ひとか、そんな風に思うことはできない。多分、これからもずっと……。それに、鳴崎君だって、きっと好きな人がいると思うし……」

そう。たとえわたしが勇人君を好きになることがあつたとしても、報われないつてわかつてゐるしね。だつて勇人君が好きなのは、麻美なんだもの。

「そうかな？ 一緒に委員をしてた時、確かフリーだつたはずだけどなあ。あの整いすぎたきれいな顔をくしゃつと崩して、恋人募集中つて言つてた。あたしがふざけて立候補しようかなつて言つたら、彼マジになつちゃつて。びっくりしたことがあつたけどね……。でも優花にその気がないのなら、あきらめるよ。でもさ、クリスマスまでまだ二ヶ月近くあるし。もし優花の気が変わつたらあたしに言つて。鳴崎はちょうど席も隣だし、優花のことを持ちかけるのには絶好のチャンスだからさ」

「う、うん。ありがと、マリ」

麻美は全く勇人君のことは眼中にないんだね。なのに勇人君つたら、実はもうすでにざくざくに紛れて麻美にアタックしてたんだ。麻美は軽いジョークとして聞き流していたみたいだけど、まさか彼が本気だつたなんて思いもしないんだろうな。恋つて、なんでこんなに切ないのかな……。

「さあ～てそこのお一人さん。そろそろ勉強しませんか？ マリ先生に質問するなら今のうちだよね

絵里が数学のプリントを広げ、難しい問題をピックアップして、  
麻美にすがりつく。一時間ほど勉強をして、母さんが仕事から帰つ  
てきた時に、入れ替わるようにして一人が帰つた。

夕食も終えて、お風呂から上がつたちょうどいいタイミングで、  
メールの着信音が響いた。絵里からだ。濡れた髪をタオルでくるみ、  
携帯を開く。

わたしはそれを見て、言葉を失つた。

優花、今日はありがと。で、マミのことだけ。あの子、かなり苦しんでる。何があつたか知らないけど。それに、多分付き合つてないよ。吉永と。キスの話だつて真相は不明。だから優花。吉永のこと、絶対にあきらめちゃダメ。それと……。ホントはね、あたし。先輩とはダメだつたの。じゃあまた明日、学校でね。

絵文字も顔文字もないシンプルな画面がくっきりとわたしの脳裏に焼きつぶ。もちろん、麻美のことは衝撃的だ。付き合つてないって、本当なのかな？　あまり自分のことを話さない麻美だけど、前にわたしが吉永君のことを訊ねたら、帰りはいつも家のそばまで送つてくれるし、毎晩何度もメールのやり取りもしてるつて言つてた。でも絵里の言つことが正しいとしたら……。麻美が嘘をついてたつてことになる。

昨日の吉永君の態度を思い出すと、それも頷ける。普通、付き合つている彼女を置き去りにして、どこかに行つてしまふなんてこと、ないよね。

吉永君は本を買いに行く麻美と、塾まで一緒に歩いていただけだつて言つてた。だとしたら、やつぱり一人は付き合つていらないのかもしれない。

結局、吉永君と麻美がうまくいつてるとばかり思つてたのは、わたしの思いすごしだつたつてわけだ。

絵里は麻美の行動がどこかおかしいことにいち早く気付いていた。だからさつきもあんなに真剣に、麻美に向き合つていたんだね。それなのに……。絵里。先輩とダメだつたつて、それ、ホント？

一言だつて、そんなこと言わないで、あんなに明るく振舞つて……。麻美やわたしのことばかり気遣つてた。

何て返事をしたらいいのかわからなくて。絵里、と打つただけで、

画面が涙でかすんで見えなくなつた。

テストも無事終わり、午前中で部活が終わつた土曜日の午後、わたしは絵里に誘われて、ケーキショッピングに来ていた。

「今日はね、あたしのおじり。食べて食べて、食べまくろう！」

店の中はすでに満員で、三十分も並んでようやく座席を確保できた。一個百円のプチケーキはどれもおいしそうで、みんなとこじろ狭しとお皿に並べている。十個以上だと飲み物がサービスつてこともあって、絵里もわたしも、もちろん十個選んだ。

「おいしそう！ めちゃうまだね、このケーキ」

絵里が感激の第一声を発してパクパク食べ始める。わたしも負けずに口に運んだ。うーん。おいしい。チョコにクリーム、フルーツタルト、パイにゼリーに……。どれも絶品だ。

お皿のケーキが半分以上なくなりかけた時、絵里が突然鼻をすすぐり始めた。見ると鼻が真っ赤で、目には……いっぱい涙を浮かべている。

「絵里……」

あのメールをもらつた翌日、昼休みに、いつもの図書室裏手のベンチで絵里の話を聞いた。初めは平静を装つていた彼女だったけど、最後には泣き崩れて、そのまま早退してしまつたのだ。

次の日には笑顔で学校にやってきて、もう大丈夫と言つていつも絵里にもどつていたけど、そんなに早く傷が癒えるはずもなく。

なんとか氣力でテストを乗り切った絵里は、一瞬にきて、緊張の糸がポツリと切れてしまったのかもしれない。

「先輩ね、昨日、彼女らしき人と一緒に帰つてた。とてもきれいな人だつた。先輩、なんだか嬉しそうでさ。もつそろそろ先輩のこと、あきらめなきやつて思つけど、そんな簡単に割り切れなくて……」

絵里は涙を流しながらも、どんどんケーキを口に押し込む。

「でもね、ありがたいことに、食欲だけはそのまんまなんだもの。いつもやつて甘い物を食べれば、気持ちも落ち着くかなつてそう思つて、今日は優花に付き合つてもらつたんだ。あたしが失恋したの知つてるアネキが、それだけ食べれるんなら、同情の必要なしつてからかうんだけ、残念ながらそのとおりかも。反論出来なかつた。泣くたびに、心が軽くなつていく感じがするし、それに、今日で泣くのも最後になりそうな気がする。優花、今日は、ありがと」

「ううん。ありがとうだなんて、そんな……。わたし、何もやってないよ。わたしの方」」、いつも絵里に助けてもらつばかりなのに

「こんなわたしでも、絵里の力になつてあげられていいのかな？わたしにできることといえど、いつもやつて彼女のそばにいて話を聞くことだけ。それだけしかできない」。

「何言つてんの。それを言つなら、あたしの方がいつも優花に支えてもらつてるんだから。優花と親友になれてよかつたつて思つてる」「わたしだつて」

わたし達は顔を見合わせてくすつと笑つた。絵里の頬がほんのりピンク色に染まる。瞳の輝きもぷるぷるした唇も。いつもの絵里のものだつた。

わたしは、絵里はもう大丈夫だと、温かい紅茶を飲みながらなんとなくそつと思つた。

店を出て、ファッションビルに足を運び、冬物のセーターを一枚買つた。絵里はもじもじのファーがついた今年はやりのブーツを買つた。

「あたしたちつてさあ、今日買ったのを身につけてデートできる日がホントに来るのかな？」

絵里がブーツの入つた紙袋を持ち上げて、幾分情けない声を出す。  
「わたしは……多分無理。このセーターを見てくれる人なんて当分現れそうにないよ」

わたしも負けずにセーターの入つたビニール袋を田の前にかざし、あきらめのため息をつく。

「ねえねえ優花。麻美はどうなるんだる。今日、デートだつて言つてたけど、どう見てもウキウキしてるつて様子じゃなかつたよね？」

「うん。わたしもそう思つた。なんか元気なかつたし」

「あたしの予想が当たつて欲しいなんて思つてないけど。麻美はそろそろ決断を強いられるんじゃないかな。一方通行の想いに終止符を打つ時が近付いてると思う」

「絵里……」

「なんでだる。あたしにはわかるんだ……。吉永が麻美を見てないつて。きっとあたし自身も先輩に見られてなかつたから、麻美のことも客観的に判断できるんだと思う。吉永が見てるのは、優花だよ」

絵里……。もしそれが事実なら、わたしはいつたいどうすればい

いの？

わたしは、吉永君を呼び出したあの夜のことを思い出していた。  
あの時彼が怒った理由は、わたしが彼のアドレスを消去したこと  
だった。でも、それだけじゃなかつたはずだ。そんなに大園のこと  
が大事なら、おまえの言つとおりにしてやるつて、悲しそうな目を  
して……彼はそう言つた。

わたしは何かとても大切なものを見失つていたんじゃないだろう  
か。もし吉永君が、わたしのために麻美との交際を受けてくれたの  
だとしたら……。

わたしと麻美の友情のために、吉永君が自分の気持ちを押し殺し  
て、麻美と付き合おうと努力してくれていたのだとしたら……。

「絵里、『めん。わたし……帰る』

わたしは目を大きく見開いて驚いている絵里を大通りに残したま  
ま、バスター・ミナルに向かつた。

マンションのロビーで、彼を待ち伏せするために……。

まだ外は人が見分けられる程度の明るさはある。普通、こんな早い時間にデートを終えて帰つてくるとは思えないけど、絵里の言ったことが本当だとすれば、吉永君がいつ帰つても不思議はない。わたしは、ロビー奥の観葉植物の陰に立つて彼を待つた。部活帰りの中学生が賑やかにエントランスを通り抜ける。買い物を終えた家族連れも、大荷物を抱えて何組かそこを通つた。

でも、吉永君はまだ帰つてこない。もしかして、とつくの昔に帰つていて、もうすでに家にいるのかもしれない。朝から麻美と会つていたのならその可能性もある。

あと五分だけ。わたしは心中でそう決めて、祈るような気持ちで彼を待つた。

バスが到着するたび定期的に、帰つてくる人が群をなす。見知った顔の人が次々と帰つて来た。土曜日なので中高生も私服の人が多い。その人波が去つてしばらく経つてから、チユニック風のワンピースに黒のレギンスを合わせた女の子が視界に入る。わたしは目を凝らしてよく見た。……麻美だ。

「マ……

「マミ」と言いかけて、わたしは咄嗟に口を噤んだ。そして一步後ろに下がる。麻美はわたしがいることに気付かないままエレベーターに乗り込んだ。まさか、今から彼のところへ？ 小さな紙袋を胸の辺りで抱きしめるように持つた麻美が、思い詰めたような顔をして上階に上がつていったのだ。

どうしたんだろう。足がガクガク震えてる。喉もカラカラだ。こん

なところにいても仕方ないのに、足が前に進まない。次第に指先が冷たくなり、立っているのも辛くなってきた。麻美がここに来たつてことは吉永君は家にいるんだよね。

デートが終わって、麻美が何かを渡しに来たんだ。それとも。今から彼の家でデートの続き? お母さんは頻繁に長野に行っていると言つてた。誰もいない吉永君の部屋に麻美は行くのだろうか?

わたしはなんとか気力を振り絞つて観葉植物の鉢の前に出た。周囲に誰もいないのを確認して、エレベーターホールに向かい、ボタンを押す。一基あるエレベーターの一基がすっと降りてくる。幸い三階に停止した様子もなく、誰も乗つていない空っぽの箱が私の前で止まつた。

するといつ間にも駆け込んできた五才くらいの男の子がわたしの横を潜り抜けて、エレベーターに飛び乗つた。そして中からわたしを見てニッと笑う。後ろからその子の母親らしき人が走ってきて、これ! とその男の子を叱つた。

「どうもすみません。あれほど言つてゐるのに、この子つたらひやんと並べなくて。ごめんなさいね」

「い、いえ、別に」

「これくらい、いつでもあること。小学生のランドセル軍団のあつかましさは、これどころの騒ぎではない。わたしだつて昔はそうだつたのだし、別に取り立てて、その男の子を非難するつもりは無かつた……のだけれど。

わたしがその子の母親とぺこぺこと頭を下げあつてこるうちに、隣のエレベーターが下りてきて、中から出てきた人と目が合つた。長いまつ毛に縁取られた黒目がちなその目の持ち主は、麻美しかいない。

「優花……」

「ま、マミ」

わたしは麻美の前に立ち止まり、男の子と母親を乗せたエレベーターが上がっていくのぼんやり見ていた。

「優花。今帰り?」

「うん」

わたしはあわてて麻美に視線を戻し、怪しまれないように、いつものように頷く。麻美はわたしが今日、絵里と会っているのは知っている。

「絵里、どうだった?」

麻美は絵里と先輩のことを心配しているのだ。本当なら一緒に絵里を慰めてあげたいんだけど、行けなくてごめんねと昨夜メールを受け取っていた。麻美も絵里の失恋に心を痛めている一人だ。

「泣いていたけど……。もう大丈夫だと思つ。マミは? 今日のデート……。楽しかつた?」

どうして吉永君の家に行つていたの? なんてやつぱり聞けなかつた。ただ……。麻美が上にいた時間はほんの数分程度だ。さつきの紙袋が手元に無いのをみると、何かを渡しただけだつていうのがわかつたから、訊ねるまでもないと思つたのもある。

「あつ、う、うん。楽しかつたよ」

麻美がにこりと笑つた。けれど、その笑顔はどこか寂しげで、心

から笑つていいとはとても思えないほど、違和感があった。

「そつ……なんだ」

「優花、あたし、そろそろ帰る。マンションの前で、ママが車で待つてるの。じゃあね」

麻美は長いストレートの髪を揺らしながら外に走つて行った。

「マリ、バイバイ！ また明日……」

わたしがそつと話した時、もうすでにエントランスのドアは閉まつた後で、その声は彼女に届かなかつたのだろう。麻美が振り返ることはなかつた。

わたしは気が抜けたように、がつくりと肩を落として、エレベーターホールに向かつた。何をしたというわけでもないのに、例えようのない疲労感が襲つてくる。

エレベーターで見知らぬ人と一緒に乗り合わせるのも気が引けて、わたしは階段をとぼとぼと上がり始めた。ブーツのかかとが「コツコツ」と音を立てる。その音がますますわたしの心の空洞に虚しく響き渡る。

もしかしたら絵里の予感は、思い過げしだったのかもしれない。麻美は着実に吉永君との関係を深めていくと思えなくもない。ぽんやり考えてみると、誰かが下りて来る靴音が聞こえた。かなりのスピードだ。あつという間にその人とすれ違う。そして、わたしのすぐ下でその靴音が止んだ。

「ゆづー！」

吉永君が、驚いたような声でわたしを呼んだ。



「ゆ、そこで、待つてろ」

「真澄ちゃん！」

「待つてろ。いいな！」

吉永君は一度下りかけて立ち止まり、わたしがそこにいるのを確かめるようにしてこっちを見ると、さつき麻美が持っていた小ぶりの黒っぽい紙袋を手に持つて、また階段を下りていった。

あまりにも突然の出来事に、驚く暇も無かったというのが正直なところ。吉永君はきっと麻美を追いかけて行つたんだ。

でも、なぜ？ せつかく麻美が届けた紙袋をビリすんだろ？ まさか返すつもり？

吉永君、麻美に会えるのかな？ あの後、すぐにお母さんの車に乗つたとしたら、もうその辺にはいないと思つ。なら、家まで追いかける？ バスで？ ジャあ、わたしはどうしたらいいんだろ？

そこで待つてろと言られた。真剣な眼差しで、彼は確かにそう言った。

待つてる理由なんて何もないのに、わたしはまるで魔法にでもかけられたかのよつに、そこから一歩たりとも動けなかつた。

しばらくして、さつきと同じ靴音が階下から聞こえてくる。吉永君が戻ってきた。彼の手にはまださつきの紙袋が掴まれたままだ。麻美には会えなかつたんだね。彼は少し息を荒げながら、わたしを見上げて言つた。「……来いよ」と。

吉永君が下からわたしを呼んでいる。なのにわたしは、たつた今

遅れて襲ってきた極度の緊張感に阻まれ、返事すらできなかった。吉永君がわたしを見ている。相変わらず胸はドキドキするし、目がつてまともに合わせられない。

そんなわたしに業を煮やした吉永君が、一段抜かしで「ここまで駆け上がってきた。そして……わたしの手を取った。

ま、まさか……。

わたし達、手を繋いで……いる？

わたしはそれから先、どうやって階段を下りて、ビルを這いつぶこたのか、全く何も覚えていない。

ただ、吉永君の手が暖かくて、大きくて。歩道の横を車がすれ違う時、ギュって引き寄せるように握ってくれたってことだけは、どうにか憶えている。

次第にマンションから遠ざかり、わたし達がむかし通っていた小学校の近くの小さな公園に辿り着いた。

もちろんその間、吉永君は何もしゃべらないし、わたしも口を閉ざしたままだった。繋がれた手ばかりに意識が集中してしまう。彼がいつたいどんな表情をしていたかなんて、当然、覗き見るゆとりなどあるわけもなく。

薄暗くなつた公園に灯りが点る。ブランコも滑り台も何もない公園。春には桜が咲き、秋が深まると葉が真っ赤に色付く。

周囲の住宅からは、テレビの音がかすかに漏れ聞こえ、どこからかシチューの匂いが漂ってきた。

「あそこに座るわ」

吉永君は朽ち掛けた木のベンチを繋いだままの手で指し示した。

わたし達はそのままベンチに腰を下ろし、ざらりともなく手を離した。

「大園を追いかけたけど、間に合わなかつた

吉永君が両手で袋を弄びながら唐突にそんなことを囁いた。

「おまえ、あいつに会わなかつたか？ こんなもの俺に渡してさつと帰つて行つたけど、とてもじゃないが受け取れない」

わたしに返事を求めるでもなく、手元の紙袋をじつと見つめながら、吉永君がひとり話を続ける。その袋の中には何が入つているのかは検討がつかないけど、それは吉永君にとつて不本意なものだつて」とくらくなばりが想像がついた。

「俺は、別にこんな物が欲しくて、あいつと付き合つてたわけじゃない……」

わたしは思わず息を呑んだ。やっぱり吉永君、麻美と付き合つてたんだ。なのに、わたし。いつたい何を期待していたんだろう。手を繋いだくらいですっかり舞い上がり上がつてしまつて、こんなところまでついて来てしまつた。絵里、わたし……。どうしたらいい？

「おまえがあいつと付き合つのを勧めた理由が、今日、やつとわかつた。前に俺、おまえに辛く当たつたろ？ 悪かったよ。謝る」

「真澄ちゃん……」

わかつたつて……。何がわかつたの？ 麻美が何か言つたのどううか。

「大園の奴、俺があいつのことを好きでもないのに付き合っているのを、最初から気付いていたんだよ。付き合つうちに好きになつてくれたらいいって、そうも言つてた。それで、どうしても好きになれそうになかつたら、その時、別れようつて。それを決めるのが今日だつたんだ」

「そ、そんな……」

麻美が心待ちにしているようにみえたデートが、実はそんな残酷な日だつたなんて。

「昼にあいつが前から行きたがつてたテーマパークに行つて來た。すごい人で、アトラクションもろくろく見れなかつたよ。それがあいつ……。向こうですつと泣いてるんだ」

わたしは黙つてうんと頷くことしかできない。だつて、麻美の気持ちが痛いほどよくわかるから。最後のデートになるかもしない日に、にこにこなんてしていられないもの……。

「昼飯の時、何で泣いてるんだつて聞いたんだ。そしたら……。あいつから、別れよう、別れたいつて言い出して

「う、うそ……。マミがそう言つたの?」

なんてこと? ありえない。吉永君に断られる前に、自分から別れを切り出したとでも?

「あいつ、来年から違う高校に行くんだつてな。だから、もうこの先俺と付き合つても仕方ないって言つんだ。こればっかりは俺も寝耳に水だつた。おまえはそのこと、知つてたんだろ?」

「あつ……！」

それって、転校が決定したってことだよね。知らなかつた……。  
麻美、ホントに転校しちゃうんだ。中間テストの成績が芳しくなかつたのかな？ 総合順位は聞いてないけど、数学は学年で最高点だつたつて言つてたのに……。

「転校する友達の最後の願いを叶えてやりたい……。おまえの考え  
そういうことだよ。夏休み明けに長年のおまえとの誤解が解けて、や  
つと俺達、仲直りしたんだよな？ この先、また昔みたいな関係に  
もどれるかなつて、期待してた。もう絶対に、ゆうをいじめたりし  
ないつて、あの頃のバカな自分を反省したんだ。なのによ。その矢  
先に、大園の話をおまえに聞かされて。俺、ホント、どうしていい  
かわからなかつた。おまえがまた、俺から離れていくみたいで、辛  
かつた」

「ああ……吉永君。たとえ、ほんの少しでも、わたしのこと、そん  
な風に思つてくれてたんだ。わたしだつて、苦しかつた。心も体も  
つぶれそうなほど、辛かつた。吉永君がわたしと同じ気持ちだつた  
つて思つてもいい？

「真澄ちゃん、ゴメンね。わたしだつて真澄ちゃんと仲直り出来て  
嬉しかつた。だからマミのこと、本当は言い出しへくかつたの。だ  
つて、だつて、わたし……真澄ちゃんのこと」

「もういいよ。おまえヒヤヒヤしてたんだろ？ 俺と大園がいつ別  
れるかつて。もしそうなつたとしても、おまえには何の責任もない  
から。俺の努力が足りなかつただけだからな。だから気にするな  
「真澄ちゃん。そうじやなくて、わたし、わたし……」

「なあ、ゆう。俺な、今夜から、長野に行くんだ  
「えつ？ 長野？」

もう少しで、気持ちを伝えられたのに……。吉永君がわたしの決

心を揺るがすよつた一言を口走った。

「じじちゃん、相当悪いみたいで。医者に体内を呼んでおけって言われたらしい」

その時、公園の片隅に集まっていた落ち葉がカサカサと音を立てるかと思つと、一瞬のうちに風に吹かれて空中に舞い上がった。

「じいちゃん、相当悪いみたいで。医者に身内を呼んでおけって言われたらしい

おじいさん、危篤なんだ……。わたしは息をひそめて吉永君の話に耳を傾けた。

「今夜、父さんが帰つて来たら、車で長野に行く。もしじいちゃんが、その、死ぬようなことになつたら……。しばしばはこひでに帰つて来れない」

吉永君の声が、低く、小ねく、そつ吐げた。

時間が……止まった。

周りの景色が一枚の絵のように、眼前に貼り付いている。公園の植え込みから猫が出てきて怪しく瞳を光らせ、ほんの一瞬こちらを見て、そのまま走り去つた。沈んだばかりの太陽の上部に低く垂れ込めている灰色の雲。夕焼けはほんのわずかも残つていない。雨の匂いのする夜風がすうつと頬をかすめる。

静かに押し寄せてくる夜の帳に、背中がゾクッと震えた。

「なあ、ゆづ……」

じついう時つて、なんて話しかけたらいいのだろう。 そうなんだ、大変だね。 そんなありきたりな言葉しか思いつかない。

何も言えずに黙り込んでいると、吉永君が静かにわたしの名を呼んだ。つぶやくよつと。そして何かを思い出したように。それとも、

「これと言つた理由もないのにただわたしの名前を口にしただけ、とも言つよ」……。

「なに……。真澄ちゃん」

しばらく間を空けて、そつと返事をした。

「おまえ、この前言つてたよな？　じいちゃんのふどりが、日本中の果物の中でも一番好きだつて」

「うん、言つた。だつて本当なんだもん。おじこちゃんの作ったピオーネが、お店で買つのよつ、ずっと甘くて、大きくて、おいしいと思つ。そつだ！　真澄ちゃんの顔を見たら、病氣も早く治るんじやないかな。おじこちゃん、きっと元気になるよ。また来年もおいしいふどりが作れるつてば」

吉永君がほんの少し微笑んだよつて見えたけど、細めた田はやつぱつどりが寂しかつて、遠くの空を見つめたままだ。

「やつだな。じいちゃんには、絶対、治つてもらわないとな。これからもずっと、あのふどり、おまえに食わせてやりたいし……」

真澄ちゃん……。ありがと。やつだよ、大丈夫だつて。おじこさん、あつと治るよ。わたしはさつき吉永君と繋いでいた右手を左手の手のひらで包むよつにして胸の辺りに持つてゆき、おじこちゃんの具合がよくなりますよつこと心中で祈つた。

吉永君の視線を感じて、ふと横を見ると……。

「わ、おまえの昔の夢、今も変わつてないのか？」

「」の前、バスター・ミナルで見送つてくれた時に見たような、ふわつとした笑顔を浮かべて、吉永君がわたしに訊いてくる。  
突然何を言い出すのかと思えば、そんなこと……。わたしがアナウンサーになりたいってことかな？

「将来の夢のこと？」

的外れな答えを書つ前に、確認してみる。

「ああ」

吉永君の目がじつとこっち見てる。やだ、緊張するよ。でもこの状況で視線を逸らすのはもつと勇気がいる。自然と回数の増えるまばたきにきまつりの悪さを覚えながらも、なんとか答えた。

「う、うん。昔のまんまだよ。今でもアナウンサーになりたいって思つてる。でもさ、すつごく採用が難しいのも知つてるし、なんてつたつて、この顔だしね。なれるわけないのは百も承知なんだけど。いつまでも夢見る少女みたいで、おかしいでしょ？」

おじいさんの話を聞いたばかりで不謹慎かとも思つたけど、少しだけ舌を出して、肩をすくめてみる。だって、将来の夢の話だよ。面と向かつて話すのは、告白するのに匹敵するくらい、とても恥ずかしい内容だと思わない？

「別におかしくはないけど。じゃあ、進学先も決めてるのか？」

吉永君は少しも茶化さず、真面目な顔をしてわたしの夢を受け止めてくれた。

「うん。A学院大学。」この大学出身の有名な女子アナがたくさんいるし、家からも通えるし」

「やうか……。わかつた」

えつ？ わかつたつて、何がわかつたのかな？ ちなみにわたし  
が目指しているA学院大学はミッション系の女子大だ。吉永君にと  
つては何の役にも立たない情報のはずなんだけどね。

「俺が帰つてこなかつたら……」

帰つてこなかつたら……つて。ちょっと待つて。なんなの？  
それつて、どういう意味？ おじいさんに会いに行くために長野  
に行くんだよね？ それとも……。そうじやないの？

わたしの心臓が俄かに鼓動を早める。

「お、おい、そんな顔するなよ」

吉永君がわたしを見て慌てる。わたし、どんな顔してたんだろう？  
ただ、息が止まるかと思うくらい、びっくりしたのは確かだ。

「いや、違うんだ。俺の言い方が悪かったよ。向こうにいる滞在期  
間が長引いても、心配するなってことさ。大園にもそれは言つてあ  
る。だから……おまえも、その、なんだな。変な奴に惑わされない  
ように、元気でいろつて、そう言いたくて」

「真澄ちゃん、なんか変。わたしには、もう帰つてこないって風に  
聞こえる。まさか、このまま長野に行つたきりつてことはないよね  
？ 真澄ちゃん。ねえ、教えて？」

わたしは必死になつて吉永君に詰め寄つた。絶対に帰つてくると  
いう言葉を聞くまではあきらめない。

「な、何言つてるんだよ。あたりまえだる。そんなわけない。その証拠に学校にだってそんな話はしてないからな。ただ、すぐには帰つて来れないって事情もあるんだ。ぶどう園の手入れとか、いろいろな。田舎せまいひけと違つて、昔からのじがらみとかもある」

そ、そうだよね。吉永君のお父さんだつてぶどう園を継ぐ気はなつて言つてたんだし、みんなして向こうに行つたきりなんてことはない……はず。

わたしは、まだ心のどこかにもやもやとした物を感じながらも、彼の言つたことを信じよつと自分に言い聞かせる。

その時、聞き慣れない携帯の着信音が近くで聞こえてきた。ポケットから携帯を取り出した吉永君が、「めんと言いながら、隣で話し始める。

「わかった。すぐに帰る。……ああ、すぐ近くこいるから。じゃあ

短く話し終えると、携帯を閉じながら吉永君が立ち上がつた。

「父ちゃんからだ。ゆづ、「めん。そろそろ帰るよ。帰つてきたら、授業のノート見せてくれる? お礼はぶどうジユースつてことだ」

「お礼なんて、いいよ。そんなこと気にしないで、さ、早く。ノートはしっかり取つとくからや。気をつけて行ってきな」

わたしは足早に先頭を切つて歩き始める。すぐに追いついた吉永君が横に並んだ。でも、再びわたしの手に彼の手が重なることはなかつた。

おじいさんが回復して、彼が長野から帰つてきたら、今度こそちゃんとわたしの気持ちを伝えよつ。今日はそのつもりで絵里のもと

を飛び出し、待ち伏せまでしていたんだもの。次は大丈夫。絶対に言える。

そして……。もしもその時、吉永君が麻美を選んだなら……。今度こそ、彼のことはきつぱりあきらめよう。

わたしは風に当たつて冷たくなつた右手をぎゅっと握り締めて、吉永君の歩調に合せ、帰路を急いだ。

### 31・やつてらんない

今日の時間割は、数A、国語総合、体育、現社、そして英語1にホームルーム。もちろんどの時間も、斜め後ろの吉永君の席は空席のままだった。高校に入学後、初めての欠席に、どの教科の先生も驚いた顔をしていた。

担任の先生は、吉永君の欠席理由を家の都合としか言わなかつたけど、陸上部の人たちから情報が漏れたのか、彼が長野に行つていることは放課後にはすでにクラスの全員に知れ渡つていた。

わたしが一昨日の土曜日に、買い物の途中で絵里を大通りに残してまま帰つたことが、吉永君に関係していると見抜いている絵里は、ふふんと鼻を鳴らし、わたしを問い合わせる。

「知らないとは言わせない。あの日、会つたんでしょう？　吉永と「もうホント、絵里には敵わないよ……。なんで会つたつてわかるの？」

「そんなの簡単よ。優花の顔に書いてあるもん。で、どうだつた？　今日のマミの元気のない様子からすると、あの一人、やっぱ、付き合つてないんでしょう？」

誰もいなくなつた教室の片隅のひとつ机を囲むように座つて、絵里がわたしの顔を興味深げに覗きこむ。

「それが……。付き合つてたみたいなんだ。でもこの先も付き合つかどうかは、まだ聞いてない」

「うそ！　それ、ホント？　ホントのホントにあの一人、付き合つてたの？　信じられない。付き合つてるつたつて、形だけなんじや

ないの？ あたしさ、いつもアネキを見るから、それとなく、恋愛中の女心ってわかるんだよね。マミを見る限りじゃ、どうも違うような気がする。でも、吉永本人が言つんだから、疑いようがないよね……。吉永が見てるのは優花のはずなんだけだな

「吉永君はね、わたしが彼を好きだってことは、これっぽっちも気付いてないの。だから、純粋にわたしがマミを応援してゐて思つてる。つてことは、逆に考えると、彼もわたしのことは何とも思つてないのかもしれないよ」

「うーん……」

絵里が腕を組み、まだ納得のいかない顔をして低く唸る。彼女の直感どおり、吉永君が少しはわたしのことを思つてくれてるのかなと期待したけれど、公園でそれらしきことは何も言われなかつた。でも……。

「ねえ、絵里。ちょっと訊ねてもいい？」

「何？」

「あのね、たとえばの話なんだけど。好きでもなんでもない相手のことが、気になつて、心配で心配でたまらなくなることってあるかな？」

「へ？ 何それ。誰の話？」

「え、絵里。だから、たとえばって言つてるし。そんな疑わしい田でじつと見ないでよ。

「いや、あの、一般的に……」

「吉永に言われた？」

「う、うわあー。なんでこんなに早くバレるんだろ。また顔に書いてあつたのかな？ ビリでいつも愛花にトランプで負けてばかり

なわけだ。

「そ、その……。前に吉永君に、そんなこと……言われて」「ふううつ。やつてらんないよ。……あのね、優花。嫌いな人やどうでもいい人のことが、心配で心配でたまらなくなつたこと、ある？」悪いけど、あたしはない。好きな人と親友と家族以外にはそんな気持ちにならない。で、吉永に何の心配をかけたの？ あたしの目が節穴だと思ったら大間違いよ。なんか、テスト前くらいから怪しかつたのよね、優花とマリ……」

わたしがミイとサリに言いがかりをつけられた日のことは、絵里にはまだ何も話していない。でも次の日のわたしとマミの態度がぎこちなかつたせいで、絵里はずつと不信感を抱いていたみたいだ。絵里自身が先輩のこと「ごたごたしてたから、その時は追求されなかつたのだけど、それも今日まで」

わたしはついに白旗を揚げ、すべてを絵里に話した。

「優花、これからしばらくなは絶対に一人で帰っちゃダメだよ。鳴崎でも誰でもいいからさ、一緒に帰つた方がよくなない？ 危なっかしいつたらありやしない。にしても吉永。めちゃカッコいいし。あたしもそんな風に助けられてみたい……。でもさ、吉永も無理してるよね。優花が彼にマミを紹介したのが、そもそも間違いだつたんだよね」

「うん。でもあの時は、吉永君は絶対にわたしのことなんて何とも思つてないつて、信じて疑わなかつたんだもん。……わたし、決めたんだ」

絵里がはつと何かに気付いたかのようにわたしを見た。

「吉永君に、気持ちを伝えることにしたの。吉永君がどう思つてい

ようと関係なく。それで、彼がマミを選んだら、わたしはきっとやあきらめる

「優花……」

「わたし、絵里に背中を押されたの。絵里はちゃんと先輩に気持ちを伝えて、いつも自分にしつかりと向き合っている。だからわたしも決めたんだ。マミにもきちんと説明するつもり」

「そうだね。それがいいよ。あたしだってマミが振られるのは辛いけど、優花が自分に嘘ついて、マミに同情してることの方がもつと辛い。マミのためにも、ここは正々堂々と戦うべきだよ」

「絵里。戦うだなんて、大袈裟だよ。それにマミが振られるって決まつたわけじゃないし」

「またそんな弱気なこと言つて。とにかくすべては、吉永が帰つてきてからだね。さて、そろそろあたしたちも帰ろっか」

絵里が机をポンと軽やかに叩いて立ち上がり、教科書と副読本でぎつしり詰まつたカバンをよいしょと持ち上げた。わたしも重いカバンを肩に掛けて、教室を出ようとしたその時、バタバタと走るスリッパの音が廊下に派手に響き渡つた。

「あれ？ もしかして、鳴崎君？ 優花、ほら、あそ！」

絵里が窓から教室を覗き込む人物に指を差す。わたしはいつになく慌てた様子のその人に、瞬時に駆け寄つた。

「勇人君！ どうしたの？」

「ゆ、ゆうちゃん。ハアハア……。大変なんだ」

勇人君のありえないほどの狼狽ぶりに、わたしは思わず絵里と顔を見合せた。



「あつ、アーティスト

わたしの後ろにいる絵里に気付いた勇人君が、決まり悪そうに頭を下げる。

۱۷۰

絵里も勇人君に合わせるようにペコッと頭を下げる。絵里と勇人君はほとんど面識がない。といつても同じ高校なので顔くらいは知っているけれど、話すのは多分初めてじゃないかと思う。お互いに少々よそよそしいのは、この際目をつぶるとして。

「優花、あたし、先に帰ろっかな？」なんかお邪魔みたいだし……」

いたたまれなくなつたのか、絵里がわたしの耳元でぼそつと言つた。

「そんなことないって」

とわたしが絵里を引き止めるのとほぼ同時に、勇人君が話の矛先を突如絵里に向けた。

「あ、あのう、本城さん？」  
「だよね。たしか……大園と仲いいよね？」

勇士君のあまりに唐突な質問に、絵里はポカンと口を開けたまま、  
はあ？ と訊き返す。

「あつ、こんなこと突然訊いてごめん。突然ついでにお願いがあるんだけど……。たつた今、彼女が学校を出たところなんだ。本城さん、頼みます。一緒に帰ってくれませんか？ どうか、お願ひします」

「べ、別にいいけど。何かあつたの？ マリの具合が悪いの？」

尚もきよとんとしたまま、絵里が勇人君に訊ねる。

「いや、あの、その……。とにかく一人にできなくて。今ならまだ間に合つよ」

「鳴崎君、わかつた。つてことばマリは部活も休んだつてことだよね？」

「うん。そうなんだ。早く、早く追いかけて！」

不可解極まりない勇人君の言動にも臆することなく、その場の空氣を的確に読み取った絵里は、次の瞬間教室から飛び出していた。わたしも当然のように絵里と一緒に麻美を追いかけようとするとい、勇人君に止められた。

「待つて、ゆうちゃん！ 先輩が俺とおまえを部室に呼んでるんだ。それでここに誘いに来たらちょうど本城さんがいて……。実は、大園が……変なんだ。あいつ、今朝からどうもおかしいんだよ。いつも違う。顔色も悪いし、授業中もずっと考え事をしてるみたいだつたし。もしかしたら真澄が欠席することと何か関係があるのかも知れないけど。とにかく彼女が心配で。先輩に事情を話して、早めに学校を出してもうらうつと想つてゐる。だから、ゆうちゃん。俺の代わりに、先輩の仕事、手伝ってくれないかな。頼む。それと、本城さんの携帯番号教えて」

「わ、わかった」

勇人君のこんな必死な姿、初めて見た。わたしは大急ぎで絵里に勇人君から電話がかかるかもしれないと短いメールを打つ。ここで起こったことを目の当たりにしていた彼女ならば、すぐにその意味を理解するはずだ。そして勇人君に絵里の番号を教えた。

「ゆうちゃん、ありがとう。恩に着るよ。勝手におまえから番号を聞き出したこと、本城さんにはちゃんと俺の方から説明しとくから。さあ、急ごう。多分、来週のボランティアの打ち合わせと準備だと思うんだ」

わたしはカバンを肩に担ぎなおすと、勇人君を追うように、急ぎ足で部室に向かった。

結局その日、わたしが部室を出たのは、六時頃だったと思う。外はすでに真っ暗だった。勇人君はあの後なんとか先輩を説得するのに成功して、麻美を追いかけて行つた。

まだ絵里からも勇人君からも連絡はない。どこにいるのか訊ねようど、携帯を取り出し画面を表示させた時だった。

「石水……さん」

校門を出たところで誰かに呼び止められた。辺りには、闇が迫つてくる。誰だらうと目を凝らしてみるがよく見えない。次第に近付いてくるその人がサリだとわかるまで、しばらく時間を要した。

「んもうー、何、ビクついてんのよ。そんな疫病神見るみたいな怯えた目であたしを見ないでよ」

街灯の下で、サリの厚めに塗られたファンデーションが、異様に白く光る。今日は勇人君はいない。なのに、何だろ？ また何か言われるのかな？ 怖いよ……。

「い、いめんなさい。別に、やつにうわけじゃ……」

ドキドキする心臓を隠すように胸に手をあて、謝りながらゆづくりと後ろに下がった。サリとはあれから学校の廊下で幾度となくすれ違つたけど、何も言つてこなかつた。だからもう無関係だと思つていたのに……。

「あたしが、あんたに謝ろうと思つてさ」

下の方で緩めに結んだリボンの上の広く開いた胸元には、金の細いネックレスが見え隠れしている。わたしは大きく息を吸い心を落ち着けると、サリの真意を探るため、ゆっくりと目を合わせた。

「あんたの相手、吉永だつたんだ。ヒロにきいたよ。それつてマリと三角関係つてことだよね？」

「そ、それは……」

なんてことだろ？ 広川君、あの時は公言しないつて言つたのに……。どうしよう。ちゃんと否定した方がいいのかな？ でないと、麻美に知られてしまつ。

「あつ、安心して。あたし、あんまりそういうのに首突つ込む趣味はないから。三角でも四角でもあたしには関係ないし」

そなんだ……。少しほつとしたけど。とりあえず曖昧な笑みを浮かべて、サリが早くここから立ち去つてくれることを祈つた。

「でもさ、ヒロ、あんたのことにい子だつて言つてた。もひいじめるなつてあたしに説教するんだよ。ねえねえ、あたし、あんたをいじめたつけ？ そんなつもりなかつたんだけだな……」

サリは上目遣いにわたしを見ながら、肩に掛けた何も入つてなさそうなカバンを前後に揺する。ぶら下げるラインストーンのハートのキー・ホルダーが街灯の光を反射しながらキラキラと揺れた。

「とにかく、ごめんね。それとさ、あたし、鳴崎のこと、なんだかこの『いろいろ』でもよくなつちゃつて。あたしの心変わりの速さは今に始まつたことじやないんだけど。あのさ、ヒロは……。あたしの元力になんだ。まあ、お互い、似たもの同士なんだけね……」

……じゃあね、石水さん。サリはそう言つてふふふと笑つと、いつの間にかもう辺りにはいなくなつてて。

もしかしてサリは、わたしを待つっていたのだらうか？ 彼女は部活はやつてないはず。こんな暗くなるまで、謝るために待つてくれたのだとしたら。

高校生活も、まだあと一年ある。もじこの先、サリと同じクラスになるよつなことがあつたら……。案外仲良くなれるのかもしけないなつて、ふとそう思つた。

### 33・お姫ひめこ（前書き）

いつもお越し頂き、ありがとうございます。以降、シリアスな場面が続きますので、最終話まで後書きを控えさせていただきます。尚、ブログの方にて、内容についてのコメントなどを書いていく予定ですので、そちらにも足を運んでいただけたらと思います。

今日も吉永君は学校に来なかつた。彼が長野に行つてもう一週間になる。いつの母さんが一度だけ吉永君のお母さんに連絡をもらつて、もうしばらく学校を欠席すると聞かされた。おじいさんが元気かどうかは、まだ何もわからない。

そろそろもどつてきて欲しいな……。吉永君のいない教室がこんなに味気ないものだなんて思いもしなかつた。

先日絵里が麻美を追つて行つた日の夜、絵里から怒り心頭の電話をもらつた。麻美は普段よりは幾分元気がなかつたものの、他に変わつたところはなくて、絵里が血相を変えてやつて来たのを見て、いつたい何事かと逆に心配させてしまつたらしい。

少し風邪気味だから部活も休んだのという麻美の言葉に嘘はなかつたと、絵里の怒りは一向に収まらない。

「鳴崎つて、いつたいマミのなんなのよ！ わけわかんない。おまけに後からあいつがあたしたちと合流した時、マミがなんて言つたと思つ？ 鳴崎は絵里の新しいカレシなの？ だつて。『冗談じゃないわよ。鳴崎も困つたような顔をするだけで煮え切らないし。あいつつてあんなキャラだつた？ もうちょっといつ、一枚目で、冷静な人だとばかり思つてたんだけど……』

絵里のお怒り、ごもつともだ。勇人君の願いどおりに麻美を追いかけた拳句、彼と付き合つてるとまで誤解され……。絵里も災難だつたねと慰めることしかできない。

勇人君からは、家に帰つてすぐにお詫びのメールをもらつたらしこれだけ、それだけでは許せないと憤りを露わにした絵里に、どうとう勇人君はケーキをおごる約束までしたそだ。

勇人君は絵里がどれだけケーキ好きか知らないんだ。絵里が何個食べてもいいように、安くておいしいところを探しておくようになってアドバイスしておいた方がいいかもね。

で、勇人君には悪いけれど、彼が好きな人が麻美だつて絵里に知られてしまつた。彼女に真相を訊ねられた時、正直にすべて話したんだ。勇人君に振り回された絵里には、そのことを知る権利があると思ったからね。

それを聞いた絵里はさすがに驚いていた。麻美も片隅におけないねつて、友のモテつぶりに満足そうに頷く。これで鳴崎をからかうネタもできたり……と意味ありげな笑みを浮かべてつぶやく絵里を見た時、突如勇人君の身の危険を感じたのは言つまでもない。

絵里は今日はお姉さんと駅で待ち合わせなんだつて。お姉さんオススメの激安ドラッグストアで、これまたお姉さんオススメのコスメを揃えに行くんだと今朝からはりきつっていた。

わたしにもとりあえずつて感じで一緒に行こうと誘つてくれたけど、答えはやっぱリノー。前に絵里のと同じグロスを買つたけど、それ以上のマイクには、まだあまり興味がないんだよね。

わたしのことをわかってくれている絵里は決して無理強いはしない。じゃあ、次こそ一緒に買いに行こうねと言つて絵里が校門前で手を振る。絵里は駅に向かうために。わたしは家に帰るために……。それぞれのバスに乗り、学校を後にした。

マンションのロビーにある郵便受けのダイヤルを合せて扉を開け、中に入つている夕刊とダイレクトメールを取り出した。そこにはいつもと同じように不動産屋さんのチラシも何枚か折れ曲がつて混ざつていた。

至急求む、売り物件！　の大きな文字が踊る。ここを売つて一戸

建てに替わって行った同級生も何人かい。でもうちにはその心配はない、というか、わたしたち娘の教育にお金がかかるから、もう家は買えないって父さんにはつきりと言い渡されているんだ。

わたしはもちろん父さんの意見に賛成だ。ここにマシンションから出たくないもん。だって、そのわけは……。もう誰がなくてもわかるよね。ふふふ。

わたしがにやにやしながら郵便受けの扉を開めてこね、隣のおばさんがやつて来て、わたしを見た。

「ひさしごは

わたしがおばさんを見てあこがれをす。

「えつと、優花ちゃん、ひさしごは。今日せ旱いんだね」

おばさんは時々、わたしと妹の愛花を間違える。よかつた。今日はちやんと合ひ合つた。

「はい。部活がなかつたので」

「ふうん。やうなんだ。ひさしごは冷えるね。さあ、早く帰ろつ

おばさんもわたしに負けないくらいの郵便物を抱えて、一緒にエレベーターに乗り込んだ。

「わうわう、優花ちゃん。あんた、三階の吉永さんの息子と同級生だよね？」

おばさんがわたしに訊ねる。返事をするより早く、心臓がじくつと鳴つたけど、わたしは気のないそぶりでそっけなく、はいと答える。

た。

「今日ね、引越しセンターの大きいトラックがマンション内に入ってきた、吉永さんちの荷物を運び出してたの。つっこつき、出て行つたところなんだよ。優花ちゃん、聞いてた？　どこに引越ししたんだろ？　うちはあそこはあんまり付き合いがなかつたから……」

よくわからないんだけどね……。おばさんの話が尚も続いている。エレベーターが六階に停止して、おばさん、わたしの順に降りた。

十年近くも住んでると、やつぱり荷物は増えるよね……。おばさんはまだ話しこけている。おばさんは何も悪気は無いんだと思つ。ただ、今日見たことを話しているだけ。わたしが吉永君と同級生だから、知らせてくれてるだけ……。

でも。

わたしはおばさんこ、さよならの挨拶もしないでそのままマンションの廊下を駆け出し、家の玄関に飛び込んだ。すると同時に中から愛花が飛び出して来る。

「お姉ちゃん！　大変だよ。真澄ちゃんち、引越しですよー。わつあ、トラックが荷物いっぱい積んで出でつた」

中学校のテスト週間は高校よりずっと早い。そういうえば来週から期末テストだつて言つてたつ……。

わたしは自分が走つて玄関に駆け込んだことなんかとつぐに忘れてその場に立ち竦み、ただ呆然と愛花の口元だけを見ていた。

真澄ちやんが、引越しですよー！

愛花の呟ぶつくな声が、何度も心の中で繰り返される。

ますみちやんが……。ひつこ……。

わたしは足元にカバンをゴトンと置くと、瞬時に踵を返し、もう一度廊下に出る。そしてそのまま、あいつたけのスピードを出して階段を駆け下りていった。

その間もずっと、耳鳴りのよつて、さつきの愛花の声が繰り返し鳴り響く。

そんなはずはない。吉永君が、黙つて引っ越すなんてこと、あるはずがない。わたしは自分自身に何度もそう言い聞かせ、先を急ぐ。三階に差し掛かった時、わたしはためらうことなく、吉永君の家の前に向かつて走つた。表札はまだかかつたままだ。よしながとローマ字で綴られた表札。わたしが一番に覚えたローマ字はYとO。吉永のよの文字だった。小学生の頃、何度も鳴らしたインターホンに何年ぶりかに指をあてがつた。

一度、一度、三度。何度押しても一緒だ。中からは何の返事もない。玄関前のポーチに置いてあつた彼の自転車も見当たらない。おばさんが育てていた鉢植えも、もうどこにもなかつた。

わたしはまだ何も信じられずに、玄関扉を凝視したままそこに立ちすくんでいた。わたしの後ろを通りの住人らしき人が、怪訝そうにこっちを見ている。グローブを持った小学生も、不審者を見るような探るような目つきでわたしの顔を見て、目が合つたとたん、逃げ出すようにその場からいなくなつた。

居たたまれなくなつたわたしは、時折振り返りながらも、しぶしぶ吉永君の家を後にした。

階段を降り、マンションの前の道路に出る。引越しセンターのトラックはどうちの方向に行つたのだろう。もしも、おじいさんのいる長野に向かつたのだとしたら、高速道路のゲートがある右手に行

つたのかもしない。当然、その方向を見たところで、トラックがその辺りにいるはずも無く。わたしは途方に暮れたまま、ひたすら車の流れを目で追っていた。

そうだ！ 駐車場に行ってみよう。わたしは咄嗟の自分の思いつきに、急に目の前が明るく開けたように感じた。もし吉永君が帰つてきているのなら、おじさんの車が停まっているかもしない。そういう思ひだけで、自然と足取りも軽やかになる。

わたしは、マンション裏手にある吉永君の駐車場に向かつた。確かに、五十六番の数字が書かれたスペースが吉永家の駐車場だつたはず。シルバー・メタリックのワゴン車がおじさんの車だ。

アスファルトに直接書かれた数字は、遠くからもはっきりと見える。五十六番の数字がそこに車がない事をこれ見よがしに知らせるように、わたしの目にダイレクトに飛び込んできた。

吉永君の家族も、もうすでにここにはいないんだと納得するや否や、わたしはこの目の前の現実が嘘偽りのない真実なのだと、ようやく理解し始めた。吉永君は、本当にどこかに行つてしまつたのだ。隣のおばさんが言ったように、そして、愛花が叫んだように……。

わたしはいつの間にか歩き始めていた。行くあても無く、ただ車の行き交う道路の脇をとぼとぼと歩く。

秋の終わりを告げる風は思いのほか冷たくて、制服の胸元の隙間をぴゅうっと冷気が通り抜けていった。

さぶ……。

わたしは、吹きすさぶ風に首をすくめ、ぶるつと身震いをした。露わになつた肌の部分に容赦なく風が吹きつける。その時、目に何かが入つたような微かすかな違和感を覚えた。

すると、それを待つていたかのよつて、わたしの田から次々と涙が零れ落ちるのだ。

やつぱつじみでも入ったのかな？ 手の甲でこすりてみると、涙は一向に止まなくて。もう痛みはない。すでに、じみは流れ落ちているはずなのに……。

あふれ出す涙を止める方法もわからないまま、立ち止まつては涙を拭い、また歩き始めるといつのを何度も繰り返す。

そう。これは、風のせい。涙が零れ落ちるのは、田じみが入ったせい。涙の言い訳をあれこれ考えながら、尚も、歩き続ける。

最初は、涙が勝手に流れ落ちるだけだったのに、それだけでは説明のつかない自分の異変にふと我に返る。それはまるで小さい子どもが母親の手を引っ張つていやだいやだとぐずるよつて、いつのまにかしゃぐりあげて、声を出して泣いている自分がそこにはいるのだ。

すれ違つ人が、振り返る。信号待ちをしている車の窓からも見知らぬ人の視線が注がれる。

もうそんなこと、どうでもよかつた。誰に見られてもいい。何を言わてもいい。わたしは、わたしは、ただ……。

吉永君に……会いたい。彼に会いたいだけ。

わたしは何度も何度も、彼の名前を呼んでいた。真澄ちゃん、真澄ちゃんと、その名をただひたすら繰り返し呼び続ける。

今すぐに、会いたい……。会いたいよ。真澄ちゃん、どこにいる

の？返事して。

いくら呼んでも、彼の返事が聞こえるはずなどなく。わたしの声は、そのまま北風に乗って、車のエンジン音に次々とかき消されていく。

なんで、帰つてきてくれないの？ どうして、何も連絡してくれないの？ わたしが、真澄ちゃんの彼女じゃないから？ わたしのことなんて、もうどうでもいいから？

いやだ。そんなのいやだ。絶対にいやだよ。わたしは力いっぱい、首を横に振った。

吉永君の声が聞きたい。わたしのことを優しくゆうつて呼ぶ声を……もう一度聞きたい。それだけなのに。わたしの願いは、たつたそれだけなのに……。

今、どこにいるの？ 何してるの？ 引越ししたつて本当？ おじさんの具合は？ また会えるよね……？ こんなにもいっぱいいろんなことが知りたいのに、わたしにはそれを聞くすべがない。

吉永君のメールアドレスも携帯番号も、すでに消去したわたしには、彼と連絡を取ることすら叶わないのだ。

いたなにも、どうしようもないくらい彼のことが好きなのに。あきらめることなんて出来ないってとっくにわかっていたのに。

麻美にいい友達だと思われたくて、偽善ぶつてた自分に返つてきた答えがこれだつたんだ。何もかも、もう遅かつたんだよね。あつと……。

真澄ちやん。ねえ、お願い。わたしに連絡してきて。電話でも、メールでも、何でもいいから。さよなら、の一言でも……いいから。

わたしは、手のひらで、指先で、そして制服の袖口で、とめどなく流れる涙を拭いながら、祈るような気持ちで携帯を取り出し、未登録番号の着信拒否を解除した。無駄だとわかつていても、吉永君の連絡が受け取れるようになつた。

そしてふと顔を上げると、田の前に以前見た景色が広がっていることに、今更ながら気付く。いつの間にか、こんなところまで来ていたんだ。

公園だ。涙で滲んだその公園の風景は、間違いなく吉永君が長野に行く日の夕方に一緒に行つたあの公園だつた。

誰もいない公園の片隅にあの日と同じベンチがある。吉永君と座つたあのベンチに、わたしは一人、そつと腰を下ろした。

まだ無言のまま何も語らない携帯を両手でぎゅっと握り締めながら。

どれくらいそうやって公園にいたのだろう。着いた時はあんなに明るかつたのに、もう辺りは真っ暗だ。公園内の街灯なんて気休め程度にしかならない。

木の枝がかさつと揺れるたび、何かがそこにいるような気配がして落ち着かない。携帯を握り締めていた手は、いつのまにか氷のように冷えて、皮膚の感覚がなくなっていた。

わたしは一向に鳴らない携帯を、じつと見つめる。そして画面を開き、麻美の電話番号を表示させた。最後の手段だ。麻美にだけは絶対に聞けないと思っていたけれど、これしか方法が思い浮かばない。

マンションの人吉永君ちが引っ越したって聞いたんだけど……と遠まわしに訊ねてみよう。麻美ならきっと知ってるはず。

わたしは、まだ止まらない涙を冷たい指先でぬぐい、通話ボタンを押した。何度かコールした後、お決まりのメッセージが流れる。電源を切つてるのだろうか。もう一度かけてみたけれど、やっぱり通じない。

鼻の奥がつんとしてくる。また涙がこぼれそう。麻美、お願ひ。電話に出て……。

何度やっても同じ。とうとう麻美とのコンタクトをあきらめたわたしは、今度はすがるような気持ちで絵里に電話をかけていた。

『はーい、あたし。優花? なんか用?』

絵里の明るい声が耳にしつかりと畳く。誰もいない公園に姿の見えない仲間が増えたみたいだ。絵里、わたし、わたしね……。

『ちよつと優花？ 聞いてる？ ビーフしたの？ ……ねえ、返事してよ』

絵里の声がなつかしくて、耳に心地よくて……。返事をしつと思つただけど、ちよつとも重にならなくて。

『優花、いるんでしょう？ 何かあつた？ ねえ、なんとか言つて』  
「…………えり。…………あのね、わたし…………。うつ…………」  
『優花？ 泣いてるの？ ねえ、ビーフしたの？ また変なヤツに絡まれてる？』

「えり、じめ…………ん。そういうじゃないの。ちがうの。あのね、あの……ね。吉永君がね…………」

『吉永がどうしたの？』  
「いなくなつたの。どこかに行つたの。荷物を全部運び出して、家にも誰もいなくて、車もなくて、それに、それに、自転車もない……」

「……」

何もかも、なくなつてた。あつたのは表札だけ。

『今、どこへ？ そこ家じゃないでしょ？ 場所は？ あたし今わ、アネキとそのカレシも一緒なの』

絵里に問われるがまま、隣にある小学校名を云え、その向かいの公園にいると答えた。

『わかった。すぐに行くから、そこ、動かないで』 と言つて絵里

が Pruitt と電話を切る。

大変だ。絵里がここに来てしまつ。わたしつたらなんてことしちやつたんだる。せつかく絵里がお姉さんとそのカレシと楽しく過ごしてゐるところだつたのに。こんな風に泣きながら電話したら、誰だつて心配するに決まつてゐる。

わたしはポケットからハンカチを出して、涙を拭つた。いくら絵里にでも、こんなひどい顔は見せられない。

そして今だけ、吉永君のことは忘れよう、楽しいことだけ考えて絵里を待とうとわざと作り笑いを浮かべて気持ちを奮い立たせる。涙が何度も伝つた後がごわごわして、頬のあちこちが突つ張る。瞼だつて重い。この暗闇だけが救いだ。これなら、絵里にもはつきりと見えないだらう。

わたしは髪を手櫛で整え、ベンチから立ち上がり、道路の方に向かつた。

車のライトが近付いてくる。次第にスピードを落とし、白いセダンがわたしの前で止まつた。後ろのシートから絵里がするりと降りてきた。

「優花。どうしたのよ。もう少い

絵里がいつも甘いコロンの香りを纏いながら、わたしに抱きついてきた。

車が軽くクラクションを鳴らし、わたし達から遠ざかっていく。

せつかく、もう泣かないつて決めてたのに、絵里の姿を見たとたん、もう決心が崩れ去る。わたしは絵里の腕の中で、崩れるよ

うに泣き続けた。とても日本語とは思えないようなどぎめどぎめのわたしの説明を、絵里はうんうんと優しく聞いてくれた。

人間の涙つてどれくらいあるんだろうて思えるくらい、泣いた。泣いても泣いても次々にあふれてきて、枯れることはない。

絵里に体を半分預けるよつとして、家に向かって歩き始めた。その間、絵里はずつと携帯片手に麻美に連絡を取つてゐるけど、やつぱり繋がらない。

「ねえ、優花。麻美はきっと何か知つてるよ。今日は繋がらないけど、明日、学校に行けばわかるつて」

「うん」

「それにせ、いへり荷物を運び出したからつて、引越しだとは限らないし」

わたしは絵里の話に耳を傾ける。荷物を運び出すイコール引越しだと思つてたけど、違つの？

「だつて、学校の誰もそんなこと言つてなかつたでしょ？ それにもし引っ越しすなら一応彼女である麻美が知つてるはずじゃない？ そんなそぶりあつとも見せなかつたしね。そつだ！」

何か聞いたの？ 絵里がポンと手を打つた。

「もしかしたら……。おじさんとおばさんだけどこかに引っ越ししたのかかもしれないけど、吉永は近くの親戚の家から学校に通つてのはどうづく。」

そんな都合のいい話があるのだろうか？ 絵里の突飛な発想のお

かげで、涙はすっかり止まつたけれど、世の中をつましくはいかないと思つ。

「あつとねうだよ。何もトラックが荷物を運んだからつて、吉永まで一緒にどこかにいつてしまふとは限らないと思つんだ。その証拠に、誰も吉永が引っ越したなんて言わないし、優花に何も連絡してこないんだよ。ね？」

絵里がわたしを見てにっこり笑う。そう言われればそんな気もある。わたしはさつきまであんなに大声をだして泣きわめいていた自分が急に恥ずかしくなつた。連絡がないことが、何も心配いらないつて証拠。そう思えばいいんだね？

絵里、ありがと。絵里が来てくれてよかつた。マンションの下に着いた時には、少し希望の光が見えたような気がした。

わたしのためにこんなところまで駆けつけてくれた絵里を、このまま帰すわけにはいかない。せめて夕飯だけでも一緒にと誘つてみた。でも絵里はぶんぶんと首を横に振る。

「優花、ありがと。でも、今夜はやめとく。だつて、アネキがカレシをうちに連れて来るので言つてたからさ。あたしも顔出しあなきやね。だから優花はゆっくり休んで。そして、明日、麻美に詳しく聞いてみよう。じゃあね、ばいばい」

制服のチェックのスカートを揺らしながら、絵里がくるりと反転し走り出す。

「え、絵里！ 待つて。バスで帰るの？」

「うん。大丈夫だつて。高校までもどれば、その先は定期もあるし

「じゃあ、バス停まで送つてくれ

「いいつて。すぐそこだし……つて。あそこにお出ましのは、もしかして鳴崎？」

絵里の視線の先には、カバンを肩に担ぐようにしてマンショングンから出てきた勇人君の姿が……。

「あれ？ ゆうちゃん？ それに……ほ、本城さん」「悪かったわね、あたしで」「そ、そんなことないよ。とんでもないです……」

絵里の姿に怯える勇人君。あれ？ この一人つて、いつのまにかこんな力関係になつてたんだ。勇人君は、マジで絵里のこと、怖がつてゐる。前の麻美のことがあるから、絵里には頭が上がらないんだね。

絵里に愛想笑いをした後、突然真顔になつた勇人君が、わたしに詰め寄つてきた。

「それよりゆうちゃん。ホント、びっくりしたよなあ。俺も今日あいつから電話で聞いたんだけど……。あれ？ もしかして、知らない？ 真澄のこと？」

勇人君……。何か、知つてゐるんだね。わたしは唇を噛み締めて、勇人君の顔をじつと見つめた。

「あいつ、黙つて行つちまうもんだから、またか転校するなんて思つてもみなかつたんだよ」

「転校……するんだ」

心臓が急にドクドクと鼓動を早める。身体が少し揺らいだ。

「優花、大丈夫?」

絵里がすかさず腕をとつて、支えてくれた。一瞬何事かと目を見開いた勇人君が、一呼吸おいて話を続ける。

「俺達を、ちよつとまえにやり合つただる? それもあつて、しばらくはお互ひ無視してたんだけどね。エレベーターで顔を合わせた時なんて、そりゃあもう、最悪だつたよ。そしたら、長野に行く前日だつたかな。あいつから折れてきて、今生の別れみたいなことを言い出すからおかしいなとは思つてたんだ。なら、案の定……。長野のおじいさんとおじいさんが寝たきりになつて、向こうに家族で住むことになつたつて今日突然電話がかかってきて」

「おじいさん、寝たきりなんだ……」

「どうなるのかな? おじいさん。また元気になるといいのにな。吉永君もきっと心配してるよね……。なのにわたしつたら、自分のことで精一杯で、黙つて引つ越した吉永君を責めるばかりだつたんじゃないかつて、胸が痛む。」

「ああ。おじいさん、かなり悪いみたいだ。真澄のお父さんはこつちの仕事の関係で向こうに行くのを渋つてたみたいだけどな。でも、

ぶどう園のこともあるし、仕方なかつたんだと思つよ。そりそり、  
新しい高校も決まつたらしいぞ……。お、おい。ゆうちゃん? どう  
したんだよ」

「あんたつて人は、なんでそんなに鈍感なんだろ。自分でって、マ  
ニに恋してるんならわかるでしょ? 優花の気持ち」

ついに涙が堪えきれなくなつて泣き出したわたしをかばうよつて  
絵里が勇人君に詰め寄る。

「ゆうちゃんの気持ち? あ、ああ……。それならわかつてるつも  
りだよ。でも隠しておけることじやないし、ゆうちゃんだつて知つ  
ておく必要があるだろ?」

「だからつて、何もそんなにストレートに言わなくたつて。今日だ  
つて、何の前触れもなく急に吉永んちが引越ししちゃうから……。  
優花がどれだけショックを受けたかわかつてんの?」

「本城さん……」

今にも掴みかからんばかりの絵里の剣幕に、勇人君がじりじりと  
後ずさりする。

「絵里。もう、いいつて。わたしは平氣だつて」

わたしはあわてて絵里の腕を引き寄せた。そりそりでめそめ  
そ泣いてる場合じやない。絵里に迷惑をかけたうえに、勇人君にま  
で氣を遣わせたら、今度はわたしが最低最悪人間になつてしまつ。

「勇人君、ありがと。わたしもなんだかおかしいなつて思つてたん  
だ。今の勇人君の話を聞いたら、全部納得したよ。吉永君、きっと  
前から引越しのことわかつてたんだと思う。でも、わたし達まわり  
のみんなを驚かせたくなくて、何も言わなかつたんだね」

「違う。それは違うと思つた」

勇人君の思わぬ否定にて、絵里が再び彼を睨みつける。余計なこと言わないでよって、絵里の目が訴えている。

「本城さん、安心して。俺はゆうぢやんの味方だから」

勇人君が、絵里に向かつて手を組めた。絵里の表情が、ほんの少し和らいだように見える。

「あいつ、自分が辛いから言えなかつたんだよ。本当は行きたくなかつたんだろうな、向こうに。ゆうぢやん、最後のチャンスだよ。来週、こっちに帰つてきて、学校の転校手続きをするつて言つてた。大園のことは気にせず、おまえの気持ちをぢやんと伝えた方がいいと思うよ。あいつバカだから、ゆうぢやんに言つてもらわないと、自分の本心に気付かないんだよ」

「は、勇人君つたら……。でもね、わたしそうするつもりだつたの。ぢやんと気持ちを伝えようつて、思つてるから」

「よし！ いいぞ、ゆうぢやん！ ああ、俺が堂々とおまえ達を応援できたらよかつたんだけどな。一発くらいい殴つてやれば真澄の目も醒めるんだろうけど。それをやつぢやうと、あいつと大園を無理やり引き離すことになるだろ？ そりやあ、俺だつて、一日でも早くあいつらの仲を引き裂いてやりたいけど。これ以上、大園を傷付けたくないし、男としても卑怯な手は使いたくないから……。ゆうぢやん、ごめん。力になれなくて」

「勇人君……。ありがと。そして絵里もありがと。わたしはもう全然大丈夫だから。氣をつけて帰つてね。そうだ！ 勇人君、駅まで行くんでしょ？」

「ただけど？ あつ、もしかして本城さんもバス？」

「うん。絵里は途中で乗り換えるけど、そこまで一緒に帰つてもら

える？

「俺は別にいいけど……。でも、本城さんが……」

急激に勇人君のテンションが下がっていくのがわかる。

「あ、あたしだって、別にいいけど。つていうかさ、送つてもらわなくとも、平気なんだけど。別に鳴崎がいてもいなくても一緒にしよ？」

「それ、ちょっとカチンときた。そんな風に言わると、何が何でも送りたくなるね。何でキミはいつも怒つてるんだろ。こんな人がゆうぢやんや大園と友達つてのがまずは信じられないよ」

「鳴崎、あんた結構いい度胸してるわね。憶えておきなさいよ、いわね

「わね」

絵里の綺麗な横顔が、ツンと上を向く。

「はん！ 俺だって、男つてとこ見せてやる。おまえみたいなあつかましい女、初めてだ」「なによ！」「なんだと！」

仲がいいのか悪いのかわからないけど、結局あの一人、わたしが手を振つてるとも気付かないまま、ずっとああやつて言い合ひをしながら、バス停に向かつて歩いて行つた。

いつのまにか涙も乾き、心が随分軽くなつていてるのに気付く。あの一人に会つたおかげで、わたしが泣いていたことなんて、ちっぽけなことに思えるようになつた。

もつちよつとだけ、待つてみよう。吉永君が学校に来るその日ま

で待つてこよつと心の中をさうとつぶやいた。

次の日、学校ではすでに吉永君の引越しの話が話題になっていた。何人の同級生や陸上部の先輩が同じマンションにいるので、噂が広まるのもすこぶる速い。

そんな中、絵里が浮かない顔をしてわたしに囁つた。

「マミや、今日、学校に来てないんだよね。携帯も繋がらないままなんだ。放課後、家に一日帰つてから、大園医院に寄つてみようと思つんだ。もし、具合悪そうだったら、明日優花も一緒にお見舞いに行かない?」

「うん。行く。それにしても、マミ、どうしたんだろうね。風邪かな? それとも、吉永君のことでの落ち込んでいるのかな……」

片想いのわたしですり、タベはあんなに取り乱したんだもの。彼女である麻美ならば、もつとショックを受けていて当然だ。でも、もうわたしは偽善者になるのは辞めたんだし、口先だけの励ましの言葉はかえつて迷惑なんじやないかと思つ。ならば……。

「優花。やっぱ、優花は行かない方がいいかも。だって、吉永に告白するんでしょう? もしマミが吉永がらみで臥せつてるのだとしたら、優花とマミはライバル同士だもの。会うのは不自然だよ

絵里の囁つとおつだ。麻美には会わないほうがいいのかもしねない。

「やつする。マミのこと心配だけ、行くのは辞める」  
「マミはあたしの方からうつまく囁つとく。それにしても、吉永。

いつ来るんだろうね

「来週つて言つてたよね。今日は木曜日だから、早ければ四日後。

遅ければ、一週間以上だよ。……早く会いたいな」

「ふふふ。優花つてば、なんか変わったよね。そんなに吉永のこと

が好きならば、もつと早く打ち明けてくれてたら良かつたのに……」

「こらつ！ 本城。自分の席に着けーい

ホームルームのために担任が教室に入ってきたのだ。絵里はペロ

ツと舌を出して肩をすくめ、わたしの前から瞬時に消え去った。

「えーっと。吉永のことなんだが

担任の先生の張りのあるテナーボイスが教室中に響き渡った。

### 37・時が止まるその瞬間

「えー、吉永は、家庭の事情で転校することになった

一瞬ざわついたものの、予想していたとおりだったのだろう。誰も先生を問い合わせたりしなかった。それを意外に思ったのか、先生が首を捻りながら、教室内の一人一人を見渡す。

「おまえら、知つてたのか？　いや、あまりにも反応が薄いから……。正直、これを言つたら泣き出す女子がいるんじゃないかと心配していたんだがな」

そう言つて、苦笑いを浮かべる。泣き出す女子か……。そつと周りを見渡すと、何人かの目が赤くなっているが見えた。……見なきやよかつた。わたしまで胸がきりきりしてきて、目頭が熱くなつてくるし。

「欠席連絡の時にお母さんからあらましは聞いていたんだが、本人の希望もあつて、今まで公言するのを控えていた。で……。明日、午後から学校に来るそうだ。みんなにあいさつがしたいと言つている。まあ、ここは小学校じゃないからな。お別れ会を開く予定はないが、はなむけの言葉くらい用意しておけ。あいつ、部活も勉強もがんばつてたからな。先生も吉永がいなくなるのは寂しいと思つてる」

とたんにみんなが神妙な面持ちになる。鼻をすする音も聞こえてくる。わたしは絶対に泣くまいと歯を食いしばった。

各委員からの連絡事項のあと、ホームルームが呆氣なく終わりを

告げる。何人かの男子が先生の周りに集まっていたけれど、わたしは絵里と一緒にすぐに教室を出た。

「優花、よかつたじやん。明日、会えるんだよ。吉永と

言葉とは裏腹に、絵里の表情は冴えない。

「うん。でも……」

「何、弱気になってるのよ。そりゃあね、あたしだってせつときは泣きそうだつたよ。別に吉永が好きとか嫌いとかそんなんじゃなくても、涙がじわーって溢れそうになつたもん。先生だつて、マジで寂しそうだつたしね。でもさ、今はメールだつてあるんだしさ、離れ離れになつても心は繋がつていられるつて。ね？」

「そうだけど……。わたしちゃんと言えるかな？ 吉永君の顔を見たら、何も言えなくなるんじやないかつて不安なの。それに、こんな突然の告白、彼にとつて迷惑じやないかつて」

「またそんなこと言つてる。ダメダメ。優花、自信持つて。迷惑なわけないじやない。あたしが吉永だつたら、大歓迎よ。ウエルカム、カモーンつて手をこまねいちゃつ」

「ふふふ……絵里つたら」

絵里が手のひらを上に向かって、小指から順番にぱりぱりと折り曲げていく。

「明日のために、今夜はお肌の手入れがんばるのよ。お母さんの美肌パック、借りちゃいなよ。さて、そろそろ行くとするか。マミのことはあたしにまかせてね。じゃあね、また明日」

絵里が元気よく手を振る。わたしも負けずに大きく手を伸ばして

振り返した。

エレベーターの前にある鏡に映して制服のリボンの位置を確かめる。これでよし！ 一学期になつて一番の出来だ。両方の膨らみがほぼ同じで、歪みもない。もしかして完璧かも。

昨晩は思ったよりよく眠れた。絵里の言いつけは守らなかつたけど……つていうか、母さんに聞いたらパックは持つてないって言うんだもん。仕方なく、乳液をいつもより多めにパタパタと叩き込んでおいた。

それと……。グロスを薄く、唇に延ばしてみた。恥ずかしかつたけど、これくらいなら先生にも咎められないよね。わたしははやる胸を抑えて、上から降りてきたエレベーターに乗り込んだ。

「よお！ ゆうちゃん、おはよー」

「勇人君！ お、おはよ……」

「なんでそんなに驚くんだよ。なんか俺、犯罪者みたいじやん」

ついさつきまで、鏡を見ながら夢見ごこちだつた分、勇人君に心中まで見透かされたような気がして、ぎこちなくなつてしまつた。

「ごめんね、勇人君。

「ゆうちゃんも、昨日聞いたろ？ おまえのクラスの担任、言つたらしへんな。真澄のこと」

「う、うん。聞いた」

「あいつ、今日の朝、車で向こうつを経つそつだ。今じる、高速じゃないのかな」

「そつなんだ……。ねえ、勇人君。なんか、吉永君に会つの、すつ

「じく久しぶりな感じがする」

「俺だつてそうだよ。ものじるじついた頃から、あいつとはずっと一緒にだつたしな。いふとつとおしいけど、いないと何か物足りないんだよな」

勇人君が顎に手を掛け、エレベーターの天井を見上げながら言った。

「なあゆうひやん。冬休みに、長野に押し掛けないか？　いや、ちよつと待てよ。おまえと一人つきりで行くつてこのも世間体が悪いから……。本城も誘えば？」

「絵里も？　やだ、勇人君。本当はマミの方がいいんじゃないの？」  
「もちろん、そうできればいいけど……。でも、考えても見りよ。あいつのところに、なんで大園を連れて行かなきやならないんだよ。そんな余計なお膳立てはしたくないからね。これを機会に、大園には真澄のことをきれこなつぱり忘れてもいいつもりだから」

そつか。そうだよね。いつも明るく振舞つてる勇人君だけど、吉永君は恋敵でもあるわけだし。でも男の子の友情つて、こんなにも強い物なのがなつて、見てて羨ましくなる。

どんなに憎まれ口をたたこうとも、勇人君は吉永君を貶めたりはしない。わたしと麻美もそんな風になれるのだろうか……。

「それと、真澄んちの三階。売らないつて。賃貸に出すからしいや。将来、こつちに戻つてくることがあつたら、またここに住むつて」

わたしは勇人君の思わぬ話に、立ち止まつてしまつた。

「おこ、ゆうひやん。一階だよ。降りるよ」

閉まりかけるエレベーターの扉をもう一度開けて、慌ててホールに出る。

引越しと同時にここを売り払うとばかり思っていたわたしは、意外な展開に胸が高鳴る。ということは、将来またここに帰つてくる可能性があるということだ。

わたしはますます心が軽くなつていいくのを感じていた。

勇人君の思いがけない情報は、わたしにひとやかな幸せと勇気を運んできてくれた。今日、吉永君に会つたら……。絶対に好きだつて言える。そんな気がしてきた。本人も気付かないうちに、ためらいがちだつたわたしの背中を押してくれた勇人君は、きよとんとした目をしてこっちを見ている。

「勇人君つていい人だよ。ホントに大好きだよ……。あつ、でもね、これは絶対に言葉にはしないからね。」

だつて、前に勇人君に言われたよね。誤解をまねくようなことは口にするなつて。へへへ、わたしも少しは大人になつたかな。

その後勇人君は、クラスの友達と合流してバスに乗つた。わたしは一人、空いている後ろの座席に座り、グロスが取れていなかそつと鏡を覗き込んだ。

こんなに緊張する授業は生まれて初めてだと思うくらい、身体が力チ力チになつていて。五時間目もドキドキしたけど、六時間目の今は、身体中が心臓になつたみたいに、バクバク脈打つていて。斜め後ろの席には……吉永君がいる。教科書をめくる音。ノートにペンを走らせる音。どれが吉永君の音なのか、はつきりとわかる。久しぶりに見る制服姿で、吉永君がいつもの席に座つているのだ。

昼休みが終わる頃教室の後ろの戸が開き、みんなのざよめきと共に

に、彼が普段あまり見せないような照れた笑顔を浮かべて、教室に入つて來た。

でも……。その笑顔。前に見たことがあるつてそう思つた。わたしを広川君から助けてくれたあの日。バスター・ミナルで見た、あの笑顔だ。

そして次の瞬間、わたしと目が合つた。笑顔が止まる。空氣も止まる。周りの声も、風も、時間も。

すべてが止まつた。

でもそれは、ほんのわずかの間の出来事。吉永、久しぶりじゃん！ といつクラスメイトの第一声で、瞬時に打ち消されてしまった。

チャイムが鳴り六時間目の授業が終わると吉永君が立ち上がり、お世話になりましたと化学の先生に頭を下げる。先生がそばに寄ってきて、吉永君の背中を豪快に叩いた。向こうでもがんばれよと言つて。

クラスのどの顔も、まだみんな笑顔のままだ。わたしも笑つている。みんなと一緒に笑つている。

でも心中では、泣いていた。だって、今日で最後なんだよ。吉永君がこの教室にいるのも、そして一年五組のクラスメイトなのも……。この一瞬一瞬が大切で、愛しくて、一生このままで時が止まればいいのにと、本気でそう思った。

ホームルームが始まつて、吉永君がみんなの前でいさつをしている時も、クラスメイトがおもしろおかしく次々に別れの言葉を並べている時も、わたしはただひたすら下を向いて、机の木の模様をじっと眺めていた。

絶対に泣かないつて決めたから。最後まで笑顔で見送りうつそう決めていたから。

でも吉永君の声は一字一句聞き漏らさなかつた。わたしの心にしつかりと刻み付けていつた。

絵里が吉永君を呼び止めてくれて、図書室の裏手のベンチで告白

することになつていい。受け入れてもらえないでいい。」この気持ちをわかつてもらえるだけでいいと思つてゐる。もう一度アドレスを訊いて、メールのやり取りだけでもして欲しいとお願ひするつもりだ。

ホームルームが終わつても、吉永君はまだ男子に囲まれていた。違うクラスからも部活仲間や中学の同級生たちが集まつてきて、教室が人で溢れかえる。

そろそろ行くよと立ち上がる吉永君にすかさず絵里がアタックを開始した。

「吉永。ちょっと待つて」

わたしは先に廊下に出て、さつと絵里の様子を田で追つていた。

「なに？ 本城」  
「今から少し時間ある？」  
「ああ。少しなら」「じゃつ、この後、図書室裏手の……」  
「ベンチ？」

吉永君がその瞬間わたしを見て、ベンチと言つた。もしかして気付かれてる？ 一人が並んで廊下に出てくる。

「そう。ちょっとだけ話したいことがあって」「本城が？」「あたじじやないわよ」

絵里の段取りどおりにスムーズにやり取りが進んでいる。いくら決心したと言つても、やっぱりドキドキは收まらない。足まで震え

出す。麻美が欠席している時に、ぬけがけみたいでズルいかなとは思つけど、今日しかないのだ。

昨日絵里が麻美の家に様子を見に行つたら、風邪で寝込んでいるからと家に人に追い返されたらしい。絵里が困惑しながらそう教えてくれた。

麻美だけでなくわたしにも心を碎いてくれている絵里に報いるためにも、しつかりと目的を遂げようと、決意も新たに深く息を吸い込む。

「誰なんだ？」

「ふふふ。それはお楽しみ、つていうか、吉永はもつわかつてるんじゃないの？」

吉永君がまたわたしを見る。恥ずかしさのあまり、目を伏せたその時だった。

「真澄君」

聞き覚えのあるその声にわたしはふと顔を上げる。廊下の向こうから駆け寄つてくるのは麻美？ なんで？ 今日も欠席だったはずじゃ……。

「真澄君……。なんで、黙つて行つちゃつたの？ メールしても返事もくれないし。あたしたち、終わつたの？」

麻美のただならぬ様子に、廊下を歩いている人たちまでもが振り向く。絵里もわたしも何も言えずにただ傍観していることしか出来ない。

「大園……」

「あたしがどんな気持ちで今までいたか、真澄君にわかる？ 長野にしばりへりて言つてただけで、転校するとは聞いてなかつた」

「誰にも言つてないよ。勇人以外には」

「そんなのいや。鳴崎に言つて、なんであたしこは言えないの？ 優花にも……言つてない？」

いつも麻美とは到底思えない怯えたようなうつろな瞳がわたしを捉える。どうしてわたしなの？ 麻美、わたしも知らなかつたんだよ。勇人君に聞くまでは。

「言つてない」

吉永君が伏田がちにわたしを見てそつ答える。

「真澄君、お願ひ。わたしの最後のわがままを聞いて。……今日で。今日で、本当に終わりにするから。だから、わたしに見送らせて欲しいの。ね？ いいでしょ？」

「ま、マリ。いつたい、どうしたの？ 身体の具合はいいの？」

絵里がマリの両肩を押さえるよつこじて、彼女の顔をのぞき込む。

「絵里つ、放つといて！」

麻美が乱暴に絵里の腕を振り払う。

「絵里には関係ないでしょ？ 絵里は、絵里は……。あたしの気持ちなんてわからないのよ」

「マリ。ほんとどうしたつて言つの？ 変だよ。マリ、おかしい

絵里の声にてこいつをこ耳を貸さうといで、 麻美が吉永君に詰め寄つていぐ。

「お願い、 真澄君！」

麻美が吉永君の腕にしがみついた。 吉永君が何か言いたげな悲しそうな目でわたしを見る。

言わなくひや。 吉永君、 待つて。 真澄ひやん、 行かないでつて今すぐ言わないとい……。

「吉永君……」

わたしはその場で彼の名を呼んでいた。

「マリ。 マリの願いを……叶えてあげて…… お願い

わたしはさしつかたあと、 全身の力がすーっと抜けていくのを感じていた。

次回最終話になります。

本日中に最終話まで掲載予定です。  
お待たせして申し訳ありませんでした。

「優花、ほんとおれで良かったの？」

吉永君と麻美の後をついていくわけにもいかず、誰もいなくなつた教室で絵里と向かって合つて座つていた。

「なんで、あんなこと言ったの？ どうして吉永を引き止めなかつたのよ。やっぱ、吉永の首根っこ、とつ捕まへんだったよな」「でもさ、なんで吉永も優花の言つたこと、鶴呑みにしてうんだる。優花が呼び出してるんだって、絶対あいつわかつてたよ。なのに、どうしてマリのわがままを聞く？」

絵里の憤りが再び勢いを増す。

「だつて……。マリ、これで最後だつた…………。異常な騒が

そうだったもの

「それにしても、納得できない。優花も優花だけど、吉永も吉永よ

！ 吉永って、マリに何か弱みでも握られてるの？ あんなの絶対おかしいよ。なんか、マリが許せなくなつちやつた。昨日だってマリたちで門前払いだよ。おばちゃんの方があおおろしきつてさ。マリがあたしに会いたくなつて言つたんじやないかな？ せつかく行つたのに、ひこじよ。もうマリもついていけないかも」「絵里、マリのことそんな風に言つたらかわいそうだよ。マリだつてこりこり騒んでたみたいだし

絵里はまだ知らないんだ。麻美も転校が決まつたつこと。麻美はまだわたし達に自分の口からそれを告げていない。わたし達で吉永君が言つてくれなかつたらまだ知らなかつたわけだしね。麻美が行く予定の私立高校は、ここからだと姫野とは正反対の方向にある。麻美の気持ちを考えれば、さつきあそいでわたしが何でも自分の思いを押し通すなんてことは、とてもじやないけどできる状況じゃなかつた。

「優花、このままじやだめだよ。そうだ。鳴崎に吉永がいつここを経つのか訊いてみるってのはどう? あいつなら吉永のこといろいろと知つてそういうじゃない? マミがいたつて別にいいじやん。優花、そうじよつよ。ね?」

「絵里。もついいつて。今日ま、マミの願いを叶えて……」

「優花! いい加減にしなさいよ。こつだつてマミのこと、まっかり。もつ吉永と会えなくなるんだよ。優花だつて、吉永を見送る権利があるんだから!」

「そんなの、ダメだよ。だつて、だつて、マミは……」

「そう。麻美も転校しちやうなんだよ。わたし達よつ、もつと吉永君と遠い所に離れてしまつ。

「マミがなんだつて言つのよ。吉永がいなくなつても、後にはちゃんと鳴崎が控えてるんだよ。マミは幸せ者なんだから」

「違うの。マミは、マミはね。転校が決まつたつて……。来年から私学の全寮制の高校に行くことに決まつたつて……やつてた」

「あつ……」

絵里が田を見開いて、絶句する。

「だから……。本当に、これが最後だと思つかり。マミの願いを叶えてあげて欲しい……」

やつぱり絵里は知らなかつたんだ。絵里と麻美は中学の時からの親友同士。わたしが吉永君と離れ離れになると同じくらい、絵里は麻美との別れが辛いはず。そしてその親友から隠しごとをされたのはもつとショックなはずだ。

「なんでそのこと知つてるの？ マミが言つたの？ 確かに成績次第で転校するかもつてのは聞いてた。でも決まつただなんて、知らないよ……。ねえ、いつ聞いたの？ 優花、教えて」

「そ、それは……。吉永君が」

「吉永が？」

「う、うん。マミから聞いたって」

「なんなの、それ。じゃあ、マミはそれを利用したつてこと？ 吉永の気をひくために……」

絵里は、教室のどこか一点をじつと見つめた後、立ち上がつた。

「優花。ちょっと待てて。あたし、行つて来る」

「絵里、待つて！ どこに行くの？」

「すぐに連絡する。だから待つてー！」

絵里はカバンを手にすると、教室から瞬く間にいなくなつた。何をしに行つたの？ まさか麻美のところ？ わたしは何か取り返しのつかないことを言つてしまつたんじゃないだろうかとますます不安になつた。

絵里が行つてしまつてからすでに三十分くらい経つ。まだ外は明

るい。ラグビー部のストライプのコートフォームが、グラウンドをところ狭しと駆け回る。

その南側の一角で、陸上部がダッシュを始めていた。何度も何度も短い距離を繰り返し走る。途中、太ももを高く上げてその場駆け足をしたり、ストレッチを組み込みながら、ずっと同じメニューの練習が繰り返されている。

前まではそこに吉永君がいた。ストップウォッチを持つた麻美もいた。なのに今は……。その二人とも、もうそこにはない。

さつき絵里にメールを送つたけど、まだ返事はない。絵里には何か心当たりがあるのだろうか。

それにしても、いつまでここにいといけないの？ このまま教室でじっと待つてゐなんて無理だ。こんなことなら、わたしも絵里を追いかけて行けばよかつたと後悔する。

わたしだって、本当は……。吉永君を見送りたかった。彼に気付かれなくてもいい。最後の姿をこの目に焼き付けたかった。

わたしは待ちきれなくなつて学校の外に出る。もうすぐ五時。段々あたりが暗くなつてくる。十一月の日暮れは思いのほか突然に、そして早くやつてくる。

バス停のベンチに腰掛け、時折手の中の携帯を覗き見る。そして木枯らしがぴゅつと吹き抜けたその時、目の前に止まつたバスから一番に降りてきた女子高生と目が合つた。彼女が力なくわたしの名前を呼んだ。

「優花……」

本田一話の更新です。「注意下さい。」

「優花……」

「麻美……。どうして麻美がここに？ 吉永君と一緒にわたくしのそばに  
や……なかつたの？」

「優花。こんなところ、いたんだ……」

「どうか覇氣のない目をした麻美が、遠慮がちにわたくしのそばに  
つて来る。そして、わたしの前で立ち止まつた。」

「優花、『めん……』

麻美は下を向いたまま、搾り出すよつた声を出す。

「『めんね。あたし、あたし……』

その時、麻美の身体が大きく揺れた。

「どうしたの？ あ、マニア。じっかりして……」

よろけそうになる麻美を支えながら、ベンチにゆっくりと座りせ  
る。わたしは麻美の細くて冷たい手をそつと握つた。

「優花、ありがと……。さつきね、駅で絵里に会つた  
『絵里に』……」

麻美はつづるな目でわたしの顔を見ながら、じくんと頷く。

「絵里から電話があつて……。あたし、絵里にもひどいことしたの。それには、優花にも……。優花のこと、わかつてたのに。あたしつたら……」

「わかつてた？ 何がわかつてたの？」

「優花が、真澄君を好きだつてこと……」

「マハ……」

麻美のあまりにもストレートな物言いに、気の利いた返事が見つからない。だつてそれは、真実だから。

「わたし達ね、ほんとは付き合つてなんかいなかつたの」

わたしはおもわず息を呑み、麻美の顔をじつと見つめた。

「形だけの付き合い……。ただそこにいるだけの付き合い。それだけのこと。会う約束だつて、いつもあたしから。……キスしたつていうのも、嘘。あたしね、一度だけ彼にキスをねだつたの。ふふ……。おかしいでしょ？ 自分でもなんでこんなに大胆なんだろうつて、不思議だつたけどね。でも。はつきりと言われたの。無理だつて……」

わたしは、消え入りそうな麻美の声をただ黙つて聞いていた。

「さつき、絵里に聞いたよ。優花があたしのために、自分の気持ちを隠して真澄君のことを応援してくれてたつて。あたしも、優花が彼のことを好きだつてわかつてていたのに、優花の優しさに甘えて、彼を独占じようとしていたの。あたしの転校のことも、卑怯なやり方だとわかつていたけど彼に言わずにいられなくて。あたしつてかわいそうでしょ、だからこっちを見てつて……。なんて嫌なやつな

んだろ？……

麻美の頬に涙が一筋伝つた。

「マリ。わたしはマミが思うほど、優しいとかそんなんじゃない。いつもマミに嫉妬して、自分の取つた行動を後悔して……。今日だつて、もしあの時マミが現れなかつたら、マミに内緒で抜け駆けしてたかもしれない。吉永君を引き止めて、わがまま言つてたかも……。ね？ ひどいでしょう？ だから、マリはそんなに卑下しなくてもいいの」

「優花……。あのね。今、真澄君、塾の退会手続きや、おばさんに頼まれた用事をいろいろ済ませてる最中なの。それが終わつたら、新幹線で新大阪を出て名古屋で特急に乗り換えるつて言つてた」

麻美は携帯を取り出し、時刻を確認する。

「大丈夫。間に合つわ。優花、こんなことしてられない。さあ早く駅に行つて」

麻美が立ち上がりわたしを急き立てる。

「どうして？ 麻美が行くんじや……」

「最後に彼に泣きついて、電車の乗車時刻も教えてもらつたけど……。行くのはあたしじゃない。優花だよ。優花が行くべきだよ」「何言つてゐの？ 吉永君だつて、麻美に見送つて欲しいから教えただと思う。なのにわたしが行つたら、吉永君、びっくりするよ。なんでわたしなのつて」

「優花。その心配はないつて。あたしが一番ショックだつたこと、何だか知つてゐ？」

麻美の唇が震えている。吉永君に何か言われたのだらうか。そんなに辛いことなら、言わなくてもいいのに。

「「ひひん」

わたしはもうこれ以上何も言わなくていいよといつ意味もこめて、首を大きく横に振った。でも麻美は、わたしをまっすぐに見て幾筋もの涙を流しながら言つたのだ。

「一度も……呼び間違えられたの。ゆうつて。最初は誰のことかわからなかつた。でも。彼の表情を見てたら、ふと優花の顔が思い浮かんで……。ゆうつて優花のことだよね？ 違う？」と。

「そ、それは……」

「やつぱりそうなんだ。わたしは一度だつて、マリ……いや麻美つて呼ばれたことないんだ。やだ。優花つたら、なんて顔してるの？」

麻美が泣いたまくすつと笑つて、わたしを指差す。わたしは、いつたいどんな顔をしてたんだろう？ 恥ずかしくなつて、あわてて両手で頬を押さえた。

ねえ、吉永君。たとえ麻美とはかりそめの付き合ひだつたとして、自分の彼女の名前を言い間違えるなんて……。それ、最悪だから。その時の麻美のショックを思えば、胸が……痛む。

でも……。一度と呼ばれることのないその名前を、もう一度、彼の口から聞きたいと思つた。無理だとわかっていても、吉永君にゆうつて呼んでもらいたかった。

「優花、バスが来たよ。早くこれに乗つて……。真澄君によろしく

ね。いろいろありがとうって……言つてね

「アハ……」

麻美に無理やり腕を引っ張つて立たされた挙句、バスの乗り口に押し込まれる。

「六時四十分新大阪発の新幹線だから。こつもの駅を六時前に出るはず。絵里が駅にいるから、真澄君を引き止めてくれていいかも……」

麻美の声がバスのドアで閉ざされる。わたしは一番後ろの座席に座ると、立ちすくんだままの麻美の姿を視界に捉える。わたしが見ているのに気付いた麻美が、懸命に笑顔を作つて、小さく手を振つた。わたしは胸に手をあてながら、麻美ありがとうとやつとつぶやいた。

バスを降りると同時にポケットの中の携帯が震える。絵里からだ。

優花、何してるの？ 急いで！ 吉永、行っちゃったよ。早く、早く、早く！

わかつたすぐに行くと返事をした後も、携帯を耳にあてたまま絵里の誘導に従う。

麻美の言ったとおりだ。絵里が吉永君を引き止めていてくれたのだろう。

でも、行っちゃったってことは、もう時間がなくなつたってこと？

わたしはわき田も振らず、人ごみを掻き分けて駅の西改札口に向かつた。

同じように携帯を耳にした絵里が、大きく片手を振つて、じつじつと叫んでいる。

「優花、遅いよー。その顔は、マリで会えたんだね。へへへ……。あたしのおせつかにもたまには役に立つでしょ？」

絵里が首をすくめておどける。が、しかし……。

「おっと、こんなことじてる場合ぢゃないんだってばー。こんな時に信じられないんだけど、吉永ったら携帯の電源切つてるみたいでさ。一向に捕まらなくて……。これでも鳴崎と手分けして随分探しんだよ。そしたらどう？ 今ここに着いたら、吉永らしき人が改札ぐぐつて行ったの。あれは多分吉永だと思つ。これ、入場券」

絵里に入場券と書かれた切符を手渡されると、早く行きなさいと背中をぐいっと押された。

わたしは結局、何も抵抗出来ないまま人の流れに紛れるようにして改札を通り抜ける。

振り返り絵里にありがとうと言つて手を挙げた。

絵里がそんなこといいから早く行けど、ジェスチャーでわたしを追い払う。

わたしはうんと大きく頷いて、プラットホームに繋がる階段を一段抜かしで駆け上った。

あと数段というところで、停まっていたチョコレート色の特急電車の扉がアナウンスと同時に閉まる。まさかこれに吉永君が乗つてるの？

何かが挟まつたのだろうか。一度しまつた扉がまた開いて、ホームにぎりぎり辿り着いた人たちが幸運にも何人か乗り込む。そして今度こそきつちり閉まった。

わたしは大急ぎで電車の後部から前の車両に向かって、立つている人を避けながら縫うようにホームを駆けた。

見落とさないように、電車の中の人物を窓越しにしっかりと確認しながら。

知らない人がわたしの動きに気付いたのか、怪訝そうな顔をしてこつちを見る。

吉永君はまだ見つからない。いつたい、どこにいるの？  
この電車じゃないの？ 絵里が見たのは違う人？

とうとう、電車がゆっくりと動き出す。それに合せてわたしも歩くスピードを上げる。

いない。ここにもいない。次の車両にも……いない。カラフルな歌劇団の広告ばかりが目にに入る。

ホームの真ん中辺りに来た時、一旦通り過ぎた車両の窓が、わたしの目の前をゆっくりと横切つて行く。  
それはまるでスローモーションのよう、ひとつひとつ景色がくっきりと目に焼きついていった。

するとその中に、わたしを見ている視線があることに気がつく。

まさか……。いた。吉永……君。

制服姿の吉永君がこっちを見ながら、進行方向とは逆に車内を進んでいる。そしてドアのところに顔を寄せ、何かを言つた。

聞こえない。吉永君、聞こえないよ。吉永君を乗せた車両は瞬く間に遠ざかって……。

背伸びをして大きく手を振つたけど、もつ見えないよね。

追うのをあきらめたわたしは、荒くなつた息を静めるように胸を押さえて立ち止まり、電車の最後部を呆然と見送つていた。

とうとう行つてしまつた。電車が見えなくなつても、そこから田を離すことが出来ない。

もううびうびするのも出来ないのに、その場から動けなくて……。

これから先も、いつでも一緒にいたと思っていた。何の疑いもなく、そう信じた。

進む進路は違つても、家に帰ればいつでも会えるんだって、そう思つてた……。

なのに。本当にもう、行つてしまつたんだね。

最後に一言でもいいから吉永君の声が聞きたかった。  
また会えるよねつてわたしから言いたかった。ああ、会えるよつて言つて欲しかつた。

そして、そして……。あなたに。

ずっと、ずっと、そばにいて……欲しかつた。

突然震えだした手の中の携帯に、はつと我に返つた。  
もしかして絵里なの？ わたしから連絡しないといけないの、  
「めんね……。

わたしは画面を開き、送信者を確認する。

えつ……。

未登録だけじ、このアドレスは……。きっと知つている。

心臓がドクドクと騒がしく鳴り始めた。まさか、そんな……。

わたしはそのメールを何度も何度も繰り返し読んだ。そして同じホームの下り線の電車が来るのを待つた。

特急電車を一本見送つたあと、下りの普通電車がゆっくりとホー

ムに入つてくる。

メールに記してあつたとおり最後部の車両に皿を凝らす。  
サラリーマン風の人、学生、熱通いの小学生。次々と人が降りて  
くる。

一番後ろの扉から降りてきた背の高い人と皿が合つ。

うそ……。

うれでしょ？

本当に、戻つて来てくれたんだ。その人がわたしとの距離を縮めてくる。そして……。

「おまえなあ……。俺、今夜、長野に帰れなくなってしまったよ」

そう言つて、わたしの頭を片手で抱きかかえるようにして引き寄せた。

「真澄ちゃん……」

わたしは吉永君の腕の中で、彼を呼ぶのだけじ、声にならなくて。

「おまえがここに来なぐても、俺、きっと引き返してた」

吉永君がわたしの頭上でさう言つた。彼の腕を引つて、くぐもつたような声がわたしの耳に届く。

わたしは、じへじへと頷くしかできない。

本物の吉永君がここにいる。夢なんかじゃない。

彼が来る前から泣いていたのか今泣き始めたのか。それすらもわからないほど、わたしはいつのまにか顔中がぐしゃぐしゃになるくらい泣いていた。

真澄ちゃん、真澄ちゃん、何度も彼の名前を呼びながら。

「あ、もう泣くなよ。今は、今だけは……。俺は、おまえのそばにいるから……」

カバンを足元に置いた吉永君が、そう言って、今度は両腕でわたしの頭を包み込んだ。

泣き顔のままそっと吉永君を見上げた時、わたしの一番大好きな真澄ちゃんの笑顔が、いつまでもいつまでも、そこに……あつた。

E  
N  
D

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

昨日（2008／11／12）最終話の更新が終わった後、もうどこにも氣力が残っていなくて、こちらにて皆様にきちんと丁寧挨拶も出来ず、まことに申し訳ありませんでした。

この そばについて はストックも少なく、その日に書いて即更新という怒涛の日々でした。

恋愛小説といいながら、甘い場面もごくわずかで、主人公にそれほど不幸も訪れません（汗）。

にもかかわらず、連日大勢の皆様にお越し頂いて、感謝の気持ちでいっぱいです。おかげさまで小説家になろう内の恋愛部門アクセスランディングで1位を頂くことができ、感激で胸がいっぱいです。ランディングに投票して下さった皆様（投票していただくと、ランディングサイトの順位がトップページの順位に付きやすいところに表示されて読者様が増えるしくみになっています）、そして、評価・感想、メッセージを下さった皆様、ブログにも足を運んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

当初は、HPロゴも書く予定だったのですが、続きを読みたいと言つてくださる方がいらっしゃると、私もまだ書き足りない部分がありますので、構想がまとまり次第、続きを書いてもいいかな……ということで、HPロゴは控えたいと思います。

一応、本日を持ちまして完結とさせていただきますね。  
また そばについて を見かけましたらお是非ともお立ち寄りいただけますように……。

尚、そばにいては2009年4月に、アルファポリスさんのトップページにてピックアップとして紹介していただきました。

## クリスマス番外編 1・友だち以上、恋人未満（前書き）

番外編の改稿版です。

以前より少し話数も増えたので、物語の背景がわかりやすくなつたかな：と思っています。

よかつたら読んでみてくださいね。

初めての方は、是非、本編（片思い編）から読んでいただけるといいな。  
どうぞよろしくお願ひいたします。

## クリスマス番外編 1・友だち以上、恋人未満

「……ってなわけ。だ、か、ら。あれれ、優花ちゃん。どうしま  
したか？ じらひ、ゆうかひ！」

絵里がわたしの鼻のてっぺんを、だ、か、ら、と二回人差し指で  
突いた後、大声で叫んだ。

教室の後の席に集まっていた男子がぎょっとした顔をして一斉に  
こちらを向く。

それでようやく、どこかにさまよっていた意識を現実の世界に取  
り戻すのだ。

「んもうひ！ 優花つたら。もしかして、あたしが言つたこと、な  
んにも聞いてなかつた？」

絵里がすねたように口を尖らせた。

「じ、ごめん。ちょっと考え」としてたから。えっと。なんだっけ  
？」

叱られるのは覚悟で、わたしはもう一度絵里に訊ねた。

「はあ？ 全く何も聞いてなかつたの？ 優花、ねえ、そつなの？」

「うん……」

わたしはしょんぼりとつたのを垂れた。絵里には悪いが、本当に何も  
聞いてなかつたのだ。

絵里が大仰に首を振り、あーっと唸るような声を出す。

あきれてやつてられない」とでも叫びみつひ。

「じゃあ、もう一度言つからね。ちやんと聞いてよー。クリスマスプレゼント。今度の土曜日、一緒に買いに行くな話し。まさか忘れたなんて言わないよね?」

「あ……。う、うん。そつだつたね。そつそつ。思い出した。忘れるはははなによ。あは、ははは……」

「優花、あははじやないよ。しつかりしてね。大事なことなんだか」

「う

「うん。わかつてゐる。絵里、ごめんね」

「これ以上絵里の機嫌を損ねないよう、わたしはあくまでも低姿勢を貫く。

ちゃんとプレゼントを買って、クリスマスまでに長野に着くまでに送るんだよと、絵里に何度も釘を刺されていたのだ。

「ホント、あれ以来、優花はいつもこんな調子だもんね」

絵里の意味ありげな視線が今日もまたわたしの胸にチクリと突き刺さる。

「絵里つたら、またそんなこと言つてゐる。考えすぎだつて。わたしは前からずつとこんな感じだよ」

「何言つてゐるの。絶対に、あの日から優花は変わったんだつてば。誰のこと考えてんのか、あたしは知らないけど」

知らないと言つながらも、すべて知つてますよと絵里の口がはつ

「ちがうって。そ、その人のことなんか、考えてないってば」

わたしは頭をぶんぶん振り、誤解を解こうとがんばるが。所詮、ぬかに釘、のれんに腕押し。否定すればするほどむなしくなるばかりだった。

「このおーーー、幸せ者がつー。」

絵里が力任せにわたしの頬を両手ではさみこんだので、口びるがまるで鳥のくわばじのように前にぱにょっと突き出た。

「絵里つたり、恥じゅかしによ～。ほ、ほら、みゅんなが見ゆてるから。おこょがい、やみょ（お願い、やめて）」

自由にならない口を駆使して、絵里に涙目で抗議する。

「だつて、優花の目がハートマークになつてるんだもん。誰だつて、こつしたくなるつて。それにしても、まだ信じられないよね。あたしたちの中で一番そんなことには興味ありませんつて顔してた優花が、真っ先にカレシ作つちやうんだもん。あたしなんて、先輩にふられてから、ちつともいこことないし……。あと一週間で相手探せつて言う方が無理」

やつと手を離した絵里が机に肘を突いて手のひらに顔を載せ、不服そうに口をへの字に曲げた。

「絵里。ちょっと待つて。だから言つてるでしょ？……吉永君は、その。か、カレシじゃないって……」

クラスのみんなに聞かれないよつて声をひそめ、できるだけ絵里の耳元に近付いてそう言った。

絵里はあの日以来、ことあるごとにわたしと吉永君のことをネタにしてからか。

「はいはい。優花の大切な真澄ちゃんとやらは、付き合ひてもいいな。い女の子と、幼なじみつてだけで嬉しそうに手をつなぐんだよね~。こつやつてべつたりくつこてそ」

絵里が急に立ち上がり、ぐるっと回つてこひらへつて来たと思つたら。同じ椅子に無理やり半分座つて、ペとつとくつついた。わたしが吉永君を追いかけて駅に行つた日のことを、いつもそうやって冷やかして、おもしろがるのだ。

あの日、わたしと吉永君がホームを降りて改札口から出て行くと、まるで温泉旅館のスタッフの出迎えのよひ、絵里と勇人君が手をこまねいてそこで待つていた。  
ほーらね、やつぱり二人そろつて戻つて來た……と言つて、絵里は得意げに胸を張る。

その時のわたしと吉永君が、まるで恋人同士のようにべつたりと寄り添つていて、どこをどう見てもラブラブだったと絵里が言つてゐる。  
でもわたしにはちゃんとした言い訳がある。あの時は、ああするしか方法がなかつたからだつてね。

駅のホームで吉永君と会えたのが奇跡のように思えて、嬉しさの余り、その場から動けずはずっと泣いていた。

そんなわたしを放つておけなくなつた吉永君が仕方なく手を引いて、無理やり連れて降りた、というわけだ。

そうするしか選択肢がなかつたのだから、断じてラブラブでくつついていたわけではないと説明するのだが。絵里は全く信じようがない。

そして、勘違いした絵里と勇人君の一人が、邪魔しちゃ悪いよねと言つて、ニヤニヤしながらその場からいなくなつたものだから、残されたわたしが吉永君と一人だけになつて、どれだけ気まずい思いをしたか……。

絵里はその事実すら、またまたそんなこと言つちやつてと笑うばかりで、まじめに取り合つてくれないのだ。

結局その日、吉永君は名古屋発の特急電車に間に合わなくなつてしまつたので、急遽、勇人君の家に泊まることになつた。

そして次の日、これまた勇人君の陰謀でわたしが一人で吉永君を見送ることになつたのだけど、もちろん、一緒に行けるのは大阪までで。

本当は長野までついて行きたかった。いや、せめて名古屋まで一緒に行きたかった。でもそんな願いが叶うはずもなく。

次の日からはもう会えないのに。学校でも、マンションでも、絶対に会えないのに。

無情にも別れの時は、あつという間にわたしの前に訪れた。

じゃあな……と言つて、信じられないくらいあつさりと、私鉄の改札口に吉永君が吸い込まれていく。

タベとは違つて時間にゆとりがあるので、旅費の節約のため新幹線は使わない。私鉄で名古屋に向かうことになつたのだけれど。

吉永君がわたしの前からぐんぐん遠ざかっていく。大きな後姿が瞬く間に人の波に飲まれて見えなくなつた。

締め付けられるような胸の痛みを感じながら、歯を食いしばつて

涙をこらえた。

何度も瞬きをして涙を押しとどめ、絶対に泣かないぞと自分に言い聞かせる。

そして、必死の思いで笑顔を保つて手を振り続けた。  
そんなわたしの思いなど知りもしないのだろう。吉永君は結局振り返ることもなく、黙つて走つて行つてしまつたのだ。

それでよかつたのかもしれない。

もし吉永君が振り返つたならば、きっと別れるのが辛くなつて、前日と同じように泣いてしまつたに違いないもの。

そして泣いてるわたしの姿を見たら。優しい吉永君はそんなわたしを一人にできなくて、再び舞い戻り、永久に長野に戻れなくなつてしまつ。

だから。これでよかつたのだと想つことで、気持ちにふんぎりをつけたのだ。

ただし、わたしにとつて、ちょっとぴり嬉しいこともあつた。

毎日でなくともいから、メールをして欲しいと吉永君がわたしに提案したのだ。

最初は耳を疑つた。まさかあの吉永君がそんなことを言つなんて、俄かには信じられなかつたから。

今度は絶対に削除するなよといながら、アドレスや番号をわたしの携帯に送り込む。

吉永君と遠く離れていても、メールや電話でつながつていられる。わたしはこの宝物を一度と手放さないと、心に誓つた。

今まで、あんなに近くに住んでいても遠くから見つめていることしか出来なかつた吉永君が、今ではこんなにも身近に感じられるようになるなんて。いつたい誰が想像しただろつ。

あの日も、吉永君の背中が見えなくなつたとたん、すぐに彼にメールを打つていた。

昨日は戻つてくれてありがとう、気をつけて帰つてね……と。たつたそれだけのことだけど、嬉しくて天にも昇る気持だつた。

帰つてくる返事は、ああとか、うんそりだねとか、わかつたとか。本当に短いものばかりだけど、返信スピードだけは誰にも負けない。

それはもう、待ち構えて準備してたの？ って思えるくらいに素早かつた。

吉永君は自分からメールを送るのは苦手だが、読むのは好きだと言つ。

学校のことや、マンションで起つたことを知らせてくれると嬉しいと言つた。

それと、もうひとつ。首を傾げるようなリクエストをされた。吉永君には兄弟がいない。だからかどうかは知らないが、妹の愛花のことも知らせて欲しいと言つのだ。

最初にそれを聞いた時、えつ？ なんで？ と心の中が、疑問符で埋め尽くされた。

まさか、吉永君が妹の愛花のことを……？ わたしはとんでもない妄想で、心が押しつぶされそうになつた。

といふが、彼の表情やしゃべり方を見ていたら、そんな不安もすぐに吹き飛ぶ。

含み笑いをして、わたしに意味ありげな目配せをする吉永君は、あきらかに愛花の予測不可能なユニークな行動を楽しみにしているよつな態度だつたのだ。

わたしはそれくらいのことで嫉妬した自分が、恥ずかしくなつた。

吉永君と愛花が特別な関係になることなんて、絶対にあるわけがないのに。

愛花は昔から吉永君を親分のように慕い、なついていた。

野球やサッカーの仲間にも入れてもらっていたので、わたしよりずっと一緒にいる時間が長かったはずだ。

いきなり突拍子もないことをする愛花は、おもしろネタには事欠かない。石水家のムードメーカーでもある。

もう少し落ち着いて早とちり名人の汚名を返上すれば、姉より数段整った顔立ちをしている彼女のことだ。きっともてるに違いないといつも思つてゐる。

愛花の将来の夢は宇宙飛行士になることだ。

スペースシャトルに乗つて宇宙ステーションに行き、さまざまに国の人たちと一緒にエネルギーの研究がしたいと、小さい頃から口ぐせのように言つていた。

わたしは妹の夢が叶うような気がしてゐる。愛花はそんな不思議な子だ。

昨日も無重力に耐える訓練だと言つて、パソコンの前においてある事務用回転椅子に座り、勢いをつけて、超高速回転を何度もやつていた。

もちろん、回りすぎてふらふらになつていた愛花の様子をこと細かに吉永君に知らせたのは言つまでもない。

さつき絵里に話を聞いていないと言わねばばかりなのに、また吉永君のことを考えていた自分に気付き、あきれてふうっとため息を

ついた。

「どうしたの？ 今度はため息？ セツカクの幸せが逃げちゃうよ」

狭い椅子に一人で腰掛けたまま、絵里が覗き込むようにして言つた。

「ねえ、優花。吉永はクリスマスにはこっちに来るんでしょ？」  
つたら、プレゼントは直接渡した方がいいかもしないね」

絵里はわたしと吉永君の関係がもどかしくて仕方ないのか、しきりにクリスマスの過ごし方をあれこれ指図するようなことを言つ。

だから……。わたしたちはまだ、そんな関係じやないんだつてば

「ええつ？ 何？ 今、なんか言つた？」

わたしの心の中を読み取ったかのように、絵里が目をくつくつさせて訊ねる。

「あっ、いや、何でもないよ。ねえねえ絵里。吉永君は多分、クリスマスにはやと君の家に来るはずだから、その時にプレゼント……渡そうかな？」

「うん。それがいいよ。それで。そうと決まつたら、プレゼントは何がいいかな？ そうだ。あたしのアネキに訊いてみようか？ いいアイデアをゲットしたら、今夜優花にメールするね。ところで吉永は……。優花に何をプレゼントするのかな？ やっぱ、指輪かな？」

「やだ。絵里つたら、またそんなこと言つて。そんなわけ……ないよ」

絵里のとこでもなくぶつ飛んだ発想にあきれながらも、わたしは頬が熱くなるのを感じていた。

たとえ指輪でなくとも、彼からのプレゼントなら、何でも嬉しい。でも……。

彼からプレゼントをもらえる保障は何もない。

というのも、実はまだ、吉永君に好きだと告白していないのだ。あれほど告白するぞと息巻いていたのに、駅のホームで気付いた時には彼に抱きしめられていたし、あの日も、長野に帰った次の日も。

別れる瞬間まで、ずっと吉永君と手をつないでいた。

彼があまりにも近くにいすぎて、告白のタイミングが見つからなかつたところが一番の理由だ。

でも、何も言わなくとも、すでにわたしの気持ちは彼に通じていると思つてゐる。

そのこともちゃんと絵里に言つたのだが、そんな状況であるにもかかわらず、もう付き合つていても同然だと言つて譲らない。わたしのために戻つてきて、そのあとずっと手をつないでいた事実は、吉永君がわたしを恋人として捉えている証拠だとも言つ。

お互いに好きだとも、付き合おうとも言つてないのに？

絵里の強引な見解は、やはり今のわたしには納得できるものではなかつた。

彼との関係は、どのように説明すればいいのだろう。

授業開始のチャイムが鳴る。

じゃあ、またあとでねと言つて、絵里が自分の席に戻つて行く。

「友達以上、恋人未満……かな?」

わたしは立ち去る絵里の背中にに向かつて、吐息混じりに、ぼそつとつぶやいていた。

“めん。クリスマスにそつちに行けなくなつた。年が明けたら必ず行く。本当にじめん。

わたしは何度も何度も同じメールを見ていた。

昨日吉永君から届いたメールは、一気に地の底に突き落とされるような、衝撃的な内容だったのだ。

プレゼントも買ったし、あとはクリスマスを待つだけだというのに……。

吉永君の通つている公立立高校は、二十五日まで登校することになつていて。

前期後期の一学期制なので、当日は終業式という形式ばつた行事はなく、大掃除とホームルームがあるだけだと言つていた。それが終わり次第、午後にはこつちに向かう予定だつた。イブに会えないのは授業があるから仕方がないとあきらめていたけれど、まさかクリスマス当日も会えないなんて……。クリスマスを指折り数えて待つていたわたしは、ショックのあまり声も出ないほど落ち込んでしまつた。

吉永君のお父さんが急遽ぶどう園を継ぐことになつてから、いろいろと大変だというのは聞いていたけど……。ここまで忙しいとは、全く想像すらしてなかつた。

今までぶどう園のことはおじいさんに任せっきりだったので、作業に慣れないおじさんを手伝つたため、部活にも入らず真っ直ぐ帰宅しているんだと、先週彼から電話で聞いたばかりだ。

これから訪れる雪の季節に備えて、ぶどうの木にわらを巻きつけ

たり、枝の選定をしたり、肥料を施したり……。

朝顔しか育てたことのないわたしには、ぶどう栽培など未知の世界の出来事なのだが、とにかく日が回るほど忙しいところは、彼の電話で伝わってきた。

でも。だからって、クリスマス当日まで働くだなんて、わたしには到底理解できなかつた。

だが、こつちに来れなくなつた理由が、ぶどう園の手伝いのせいだと吉永君が言つたわけではない。

メールには何も理由は書かれていなかつた。  
つまり、別の用事が出来た可能性もある。

だとしたら……。それはそれで、またもやなんとも形容し難い複雑な気持ちになるのだけど。

わたしや勇人君に会つよりも優先したい用事があると考えるだけで、胸が苦しくなつた。

もちろん、吉永君に告白したわけでも、彼に告白されたわけでもない。

恋人同士ではないのだから、会えなくなつたからとつて、わたしに彼を咎める資格があるはずもなく。

所詮、メールと電話だけの付き合いなんて、この程度のものなんだ。

わたしが吉永君にとつて、少しも特別な存在ではないと証明されにすぎない。

毎日送つていたメールも、昨日今日と、送信する気にならない。携帯の画面を開いては閉じてを繰り返すばかりで、一文字だつて

埋まらない。

学校で今日一 日あつたこと、何一つ思い出せないくらい、昨日のメールのことで頭が一杯だ。

期末テストの結果が今日返ってきたことだけ、机の上に広げてある印刷物でわかる。

高校入学以来、やつとまともな点数を取れたにもかかわらず、わたくしの心は沈みこんだままだ。

絵里にどう言えばいいのだろう。

何も言わなくても、勘のいいこの親友は、わたしたちの間に何かあつたことくらいすぐに気付くに違いない。

絵里と一緒に買に行つたプレゼントは、郵送すればそれで済むけれど、それすらも迷惑かもしないと思つと、いたたまれなくなるのだ。

わたしあべっどの上にポンと放り投げた吉永君へのプレゼントのアソシエイトの手編み風マフラーだ。  
包みを、恨めしげに眺めていた。  
中身は……。

オフホワイトの手編み風マフラーだ。

自分で編んでみようと思ったのだけれど、絵里の猛烈な反対にあい、いつも簡単に却下された。  
よく練習してから贈つた方がいいと言われたのだ。

絵里のお姉さんが彼氏にセーターをプレゼントすると云つて編み始めたのはいいが、ほどいてばかりで、とうとう完成しなかつた……といつことがつい最近あつたばかりらしい。

わたしだつて、くわり編みしかやつたことがない。

絵里のお姉さんと同様、編み目の揃わない無残な物に仕上がるのを見えていた。

だから今回は作るのはあきらめ、店をあちこち回って、吉永君に似合いそうなマフラーを一生懸命選んだといつた。

彼の目の前でそれを渡すことが叶わないだなんて……。

わたしはグスンと鼻をすすり、枕カバーを涙で濡らしながら、そのまま眠ってしまった。

次の朝、絵里に話を聞いてもらうために早めに家を出たわたしは、マンションのエレベーターを降りたところで、珍しい人に出会った。

「よお、石水つー。」

と、突然後ろから声をかけられ、あわてて振り返ると。

昔とちっとも変わっていない、少しどぽけたような懐かしい顔がそこにあった。

横に並ぶとわたしと同じくらいの背格好の彼は、中二の時同じクラスだったクッキーこと、久木悠斗君くわいとうくんだったのだ。

「クッキー、久しぶりだね」

クッキーは、吉永君や勇人君と同じで、小学校からの付き合いだ。トランペットを吹くのが得意な彼は、将来はアメリカのブラスバンドパフォーマンスのメンバーに入るんだと言って、隣の市にある吹奏楽で有名な私立の高校にわざわざ通っている。

「石水も、元気そうだね。俺はいつも朝練行つてるから、マンション内の同級生にはほとんど誰にも会わないよ。今日はちょっと寝坊して、こんな時間になつてしまつたけど。石水も部活があるの?」

「あつ、いや違うよ。今日はちょっと友だちに話があつて……」「ふ～ん、そんなんだ」

クッキーって、こんなキャラだつたっけ？ 彼の変貌振りに目を見張つてしまふ。

昔は、自分から話しかけてくることなどほとんどなかつたような気がする。

高校生活が充実しているのだろうか。自信に満ち溢れているようにも見えた。

「真澄、いなくなつちまつたよな

突然クッキーの口から飛び出た名前に、わたしはビクッと肩を震わせた。

吉永君のことに過剰反応するわたしの体质は、彼が転校した後も少しも改善されていない。

「俺、真澄のこと、ずっと知らなくて。ついこの間、勇人に教えてもらつてびっくりしたんだ。確か、石水も真澄と同じ高校だつたよな？」

「う、うん。クラスも同じだつたから、わたしも吉永君の突然の転校に驚いたひとりなんだ」

出来るだけ心を落ち着かせて、普通に話したつもりだつた。

というのも、吉永君と最近また親しくなつたことを、クッキーに知られたくなかったから。

クリスマスに会つ約束が叶わなくなつた今、まるで付き合つてゐるかのように誤解されるのは、どうしても避けたかったのだ。

クッキーが開きかけた口を閉ざして、なぜかそのまま黙り込んで

しまった。

お互いを探り合つよつた氣まずい空氣が漂つ。

勇人君がわたしと吉永君の関係を誇張して彼に吹き込んだことも考えられる。

クッキーの顔色を伺いながら、わたしは彼の次の言葉を待つた。

「やうだ！ ちよつとよかつた。あのさあ……」

突如明るい声を上げたクッキーが上体を屈め、カバンの中からカラフルに印刷されたチラシのよつたものを取り出した。

「俺、今度の吹奏楽部のクリスマスコンサートで、ソロのパートもらえたんだ。市民会館の中ホール。よかつたら見に来てよ」

「一年生では、俺だけがソロに選ばれたんだ……と言つて、はにかむ。

「はい、これ、と手渡されたチラシは、コンサートのプログラムだつた。

「これが入場の引き換え券代わりになるから。部員一人当たり、十人は客を呼ばなきゃならなくてさ。他にも誘つ予定だから、気にせず来てよ」

カラー「ポピー」のプログラムにさつと手を通す。12月25日、午後5時開演。

二十五日……。そう、その日は吉永君との約束の日だ。でも、その約束は、白紙にもどつてしまつた。

「あれ？ 都合悪い？」

黙つたままプログラムをじっと見ているわたしに、クッキーが慌てたように裏返った声を出す。

「そりゃあそうだよな。その田舎、もうクリスマスだし……。カレシがいたら、やつぱ無理だよな？ それなら別に断つてくれてもいいんだけど」

クッキーは頭をぽりぽりかきながら、照れ笑いを浮かべる。

わたしは少し時間を置いた後、首を横に振った。カレシがいるだなんて、そんなことあるわけないよと言つて。

「ええ？ ホントに？ ならクリスマスコンサート、来てくれる？」

うんと言つて、こくりと頷いた。

もちろんクッキーのソロ演奏も気になるけど、それ以上に吉永君と会えないクリスマスが辛いのだ。

クッキーのコンサートに行けば、寂しさを忘れられると思った。

「行く、行く。だつてクッキーは、中学のときから、めっちゃトランペッタうまかったもんね。なんだかすっごく楽しみになつてきちゃつた。あつ、ねえねえ、クッキー。友だちも誘つていいかな？」

絵里や勇人君も誘つてみようと思つて。

十人もお客さんを呼ばなければいけないのだ。ここはクッキーに協力するいいチャンスかもしれない、とひらめいたのに……。

「あつ。や、それはダメだよ。そのプログラム一枚につき、その……。一人しか入場できないんだ」

「えつ？ そうなの？」

わたしは驚いてクッキーをまじまじと見た。彼も困惑した顔でわたしを見る。

「石水、せっかく言つてくれたのに、『ごめんな』

「ごめんだなんて……。そんなこと、気にしないで。わかった。じゃあ、わたし一人で行くね。市民会館なら駅の近くだし、場所もよく知ってるから」

行くと言つてしまつた以上、友だちを誘えないからといつ理由だけで、やっぱり行きませんとは言えない。

「サンキュー、石水。二十五日、待つてるな。俺、ソロのところ、絶対に成功させるから。じゃあ、また！」

クッキーが満面の笑みを浮かべ、手を振る。

「あ……。ま、またね」

反対方向のバス停に走つて行くクッキーを目で追いながら、胸の前で小さく手を振つた。

吉永君と会えないクリスマスに、突然誘われたコンサート。昔なじみの同級生に、たまたま誘つてもらったコンサートだけど……。

胸の中で、得体の知れないもやもやしたものが密かに蠢き始めているのを、わたしはおぼろげに感じ取つていた。

「何よ、それ！ なんであいつ、いっちゃんに来ないの？ そんなのおかしいよ。ありえないって…」

絵里は、頭のてっぺんから湯気を出しているんじゃないかと思えるくらいの顔を真っ赤にして、怒り狂っている。

わたしが吉永君からのメールについて相談したとたん、このあたりもまだ。

「吉永が自分からクリスマスにこっちに来るって言つたんでしょ…？ なのにどうして急に来れなくなるわけ…？ 絶対変だよ。ちゃんと理由を訊いた方がいいと想つ…！」

教室にはすでに何人か登校してきてるので、あくまでも基本はひそひそ声で。

でも感情のおもむくまま突然大きくなる絵里の声に、そつきからハラハラさせられっぱなしだ。

「それはそうなんだけど…。多分、家の手伝いがあるから、来れなくなつたんだと思う。ぶどう園の仕事、すこしく大変そうなんだもん」

「ええつ？ ぶどうなんて、夏の終わりくらいに、プチつて実をもぎ取ればいいだけじゃん…。今は十一月だよ。せひビックリもぶどうはぶら下がつてないって…。本当に忙しいの…？」

「う、うん。おじいさんが収穫後の手入れをしないうちに倒れちゃつたから、吉永君とおじさんが、広大なぶどう畑で、木にわらを巻いたり、肥料を…」

「わら？ 肥料？ なんだかよくわかんないけど…。忙しいつ

てわかつてゐなら、クリスマスに來るなんて、優花を期待させるようなこと言わないで欲しい……。優花がどれだけ楽しみにしてたか、あいつは何もわかつちゃいないのよ。ちょっと携帯貸して。あたしが代わりに、訊いてあげるからさ」

絵里がわたしの携帯を奪い取ろうと手を伸ばしてきた。

「だ、だめだつて。いいの。もうちょっとしたら、何か連絡くれるかもしれないし。それまで待つてみる」

絵里にそんなことされたら、古永君だつて困るに違いない。わたしは携帯を奪われないよつに、自分の胸のあたりでぎゅっと抱え込んだ。

「んもう、優花つたら、ホントのん気なんだから。来年のクリスマスまで待ち続ける、なんことにならなによつこね。まあ、生真面目なあいつのことだから、浮氣はないと思つげど」

「浮氣？」

全身から、やーっと血の氣が引いていくのがわかつた。

浮氣……。そのことも何度も頭の中をよぎつたのは事実だが、極力考えないよつこしていた。

けれど、絵里の口からその言葉が出たとたん、喉からからになるほどダメージを受けてしまつたのだ。

「やだ。何マジになつてんの？ だから、浮氣の心配はないって言つてるんだけど?」

わたしの様子を見て、絵里があわててフォローしてくれる。が、そんなにすぐ切り替えられるほど、わたしの心は強くない。

「あつ、うん。でも、わたしたち、その。付き合つてゐるわけじやないし、別に誰と仲良くなつたとしても、浮氣とかにはならなこと…

- 1 -

そういう風のことと、ショックを程うげよつとがんばったのだけれど。ますます心の中は不安でいっぱいになる。

「優花。どうしてそんな弱気になつてゐるの？だからいつも言つて  
るでしょ？あんたたちは誰がなんと言つても、正真正銘、恋人同  
士なんだから。そこは自信を持つて。だからこそ、初めてのクリス  
マスに約束を破るつてのが、許せないの！家の手伝いだかなんだ  
か知らないけど、優花との約束以上に大切なものがあるつていうの  
が信じられない！」

絵里のいつとおつ浮氣でなことあるべ、理由はせつ、嫁のいじ  
なのだね。

おじいさんの具合がますます悪くなつたというのも考えられる。吉永君に連絡を取ろうとしないわたしに、絵里は学校にいる間中、不満そうだった。

でも……もう決めたこと、吉永君を信じて、彼から連絡が来るのをもうしばらく待つてみることにしたのだから。

ところが、待てど暮らせど、彼らは何も連絡がない。時ばかりがむなしく過ぎてゆき、わたしの心には、ぽつかりと大きな穴があいたままだ。

あの日のメールを最後に、結局何も連絡を取り合わないまま、クリスマスイブを迎えることになってしまった。

すでに寂しさと不安の限界を超えていたわたしは、イブの夜、とうとう絵里の助言どおり吉永君に電話をかけてしまった。

久しぶりに聞くその声は、いつもと変わりなく低く落ち着いて、とても響きのいい声だった。

ところが返ってきた返事は、メールの文章と一字一句違わなくて、『ごめん、明日は行けないと繰り返すばかり。

理由を訊いても、ちょっと……と言葉を濁して、そのまま黙り込んでしまった。

そして、わたしがメールも電話もしなかつたこの数日間のこと、別段何も咎められることはなかった。

それは言いかえれば、わたしのことなど、何も気に留めていないというようなものだ。

理由を訊いても、不明瞭な返事しか返つてこないし、わたしからの連絡を待つている様子もない……。

吉永君を駅まで追いかけて行つたあの日。

確かに二人の心が繋がつたように感じたのは、わたしの思い過ごしだつたとでも？

こんなこと、考えたくもないけれど。

まさか、そんなことがあるはずない、とも思つけれど。  
転校した高校に好きな人が出来たのだとしたら……。

あるいは、吉永君を一眼見て恋におちた誰かが彼に告白して、彼の気持ちがその誰かに傾いてしまつた……とか。

わたしは彼との短い会話のあと、じゃあまたねと言つて電話を切り、制服のスカートのままベッドにもぐりこんだ。

とめどなく溢れてくる涙と共に過ごしたクリスマスイブは、とて

つもなく長くて辛い夜になってしまった。

今日から冬休みだ。

絵里と駅前のショッピングモールに行つて、映画を観る約束をしている。

せつかくのクリスマスに仲良しの女子同士でデートだなんて、ホント笑っちゃうよねと言しながらも、わたしは心の底から愉快な気分になったわけではなかつた。

絵里は、映画が終わつたらうちに来ないかと誘つてくれている。お姉さんの彼氏も来るので一緒にパーティーをやろうと、わたしの返事も待たないうちから、すっかりその気になつてゐるのだ。

今日は一十五日。本當なら、吉永君と会つて、プレゼントを渡して。

そして、もしかしたら、テートりしきこともできたかもしれない、クリスマス……だ。

絵里にはまだ言つていなければ、映画の後、クッキーの吹奏楽部のコンサートに行くつもりにしてゐる。

別にこゝそする必要はないのに、なぜか言つてへへへへて、何も言えないま、ずるずると今日を迎へてしまつた。

急用が出来たから先に帰るねとつて、さつげなく絵里と別れればいいと安易に考えていた。

なのに、待ち合わせ場所で絵里に会つたとたん、それがとんでもない間違いだと氣付かされるのだ。

映画館のロビーにひょっこりと姿を現したその人に、腰を抜かさんばかりにびっくりさせられたのだから。

「よおつ……」

力なく右手を上げるその人に慌てて駆け寄った。

「な、な、なんで、はやと君がここにいるの？」

「ま、まあな」

勇人君がわたしから田を逸らし、照れくさそうに首の後ろをポリポリと搔いている。

「へへへ。びっくりしたでしょ？ 実は昨日から鳴崎も誘つてたんだけど、優花には内緒にしてたんだ。だつて、優花の驚く顔が見たかったんだもん！」

絵里のいたずらっぽい目がキラリと光る。それにしても内緒にするなんて、絵里も人が悪い。

勇人君が来るとわかつていれば、こんなところにこのことやって来なかつたのにと悔やまれる。

これは、もしかしてもしかするのではないかと、絵里と勇人君を見てあれこれ妄想してしまう。

だつて、クリスマスに誘い合つて約束してた男女といえば、やっぱり、あれしかない。

そうに違いない。一人はきつと付き合い始めたんだ。

願つたり叶つたりの急展開に頬の筋肉が緩み、にたにたしてしまう自分を止められなくなつた。

麻美への思いに悩む勇人君と先輩との恋に破れた絵里。

ハラハラさせる一人のやり取りも、捉えよつによつては、仲がい証拠とも取れる。

でも、わたしのそんなよこしまな予想は、あつという間に砕け散つてしまった。

勇人君がここにいるのには、ちゃんとしたわけがあつたのだ。つまり、わたしと同じ状況に陥つた不幸仲間……といつことらしい。

クリスマスイブだつた昨日、勇人君は彼の想い人である麻美にプレゼントを渡すため、絵里の力を借りていたのだが……。

麻美は終業式が終わつてすぐに、隣町にある大手予備校の大学受験集中講座を受ける予定になつていて、勇人君の壮大にして命がけのクリスマスプロジェクトが瞬く間に中止せざるを得なくなつてしまつた……というわけだ。

それで、告白は愚かプレゼントすら渡せず、激しく落ち込んでいる勇人君を救済するため、今日の映画に誘つたのだと、絵里がニヒヒと笑いながら説明する。

確かに今日の勇人君は、映画を観てゐる間中もずっと無口で、ムスッとしていた。

おまけに泊まりに来ると言つていた親友の吉永君にも約束を取り消されているので、不機嫌さも倍増しているのだろう。

吉永君は勇人君にも来れなくなつた理由をはつきり言つていらないらしく、もうあいつは友だちじゃないとまで断言するほど、勇人君は怒つていた。

今年のクリスマスは踏んだり蹴つたりだつたと、映画のあとに行つたケーキショップで、ショートケーキをフォークで蜂の巣状に突きながら、勇人君がしきりにぼやいている。

「さあーてど。じゃあ、今からあたしんちに行つて、ケーキよく、パーティーをやるうよ。うひゃー。ケーキ食べながら、景気よくだつて。

あたし、こいつの間にオヤジギャクなんか言つてるんだが、はつはつ  
はつ……！」

「こまでも暗い勇人君と、好きな人に振られたも同然な態度を取  
られて落ち込んでいるわたしを気遣つて、わざと明るく振舞つてオ  
ヤジギャグまで飛ばす絵里には悪いのだが。

「こじできちんと、絵里の家に行けないことを言わなければならな  
い。

わたしは食べかけのミルフィーユの横にフォークをそつと置いた。  
そして、勇氣を奮つ起こし……。

「絵里、『じ、『じめん。今日はその……』

絵里の皿を見ながら話をゆつべつと切り出す。

「どうしたの？」

絵里と勇人が声をそろえてわたしを見る。「……怖いよ。一人の目  
が、まるで獲物を捕らえる猛獸のようにならりと光るのだ。

「いや、そ、その……。このあと、ちょっと用があつて、絵里んち  
には……」

「行けな……って言つんじゃないでしょ？ そうなの？ 優花、  
ねえ、どうなのよー！」

絵里が身を乗り出して詰め寄る。どうしたところだらう。まだ  
何も言つてないのに。

「ゆうちゃん。いたい、どうしたのさ？ まさかとは思つねど、  
眞澄が来ないからって、自暴自棄になるなんて許さないぞ。今日の

おまえ、俺以上に落ち込んでるだろ?」

勇人君も容赦なく攻め込んでくる。

あまりにも激しい一人の気迫におののき、もうこれ以上あの「こと

は隠し通せないと降参の白旗を揚げた。

「あの、それが……。実は今から、コンサートに……行くんだ」「誰と?」

本当のことを見つたつとたん、すかさず絵里が訊く。

「ひ、ひとりだよ」

そうだ。うそじゃない。クッキーに誘われたけれど、行くのは一人だ。

「ホントに一人で? なんか怪しい……。優花、ちゃんとじつち見て。何のコンサートなの? そんなの今初めて聞くし。ねえ、優花、本当のこと教えて。隠し事はダメだよ」

絵里の誘導尋問は天下一品だ。誰だって瞬く間に丸裸にされてしまつだから。

「あ、あの……。クリスマスコンサートなんだ。中学の同級生が活動してる、吹奏楽部の……」

「吹奏楽部? 中学の同級生の?」

絵里が不思議そうに首を傾げる。

「うん。そうだよ」

これ以上訊かないでとすがるような氣持を込めて、絵里に懇願の視線を送りながら、こくりと頷いた。

「中学の同級生か。じゃあ、俺も知ってるよな、そいつのこと。女？ それとも男？ いつたい誰なんだ？」

勇人君は、もうすでにそれが誰であるのか気付いているのだろうか。

吹奏楽部に入っている同級生といえば、人物像はかなり絞られる。もう逃げられない。追い詰められたわたしは、ついに観念して、すべてを打ち明けることにした。

「はやと君、あのね、その人は……。クッキーなの」

勇人君の目つきが険しくなる。

「クッキー？ それって久木のことだよな？ なんでもゅうちゃんが、クッキーのコンサートに行くんだよ！ ゆうちゃんとクッキーがそんない親しい仲だったなんて、俺は今日まで知らなかつた。どう考えたつて、おかしいよ。だつておまえは、真澄のカノジョなんだろ？ なんで違う男とクリスマスを過ごさなきやならないんだ！」

一刀両断だ。ものの見事に、すぱっと切られた。

そんな風に言われるのがわかつていたからこそ、このことを誰にも言いたくなかったのだ。

「はやと君、聞いてくれる？ あの、わたし、まだ吉永君の彼女だと決まつたわけじゃないし。それに、クッキーのコンサートだつて、呼ばなきゃいけない十人のうちの一人として、誘われただけなんだもん」

必死に潔白であることを説明して理解してもらおうと思ったけど、相手は思つた以上に手ごわい。

「ゆうちゃん、いいかい？ 真澄はあのとおり無口だし、自分の気持をうまく伝えられないタイプだと思う。でもさ、おまえのことをとつても大事に思つてているのは間違いないと思うんだ。そりやあ、今日こっちに来なかつたのは許されることじやない。俺だつて楽しみにしてたのに、なんで来ないの？ つて思つてるし。でも、だか

らと書いて、クッキーの誘いにホイホイのるなんて、みづちやんらしくないよ」

「そうだよ。鳴崎の言つとおりだよ。ねえ、優花。そのクッキーつて子、なんか下心みえみえつて感じがするんだけど。同級生つてことは、吉永も知つてる人なんだよね?」

「うん……」

下心がみえみえだなんて。あまりにもショッキングな絵里の発言に、どんどん気持が沈んでいく。

「ならば、余計にダメじやん。吉永がこのことを知つたら、怒り狂つちやうつて!」

絵里の言いたいことはわかる。でも、わたしがメールをしなくても気にならない人が、クッキーのコンサー卜に行つたくらいで怒るとは思えない。

クッキーにも、そしてもちろんわたしにも。コンサー卜を楽しむ以外の理由は何も存在しないと訴え続けるのだが。

「だからさつさつきも言つたけど。わたしはクッキーにとつてはただのお客さんで、十人のうちの一人なんだつてば。吉永君にも、そ、その、コンサー卜のことはちゃんと報告するつもりだし……」

「ウソ! あれ以来、まだあいつに何も連絡してないくせに。だって、優花つたら、あたしたちにも内緒でこそそとコンサー卜に行こうとしたんだよ? 優花だつて、心のどこかでマズイつて思つてたくせに!」

「絵里……」

絵里にすべてを見抜かれてしまつた今となつては、もう反論の余

地は残つていなかもしれない。

「それに」

尚も勇人君が追い討ちをかけてくる。

「さつきからずっと気になつてゐるんだけど。その十人のうちの一人つて、何？」

探究心の強い勇人君は、納得するまでわたしを質問攻めにするつもりらしい。

「それは、言葉通りの意味だよ。つまり、部員がそれぞれに観客を集めの手はずになつてて、クッキーが十人分のお客さんの勧誘を任されてるつてことなんだけ。せつかくのコンサートだもの。会場がいっぱいになつた方がいいに決まつてるでしょ？」

わたしは何の疑いもなくそう信じて、クッキーの話を受け止めていた。

ところが勇人君はまだ首を縦に振ろうとしない。

「あのさ、ゆうちゃん。クッキーの行つてゐる高校の吹奏楽部はね、コンクールの全国大会にも名を連ねる強豪校なんだ。で、定期演奏会も学園祭も、前売りチケットは即売り切れつて聞いてる。そのクッスマスコンサートだつて、クッキーが走り回らなくとも、すでに客は埋まつてゐるはずなんだけ……」

「ええつ？」

「だから、ゆうちゃんが誘われたのは、もしかしたら家族に割り当てられた座席なのかもしれないな。行ってみればわかるよ。多分、立ち見ができるくらい盛況なはずだから」

じゃあ、クッキーはなぜあんなことを言つたのだろう。  
わたしはひざに乗せたファーのバッグを無意識のうちに両手でぎゅっと握り締め、マンション内でクッキーと出会つた朝のことを、順を追つてひとつひとつ思い出だしていた。

コンサートにはちょうどだけ顔を出してすぐに帰るからと一人を安心させ、たつた今店を出たばかりだ。

気分転換になるかもしれないから楽しんできたらいよと、絵里はわたしを信じて送り出してくれたけれど、勇人君は難しそうな顔をしたままで、手も振ってくれなかつた。

勇人君は昔から生真面目なタイプだつた。男子には珍しいくらい、細かいところによく気がつくし、世の中のじぐみにも造詣が深い。

だからと言って、クッキーのことでもじつまで深読みする必要があるのだろうか。

クッキーとはたまたま偶然、登校途中に出会つただけなのだし、強引に誘われたわけでもない。

部活のコンサートくらい、誰でも気軽に誘い合つたりするだろうし、到底そこに特別な意味合いがあるとは思えなかつた。

たとえ、吉永君に知られたとしても、胸を張つて真実を伝える自信がある。

コンサート会場に向かって歩きながら、なんだか無性に腹立たしくなってきた。

たかだか近所の同級生の部活のコンサートに行くだけで、どうしてここまで友だちに指図されなければならないのだろうと。徐々に行き場の無い怒りがこみ上げてくる。

何も間違ったことはしていないのだから。もつと自信を持つて堂々としていればいい。

わたしは、花のモチーフが編みこんであるお気に入りのマフラーをふわりと巻きなおして、スクランブル交差点を小走りで駆け抜けた。

受付でクッキーにもらったプログラムを見せ、パンフレットを受け取る。

ホールの後方部の端席に座って、場内アナウンスの指示に従い携帯の電源を切つた。

勇人君の言つたとおりだつた。ホール内の客席はすでに人で埋め尽くされ、ここしか空いていなかつたのだ。

背筋に緊張感が走る。もし勇人君の言つたことが本当で、クッキーが嘘をついていたのだとしたら……。

わたしは氣持を落ち着けるため、胸に手を当てて大きく深呼吸をしてみた。

絶対に大丈夫。クッキーは一人でも多くの人に演奏を聴いてもらいたかつただけ。

やつとやつに違いない。

舞台にはまだ誰もいない。指揮台を中心とし、扇状に並べられた椅子と譜面台が、薄明かりの中ぼんやりとシルエットを浮かび上がらせている。

今ならこじを出ることが出来るのではないだろうか。  
やつぱつコンサートに行くのはやめたと言つて、絵里たちと合流するこじも可能だ。

しかし。根拠のない憶測でクッキーとの約束を破つてもいいの?  
あの日、満面の笑みを浮かべて手を振つていたクッキーを裏切れるとも?

わたしはとつとつ何も決断できないまま、開演のブザーが会場内に鳴り響くのを聞き、コンサートが始まってしまったことを知った。

## クリスマス番外編 5・それは偶然じゃなくて……

クッキーのソロ演奏を聴いたら、すぐにホールを出ようと趣づ。

というのも。クッキーとは同じマンションに住んでいるので、今後も彼とばったり出会う確立は高い。

その時のためにも、せめてソロ部分だけでもしっかり聴いておいて、よかつたよと感想が言えるようにしておこうと考えたのだ。

ところが、待てど暮らせど、一向にクッキーのソロが始まらない。この調子だと、結局最後まで聴くことになってしまふのではないかと、焦り始める。

彼がトランペットを構えて誇らしげに立ち上がり、その高校生離れした素晴らしい演奏を聴衆に披露した時、すでにプログラムは最後から一つ目の曲になっていた。

途中で退散しようといつもくろみは、見事に打ち砕かれてしまつたのだ。

でもクリスマスコンサートと名を打つだけのことはあって、知っている曲も多く、一人でも十分に楽しめた。

クリスマスにちなんだ曲を繋ぎ合わせたメドレーが流れた時には、会場が一体になり、我を忘れて手拍子を刻んでいたほどだった。

吉永君とクリスマスを過ごせなかつたことは辛いけれど、こんなに迫力のあるプロ顔負けの生演奏を聴けてよかつたと、素直にそ

思ったのも事実だ。

アンコールは、またもやクッキーのソロ演奏が組み込まれ、それはもう割れんばかりの拍手で会場が沸き立ち、何度もかのアンコール演奏のあと、ようやく幕が下りた。

人の波に押し出されるようにして、ロビーにたどり着く。

するとそこには、今まで演奏していた部員たちがそれぞれに楽器を持って、演奏時のユニホーム姿のまま観客を見送るために待機していたのだ。

両サイドに花道を作るようट部員が立ち、聴き終えた観客ひとりひとりに向かって、ありがとうございましたとにこやかな笑顔をふりまく。

演出だらうか。シャンシャンシャンヒ、ビヒカで鈴の音まで鳴り出す始末だ。

十分にクリスマス気分を味わって、最後の最後まで素晴らしいコンサートだったと余韻に浸っていたのも束の間。

花道が途切れ、これでもう何事もなく帰れると思ったその時、突然誰かに腕をつかまれ、その人のそばに無理やり引き寄せられてしまったのだ。

「「あん。お客さんが帰るまで、ここにいて……」

クッキーだ。彼がわたしにそつと耳打ちをして、その場に引き止めるのだ。

突然のことにびっくりしながらも、帰ることをやめようと、彼の背後から話しかける。

「あの。クッキー。遅くなると家族が心配するし、わたし、もう帰らなきゃ」

「これ以上はここに留まる理由はないのだから。」

さっさと帰つて、何もなかつたことを絵巻に報告しなければならない。

でもクッキーは、わたしの話などひとつも聞いていなくて。ひたすら観客を見送つていた。

「クッキー、『めんね。お先に……』

わたしは、なんとかここから抜け出そうと、クッキーを突き放すようこうそくつたのだが。

「石水、あと少し待つて。頼むよ」

クッキーが再びわたしの腕をつかみ、哀しそうな顔をして懇願するのだ。

帰るタイミングを逃してしまったわたしは、クッキーの背中を見ながら、途方に暮れていた。

どうしてクッキーは、わたしを離してくれないのである。

ならば、彼の掴んでいる手を振り切つて走れば、あることは簡単にここから逃げ出せるかもしれないと思つただけだ。

けれど、少し待つてとくにクッキーのややかな願いすら聞けないほど、わたしは急ぐ必要があるのであるのだろうか。

「コンサートに来たことに対する、彼がただお礼を言いたいだけだとしたら。

それを無視して逃げ帰るわたしは、冷酷な人間だと思われないだらうか。

わたしは、しぶしぶクッキーの願いを聞き入れ、彼を待つことにした。

ようやく観客の波が途切れ、部員たちも列を崩して、思い思いにお互いをねぎらい始める。どの顔も満足げだ。楽器が出来る人がうらやましいと思える瞬間でもあつた。

「石水。待たせてごめん。今日はわざわざ来ててくれて、ありがとうございます。最後の一人を見送ったクッキーが振り向き、笑顔でそう言った。やっぱり、わたしにお礼が言いたかっただけなのだ。

「いらっしゃ、コンサートに呼んでくれてありがとう。すっごく楽しかったよ」

わたしも肩の荷が下りたのか、やっと自然に笑顔になる。待つてよかつたと安堵する。

「そう言つてもらえてよかつた。予想外に大勢の人々に来てもらえて、こっちもやりがいがあつたよ……って、お、おい。なんだよー。」

すると突然、むんずとクッキーの肩を掴んだ大柄な男の人が、片側にチューバを携えて、わたしに微笑みかけるのだ。

「この人はいったい、誰なの？」

「やあ、こんばんは。えっと、こちらのかわいい人は……。まさか、クッキー。おまえのカノジョなのか？ 腕なんか握っちゃってさ」

クッキーが慌てて手を離した。そして、カノジョなんかじゃないよと言つて、迷惑そうに肩にあるチューバさんの手を払いのけた。

「あらあ、かわいいカノジョさん。クッキーにもこんなカノジョがいたんだ。どうりで、今日は張り切っていたはずだわね」

今度はきれいな女の人がやつて来て、クッキーに意味ありげな目線を送る。

他にも次々と部員たちが集まつてきて、あつという間にわたしたちの周りに人垣ができた。

「せ、先輩。違いますって。彼女は、その、近所の友だちで……」

クッキーが、必死になつて、先輩らしききれいな女人に弁明をする。

「ええ？ うそー。またまた照れちゃつて。クッキー、よかつたわね。カノジョが来てくれて」

先輩が、クッキーの背中をぽんと威勢よく叩いた。

「だから、違うんです。お願ひです、これ以上からかうのはよしくださいよ。石水も困つてるし」

クッキーはしきりに照れ笑いを浮かべ、トランペッタを持つた手で器用に頭をぽつぽつと搔いた。

「わあ、みんな。もうひとがんばりお願ひねー。」

先輩が、手に持ったクラリネットの呂つな縦笛を振りかざし、声を張り上げた。

するとその声に反応した部員たちが一斉にひとと返事をして、楽器を手に散り始める。

「石水、何度も悪いけど……。」その後、ステージの片付けがあるんだ。すぐに終わるから、それまでここで待つてくれる? 一緒に

帰ろうよ」

「でも、わたし……」

周りの部員たちに冷やかされ、わざからいたたまれない気持になつてゐるわたしは、すぐこでもここから立ち去りたいといつのこと、クッキーはまだ待つててなどと言ひ。そして、あらう」とか、一緒に帰らうだなんて……。

「石水。何か用でもあるの?」

クッキーが不思議そうに、わたしを覗き込む。

「わうじやないけど、でも、クッキーも友だちと帰るんじゃないのかなつて、そう思つて……」

「いや。だつてほり、うちの高校は私学だろ? みんな遠くから通つてゐから、帰る方向もばらばらだし。だから別にあいつらといつも一緒に帰るわけじゃないんだ。それに、どうせ俺たち、同じと

「うそに帰るんだし。ちゃんと家まで送り届けるよ。だから、絶対にここで待つてて。じゃあな」

「クッキー、待つて！ ねえ、クッキー」

わたしの叫び声が虚しく響き渡る。でも彼は、またあとでと黙つて、にこやかに手を振るのだ。

わたしがここで待つていてのを、微塵も疑つていなことよつた眼差しで。

ぱつんとひとつ、ロビーに取り残された。

本当にわたしは、このままここで待つていてのをのだろうか。そして、クッキーと一緒に帰つて。そのあとどうなるといつのだろ。

わたしはもうどうでもよくなつていた。いつたう自分に何が起つていてのか、それすらも考えたくないほどに、頭の中がぐちゃぐちゃになつていて。

でも、さつきクッキーが言つたよつて、帰るといひはなじマシンヨンなのだ。

別々に帰つたとしても、バスで再び顔を合わせることだつてある。

じわじわと押し寄せてくる不安で胸が痛くなつてく。

勇人君や絵里の言つたことを、もつと真剣に受け止めるべきだつたと、今さらになつて後悔し始めていた。

「石水！ お待たせ」

制服に着替え大荷物を持つたクッキーが、息を弾ませてわたしのところに駆け寄つて来る。

「クッキー……」

意氣揚々と現れたクッキーとは反対に、わたしの声は弱々しく今にも消え入りそうになる。

「石水、なんか元氣ないよな。もしかして、腹減った？ 僕、実はさ、もうペこペこなんだ。午前中からずっとリハーサルやってたし、楽器吹いてるとハンパなく腹が減る。そうだ、何か食つていかないか？」

クッキーが手で胃のあたりを押さえ、空腹をアピールしてわざとよたよたと歩いてみせる。

でも彼に同調はできない。

なんとしても、クッキーとの食事は避けなければならないのだ。

「う、ごめん、クッキー。わたし、もう帰らなくちゃ。その……。妹がひとりで留守番してるし」

クッキーに悪いと思いつつも、ひとりで待つている愛花を理由に断る。

もちろん、中三にもなった妹が寂しがつているはずがないのだが。ここには妹の名を借りて、うまく切り抜けるしかない。

だつてわたしがクリスマスの夜に一緒に過ごしたい人は……。たとえクッキーがいい人であつても、それは彼ではないのだから。

「そつか。だめ……か。愛ちゃんのために、石水は家に帰るのか……」

…

急に悲しそうな顔になつたクッキーが、肩を落とし心なしか伏目がちになる。

「「「めんね。で、でも、クッキー。今日の演奏、とてもよかつたよ。クッキー、すつ「「」へ上手だつた」

「あ、ありがと。そつ言つてもううれしく、嬉しいことよ」

少し元気を取り戻したように見えるクッキーが、荷物を抱き直し、ゆづくつと歩き始める。

なんて気まぐいんだろ。クッキーの誘いを断つた今となつては、このまま一人で並んで歩く」とすら、申し訳なく思つてしまつ。

「おー、石水。帰らなーのか？」

クッキーが、急に立ち止まつたわたしに訊ねる。

「う、うん。気にしないこと。クッキー、やつぱり先に帰つて。わたし、その……」

「何言つてるんだよ。やつこうわけにはいかないだろ？ 同じところに帰るんだし、ねまえをこんなにこゝに置き去りには出来ないよ。それに」

クッキーが、じつとわたしを見つめる。

「俺、石水との前の朝、会つただろ？」  
「うん」

「あれ、偶然でも何でもないんだ。俺、実は、石水のこと……」

その時だった。クッキーの肩越しに、こっちに向かって走つくる人物に釘付けになる。

カーキ色のジャケットを着て、紺色のスニーカーをはいて。力強く地面を蹴つて駆けてくる、その人に。

「えつ？ う、うそ……」

わたしはそれがとても現実の出来事だとは思えなくて、驚嘆の声をあげる。

そしてぽかんと開けた口元を、咄嗟に両手で覆い隠した。

わたしの異変に気付いたクッキーが、怪訝そうな顔をして後を振り返り、そして……。

本田（12／25）2話目の更新になります。  
ご注意下さい。

「真澄……」

クッキーが彼に向かつて力なくつぶやいた。

「やあ、悠斗。<sup>ゆうと</sup> そういえば、おまえに言つてなかつたよな、俺が引つ越したこと」

「あ、ああ」

「急に向こうに行くことが決まつたから、勇人以外には誰にも言えずじまいだつた。昔の仲間に挨拶もせず行つてしまつたことは、悪かつたと思つてゐるよ」

「だいたいのことは勇人に聞いた。おじいさんことで、大変だつたらしいな。で、その……。長野にいるはずのおまえが、なんでここに？」

クッキーの問には何も答へず、まるでわたしに会うためにここに来たとでも言いたげな目をして、吉永君がじつとわたしのことを見つめる。

田の前に急に現れたその人が本当に吉永君なのか、まだそれすらも信じられないわたしは、声も出せずただ見つめ返すことしか出来ない。

彼がたつた今、微笑んだように見えたのは氣のせいだつたのだろうか。

吉永君に、精一杯のぎこちない笑顔を返した時には、すでに彼は別人のように挑発的な目をしてクッキーを睨みつけていた。

「あつ、いや。別に深い意味はない。びつじて、おまえがここに来たのかなと、思つただけで……」

クッキーが吉永君の威圧的な視線に耐えかねたのか、顔を引き攣らせながらじりじりと後ずさる。

「俺がこつちにいたら、何か都合でも悪いのか？　おい、悠斗。どうなんだ！」

吉永君の目がクッキーを真正面から捉え、冷たく光った。

次の瞬間、わたしの身体に、ぴつと電流が走ったような気がした。指先を通じて、何かが全身を駆け抜けたのだ。

おずおずとその手を見てみると……。なんと、吉永君の手にわたしの指先がしっかりと包み込まれているのだ。

ところが吉永君は、わたしのことなどほんのわずかたりとも見ていないくて、その厳しい眼差しはクッキーに向けられたままだつた。

「真澄。だから、俺はただ……」

「ただ？」

尻込みするクッキーに専も執拗に迫る吉永君を見て、あることこゝ気付く。

ついさつき、わたしがクッキーに何を言われかけていたのかを思い出したのだ。

「この前の朝、クッキーに会つたのは、偶然でも何でもないと言つ

ていた。どうことね……。

クッキーが偶然に出会ったように仕組んでいたのだとしたら、今日のコンサートは、クッキーからのデータの誘いだったとも考えられる。

そして、吉永君がその状況を敏感に察知して、今ここでクッキーと対峙しているのだとしたら……。

わたしは、ドキドキと高鳴る胸元にかかる花のモチーフのマフラーをぎゅっと掴み、彼とつないだ手に力を込めた。

クッキーがそんなわたしに、ほんの一瞬だけ助けを求めるような目を投げかけてきたのだ。

「真澄、俺はただ、石水にコンサートを聴きに来てもらって、今から家まで送つて行こうと、そう思つてただけで、他には何も……」

クッキーの言つていることに嘘はない。本当だけれど。

でも、ここに吉永君が来なければ、クッキーは次の段階に足を踏み入れていたかもしれないのだ。

クッキーは、わたしの吉永君への気持にも薄々気付いていたのだ  
らう。

そして、まさかとは思つけど。そんな願つてもないストーリーがあるとは思わないけど。

吉永君の気持もわたしにあるかもしれない、クッキーが感じていたのだとしたら。

突然ここに現れた吉永君に、わたしとは何もないのだと言い訳をするクッキーの心中も察することが出来る。

するとクッキーが突然、ある一点を凝視して驚きの叫び声をあげるのだ。

「ええ？　えええっ！　お、おまえたち、やつぱり……」

クッキーが見ていたのは……。つながっているわたしと吉永君の手だった。

そして、わたしたちの顔を交互に見て、目を丸くして

「つ、付き合つていいのか？」

と裏返った声で訊ねた。

わたしは恥ずかしさのあまり、体を硬くしてその場で俯いてしまつた。

付き合つているのか、いないのか。

それはわたしにも、まだわからないことだったから。

「おまえたち、本当に、付き合つてるんだ……」

クッキーが苦々しい面持ちで、独り言のよつよつぶやいた。

「ああ、やうだ」

吉永君がはつきりと言い切る。

「なんだ。わたくち、付き合つてているんだと、他人事のよう  
に受け止めるわたしがいた。

「今日は、こいつが世話になつたみたいだけど……。このあと、俺  
はこいつと約束があるんで。じゃあな」

クッキーに強引に別れを告げたあと、吉永君は優しい目をしてわ  
たしを見て。手をつないだままぐんぐん歩き出したのだ。

彼が市民会館のガラスのドアを大きく開け、わたしはいとも簡単  
に外に連れ出される。

あまりのスピードに、足がもつれてよろけそうになる。

それでもなんとか振り返り、少し遅れて外に出て来たクッキーに、  
今夜は楽しかった、ありがとうございましたと言って、バッグを持った手を振つ  
た。

そして、『めんねクッキーと、優しく接してくれた昔なじみの同  
級生に、心の中でそつと謝つた。

吉永君はあれから何も言わない。どうして突然ここに来たのかも  
教えてくれない。

どんどん市民会館から離れて行く。  
そのまま大通りを南に歩いていくと、あつと言ひ間に駅に着いて  
しまう。

「ねえ、真澄ちゃん……」

わたしはビックリも理由が知りたくて、彼を引き止めた。

「どうして真澄ちゃんが、ここにいるの？ 今口は、来れないって言つたよね？」

正真正銘本物の吉永君に向かって、今一番知りたいことを勇気を出して訊ねてみた。

でも、吉永君は何も答えてくれず、立ち止まつたわたしの手を再び引いて、歩き始めるのだ。

「真澄ちゃん、教えて。お願い、ビックリ……」

「おまえに会いたかったから」

わたしの言葉を途中で遮るよつて、彼がそつそつとそれだけ告げる。

そして、わたしの額を人差し指でつんと押された彼は、いつものほわほわとした笑顔を浮かべ、片手でわたしの肩を抱き寄せた。

彼の首に巻かれた見覚えのあるマフラーが外れて、ぱぱりと皿の前に下りてくる。

彼が素早くそれを手に取り、彼の背に回した。

たつたそれだけのことなのに、心臓があつえないほどドキドキと暴れだす。

歩くたび頬をかすめる彼のジャケットから、駅のホームで抱きしめられた時と同じ匂いがした。彼の香りだ。

おまえに会いたかったから……。確かに吉永君がそう言つたのだ。夢でも、まぼろしでもない。信じられないけれど、今、吉永君本人がそう言つた。

わたしも彼に会いたかった。寂しくて切なくて。毎晩泣いてしまふくらい、吉永君に会いたかった。

今こいつやつてわたしの肩を包み込んでいるのは、間違いなく、夢にまで見た吉永君の腕だ。

肩を抱かれたまま、ゆっくりと駅に向かって歩く。

駅に近づくにつれて人通りが多くなり、あちらにもこちらにも、見るからに幸せそうなカップルが腕を組み、肩を寄せ合つているのが目に入る。

駅前の広場には、周りのビルの高さに負けないほどの大きなクリスマスツリーが飾られ、幻想的な光を放つていた。

昼間は、大きな木に、ただワイヤーが巻きつけられているだけにしか見えなかつたあの木が、夜にはこんなにもきれいに街を彩り、人々を魅了するだなんて。

わたしは、その光から目が離せなくなつた。

わたしの首の後ろに回った彼の腕に寄りかかり、眩いばかりのツリーを見上げた。

「わあ、きれい」

周りの誰もが、同じように感嘆の言葉を漏らしている。

吉永君が急にこっちに来れるようになつた理由はまだ何もわからぬけど、こうやって一緒にツリーを見ていられることが何よりの答えなのかもしれないと思つ。

待ち焦がれた彼と同じ場所で、同じ時を過ごしている。それでもう十分じゃないかと、わたしは自分自身に言い聞かせ、納得する。

「ゆう。今日、学校に行つてゐる間につけたこのマフラー、嬉しかったよ。おまえが選んでくれたんだよな」

「う、うん」

わたしはツリーから真横にいる彼に視線を移し、小さく頷いた。

「なあ、ゆう。俺がどれだけおまえに会いたかったか、わかるか?」

吉永君の声がふいにわたしの頭上に降り注ぐ。と同時に肩を抱いていた手を離した彼が、わたしの目の前に立ちはだかつた。

本日（12/25）3話目の更新になります。  
ご注意下さい。

## クリスマス番外編 7・クリスマスの夜に その2

青と白の眩い光を放つツリーを背にした吉永君の顔は、逆光になつてよく見えない。

わたしを見下ろしている吉永君が、いつたいどんな表情をしているのか知りたくて、皿を凝らしてじっと見つめてみた。

すると、次の瞬間。彼に少し乱暴に抱きしめられて、上向き加減になつたわたしの皿には、ツリーの先端と夜空だけしか見えなくなつた。

そして、それすらも黒い影で覆われ、いつの間にか彼の顔がわたしのすぐ近くに重なつて……。

それはあまりにも突然だつた。

心の準備も何も出来ていないわたしに、甘く静かに襲いかかつたのだ。

重なつた口びるが、冷たくて。

でも柔らかいそれは、確かに彼のもので……。

ほんの一瞬の出来事だつたけれど、わたしにとつて初めてのキスは、はつきりと心の中に刻み付けられたのだ。

身体中がぞくぞくして、驚きのあまり、息をすることすらも忘れてしまった。衝撃的だったけれど、彼と交わしたキスは、間違いくつ現実に起じたことだとわかる。

「ゆうの、その田……。あんまり大きく開けると、落ちてしまふぞ」

唇を合わせたあと、彼の第一声がこれだつた。

びっくりしそぎてまばたきをするのも忘れ、ぱつちりと田を見開いていたわたしを、吉永君は余裕の笑みで包み込む。

わたしはあわてて、ぱちぱちとまばたきを繰り返した。まぶたの裏が冷たい。

キスのあとが、こんなにも恥ずかしいものだとは知らなかつた。

いつたい、何を話せばいいのか。彼は、冗談が言えるほど気持にゆとりがあるので、わたしときたら、火照った顔を隠すように俯くことしかできない。

そして、彼のスニーカーと煉瓦敷きの地面が見えたとたん、そのまま現実にあわてふためく。

外で、駅前で、周りにもいつぱい人がいて……。

なのに今ここで、いつたい何をしたのだろう。

頭から、顔から、そして全身から。それ一つと音を立てて、血の気が引いていくのを感じていた。

「ま、真澄ちゃん。大変だよ。こんなにいたらダメ。早く帰ろ。今わたしたちが……その……やつたことだけど。誰かに見られていたら、どうするの？」

わたしが大慌てで身を翻し、早く帰ろうと吉永君の手を引っ張る。するとくつくつと笑う声が聞こえて。そのまま背中から抱き寄せられてしまった。

彼が、変だ。いつもの彼じゃない。人が大勢いるといふでそんなことをする彼が信じられなかつた。

「ねえ、ダメだつて。真澄ちゃん、ダメだよ」

もがけばもがくほど、彼の腕がしっかりとわたしを抱きしめるのだ。

「今日は、許されるんだよ。いつこうとも……。周りを見てみるよ。誰も俺たちのことなんか見てないよ。みんな、自分たちのこと精一杯だろ？ ツリーはきれいだし、音楽も鳴ってるし。こんな高校生同士の戯れなんて、誰の目にも止まりはしないって」

吉永君に言われたとおり、周囲をぐるつと見てみた。

チラツとこっちに視線をよこす人はいても、興味本位に立ち止まつて覗き見る人はいない。

みんな光り輝くツリーと、横に並ぶ大切な人に心を奪われて、他人のことまで気に留めていられないのだろう。

「な？ 言つたとおりだろ？」

後ろ向きのわたしを抱き寄せたまま、吉永君が背後でそう言つた。  
わたしはうんと頷いて、そのまま彼に身を委ねる。  
自分が気にしてるほど、周りは何も思っていない、とそういうことをだよね。

吉永君のぬくもりを感じながら、人の流れを田で追う。

ゆつたりと流れしていく一人だけの時間が、こんなにも愛おしいだなんて知らなかつた。

わたしは次第に身体中の力が抜けていくのを、彼の腕の中でひそやかに感じていた。

「実は俺、おちこぼれだつたんだ」

急にとんでもないことを口にした吉永君に、わたしは自分の耳を疑つた。

聞き捨てならないその言葉の真意を確かめるべく、彼の顔が見え

るゆべ、へぬりと前に向を直ひつとしたのだけだ。

「いいから、そのままで聞いて。こんな話、本當はおまえに聞かせたくないんだけどな」

彼は少しも譲らず、わたしは結局後ろ向きのまま、話を聞くことになる。

「俺の転校したことなんだけど……」

背中越しに聞こえる彼の声にじつと耳を澄ませた。

たまたま定員に空きがあつて彼が編入した県立高校が、地元では超のつくほどの進学校だったらしい。

クラスメイトが同じ学年の生徒だとは思えないくらい、みんなしつかりしていく、転校と同時に自分が落ちこぼれているのを悟つたのだと叫ぶ。

でも、それが本当のことだとは、すぐには信じられなかつた。ようによつて、吉永君が落ちこぼれるなど、わたしにとつては到底考えられないことだ。

そもそも彼が落ちこぼれであるなら、わたしは今この高校など、成績不振を理由に、とつての昔に退学させられているはずだ。

聞けば、吉永君の通つている高校は、わたしの高校とは比べ物にならないほど勉強熱心な学校で、転校生である彼の実力を確かめる

ための補習が、他の成績の悪い生徒たちと一緒にずっと続いていた  
ということらしい。

「勉強と家の手伝いに追われていて、おまえに電話すら出来なかつた。本当に、ごめんな」

吉永君が、わたしの後髪に顔をうづめるようにして、これまでの行動を振り返り謝ってくれた。

「いいよ、そんなこと。でも、もつと早く言つてくれたよかつたのに。勉強が大変だからってわかつてたら、わたしだって、こんなに悩まなかつたのに……」

そうだよ。隠し事をするだなんて、これほど辛いことはないのに。

「「めん。おまえが俺のことを心配してくれてるのは、昨日の電話でよくわかつた。でもな、自分が落ちこぼれだつてこと、ペラペラとおまえに言えると思うか？ そんなもの、死んだつて言いたくない。俺にだつてプライドつてもんがあるしな。それに、意地もある。絶対に負けられないって思ったから、必死になつて、補習を受けた」

吉永君の負けず嫌いは、誰もが知るところだ。陸上の大会での成績にも、それは顕著に現れている。

「それで、補習はつまくこつたの？」

首に巻きつづくように掛けられている彼の手に、自分の手を重ねて訊ねた。

「うん。年内は二十八日まで学校に通つて、補習を受ける予定だつたんだけど、今朝、昨日の確認テストの結果が出て、補習を受ける誰よりも先に、そこから抜け出せたんだ。数学は満点だった」「すごいよ、真澄ちゃん！ がんばつたんだね。それで、急にここに来れたの？」

心からす「」いと思つた。そんな優秀な人ばかりの高校で、満点をとるほどがんばつた吉永君に、以前にも増して尊敬の念を抱いてしまう。

「ああ。それで、おまえを驚かせようと思って、大阪に着いてからおまえの携帯に連絡を入れたら……。繋がらない」

「「めん……なさい。だつて、クリスマスコンサートを聴いてて、ホール内では電源を……」

「わかつてゐよ。でもな、おまえがコンサートに行つてゐなんて知らない俺は、なんだつてこんな時に電源切つてるんだよ！ つて、マジでホームに自分の携帯を投げつけそうになつたんだぞ。氣を取り直して勇人に連絡したら、コンサートに行つたつて教えてくれて。もちろん、久木のことも聞いた。そして、急いでホールに駆けつけてたんだ。おまえ、知らなかつたんだろ？ 久木の奴、おまえ狙いだつたつてこと」

「え……？」

優花の心臓がどくつと跳ねる。

初めは本当にクッキーの気持ちは何も気付かなかつた。

でも、コンサートが終わつたあのクッキーは、そんなこともありかなと思わせる雰囲気をまとつていたのは事実だ。

だから、夕食の誘いも断つたのだから。

「勇人も、久木のおまえに対する気持は、前から気付いていたらしくて。早く会場に行けって。あいつ、電話で叫んでた。それともうひとつ。おまえ、今日は勇人とも『デート』したんだって？ まあ、本城も一緒だつたらしいから、それは許すけど」

そう言つたあと、また彼にぎゅっと抱きしめられる。

しばらく沈黙が続く。点滅するシリーの灯りをぼんやりと眺めていると、背後で彼が大きく息を吸つたような気配を感じた。

そして……。

「……好きだ。ゆうかのことが、ずっと好きだった」

周りの音が何も聞こえなくなつて、行き交つ人の動きもぴたりと止まつて。

彼の声だけが心の奥に沁み渡る。

その意味を理解した時、わたしはまたもや彼の腕の中で息が止まるほど驚いて、そして、大きく目を見開く。

じわっと膨れ上がる涙の粒が、ツリーの灯りを滲ませ、頬を伝い。

重なったわたしと彼の指先に、はらりと舞い落ちた。

Fin

12／26 00：33 ものすごく面白かったです……コメントを下さった、Sさん。

感想をいただき、ありがとうございました。  
嬉しかったです。とても励みになりました。  
こちらを見ていただけていると、いいな。  
これからもがんばりますね。

2／27 15：19 そばについて。。。一度に全て読みきりました。

とてもよかったです。クリスマス番外編も、読み終わって心がほつ  
けつしました…とコメントを下さったHさん。

感想をいただき、ありがとうございました。  
10代のあの頃にもどりたい……。

私もそんな思いを抱きながら、いつも文章を綴っています。^ ^  
またこちらにお立ち寄りいただけると嬉しいです。  
今後ともよろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1329f/>

---

そばにいて

2010年10月26日14時14分発行